

以下については、公開対象から除いています。

pp. 133-160

第3章 科学分析等

第1節 地中レーダー探査実験について

第2節 史跡埼玉古墳群花粉・珪藻・テフラ分析業務委託報告書

第3節 史跡埼玉古墳群（奥の山古墳）テフラ分析業務委託報告書

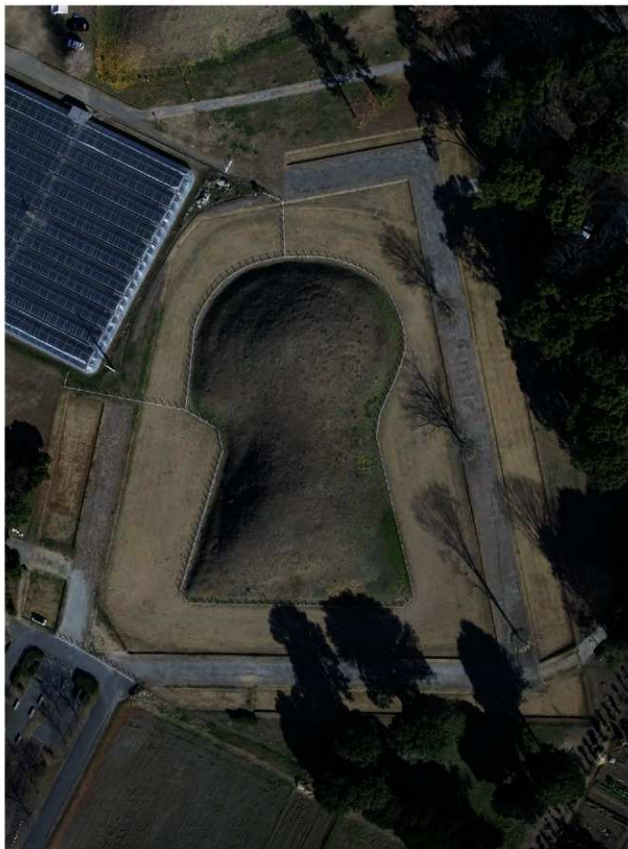
史跡埼玉古墳群

奥の山古墳

発掘調査・保存整備事業報告書

2014

埼玉県教育委員会



整備工事完成後の奥の山古墳（平成24年12月11日撮影）



裝飾付須恵器と高环形器台（造出し都出土）

序

国指定史跡埼玉古墳群は、埼玉県の県名発祥の地とされる行田市埼玉にあり、9基の大型古墳が集まる、全国でも屈指の古墳群として広く知られています。

埼玉県が主体となって、この貴重な古墳群を「さきたま風土記の丘」として整備を始めてから、すでに46年が経過しました。昭和53年には、稲荷山古墳から出土した鉄剣から115文字の金錯銘が発見され、「古代史上、百年に一度の大発見」と大きなニュースになり、昭和58年には「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」として、一括して国宝に指定されました。その後も各古墳の発掘調査を進めており、全国に誇れる歴史公園として、現在も整備を進めています。平成25年6月には約3万8千平方メートルが追加指定され、指定面積が合計26万平方メートルとなりました。これにより、古墳群の一層の保護と整備が可能となりました。

さて、埼玉県教育委員会では平成19年度から25年度まで文化庁の補助金を受けて、奥の山古墳の整備事業を実施いたしました。この古墳は昭和43年度の「さきたま風土記の丘整備事業」の中で、水堀を持つ古墳として整備されましたが、墳丘の浸食が進行し、崩壊が懸念されていたことから、優先して整備することとなりました。

奥の山古墳は埼玉古墳群の前方後円墳の中で唯一、一重の堀とされていましたが、平成19年度から開始した発掘調査により外堀が発見されました。これにより調査・整備計画を見直しながら、平成24年度に整備工事が完了いたしました。

調査の中で墳丘に埴輪列が巡ることや、関東地方では大変珍しい裝飾付須恵器が出土するなど、多くの新事実が判明しました。また、東北大学東北アジア研究センターの御協力のもとに地中レーダー探査を実施したところ、2つの埋葬施設の存在が確認されたことも大きな注目を集めました。

この奥の山古墳の整備により、古墳公園を訪れた方が、郷土の歴史について知識を深め、より一層文化財に親しんでいただければと期待しています。

本書は奥の山古墳のこれまでの発掘調査の成果と整備事業の内容をまとめたものです。埼玉古墳群の保護及び教育、学術の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、発掘調査及び整備事業から本書の刊行に至るまで、御指導・御協力をいただきました文化庁及び史跡埼玉古墳群保存整備協議会を始め、関係各位に心から厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

埼玉県教育委員会教育長

関根 郁夫

例 言

- 1 本書は埼玉県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて実施した、埼玉県行田市埼玉に所在する史跡埼玉古墳群 奥の山古墳の発掘調査・保存整備事業の報告書である。
- 2 発掘調査の期間は平成19年度から平成21年度の3カ年間である。整備工事の期間は平成21年度から平成23年度の3カ年間である。ただし平成23年度工事は次年度に一部繰越して実施した。
- 3 本事業は文化庁文化財部記念物課の指導助言を受け、史跡埼玉古墳群保存整備協議会の検討結果に基づき、埼玉県教育委員会が実施した。
- 4 事業の組織は別表に掲げるとおりである。
- 5 発掘調査の担当者は別表のとおりである。
- 6 遺構の写真撮影は各調査担当者が行った。遺物については巻頭カラーの装飾付須恵器と高坏形器台を福田聖氏が、その他を佐藤が行った。また工事写真については各担当者のほか、施工業者の撮影したものを使用した。
- 7 出土品の整理は佐藤が担当して平成22、23、24年度に復元作業と実測を行い、平成24、25年度に製図と編集、報告書の作成を行った。
- 8 本書の執筆は主に佐藤が行ったが、平成20年度に実施した花粉・珪藻・テフラ分析・報告は株式会社パレオ・ラボに委託したものである。平成21年度に実施したテフラ分析・報告は株式会社火山灰考古学研究所に委託したものである。
- 9 以下の刊行物に本報告と関連する記述、計測値、図版等が掲載されているが、本報告と齟齬がある場合は、本報告の記載が正しいものとする。2007・08・09『奥の山古墳発掘調査現地説明会資料』埼玉県立さきたま史跡の博物館 2008「8.奥の山古墳の調査」『第41回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 2009「9.奥の山古墳の調査」『第42回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 2010「10.奥の山古墳の調査」『第43回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他
- 10 奥の山古墳との新旧関係を把握するために実施した鉄砲山古墳の発掘調査成果については、本報告中に平面図・断面図等を掲載したが、出土遺物等の詳細については、今後刊行する鉄砲山古墳発掘調査報告書に掲載予定である。
- 11 発掘調査から報告書刊行に至るまでの間に下記の方々と機関から御指導、御協力を賜った。
(敬称略・順不同)

文化庁・東北大学東北アジア研究センター・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

行田市教育委員会・行田市土整備事務所

大塚初重・岩崎卓也・三輪嘉六・池上 悟・井守徳男・大谷 徹・栗原文蔵・小林重義・駒宮史朗
酒井清治・佐藤源之・城倉正洋・高橋一夫・鈴木敏則・滝沢 誠・塚田良道・伝田郁夫・富田和夫
中島郁夫・中島利治・中村 弘・平澤 毅・福田 聖・藤野一之・松村恵司・山崎 武・渡邊 学

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

第Ⅰ部 発掘調査とその成果

第1章 発掘調査とその経過

第1節 発掘調査に至る経過と調査の組織	1
第2節 発掘調査の経過	4
第3節 立地と環境	9
第4節 過去に実施された発掘調査の概要	17
第5節 平成19～21年度発掘調査の概要	20

第2章 発掘調査の成果

第1節 I区	25
第2節 II区	42
第3節 III区	52
第4節 IV区	62
第5節 V区	69
第6節 円筒埴輪	71
第7節 形象埴輪	91
第8節 須恵器・土師器	114
第9節 その他の時代の遺物	131

第3章 科学分析等

第1節 地中レーダー探査実験について	133
第2節 史跡埼玉古墳群花粉・珪藻・テフラ分析業務委託報告書	137
第3節 史跡埼玉古墳群（奥の山古墳）テフラ分析業務委託報告書	153

第4章 活用事業

第1節 活用事業	161
----------	-----

第5章 発掘調査のまとめ

第1節 前回調査・整備の問題点	164
第2節 墳丘・周堀について	169
第3節 出土遺物について	174

第Ⅱ部 保存整備工事

第1章 事業計画の策定と協議の経過

第1節 前回の保存整備工事	180
---------------	-----

第2節	史跡埼玉古墳群保存整備基本計画の策定	180
第3節	史跡埼玉古墳群保存整備協議会の設置	183
第4節	史跡埼玉古墳群保存整備協議会の議事内容	184
第2章	基本計画・基本設計・実施設計	
第1節	当初計画	189
第2節	基本設計・実施設計	192
第3章	保存整備事業の経過	
第1節	補助事業に関する手続き	193
第2節	文化財保護法に基づく手続き	193
第3節	概要と経過	193
第4節	年度別事業内容	195
第4章	保存整備工事	
第1節	支障樹木伐採	200
第2節	内堀の埋立工事	203
第3節	復原整備工事（外堀・中堤・内堀の造形・その他）	206
第4節	解説板等設置	209
第5節	出来高測量と航空写真撮影	209
第5章	保存整備工事の今後の課題	
第1節	今後の奥の山古墳整備の課題について	229
第2節	埼玉古墳群整備の長期的課題について	230

挿図目次

第1図	関東地方の主要古墳群と埼玉古墳群	10	第16図	35トレンチ平面図・断面図	33
第2図	周辺の遺跡分布図	13・14	第17図	35トレンチ遺物分布図	34
第3図	埼玉古墳群地図	15	第18図	I区造出し部平面図	36
第4図	昭和43年のトレンチ配置図	18	第19図	造出し部・42トレンチ断面図	37
第5図	昭和43年1トレンチ横断面	18	第20図	39・37トレンチ断面図	39
第6図	年度別調査区	21	第21図	造出し部埴輪分布図	40
第7図	調査区区分け図	22	第22図	造出し部須恵器分布図	41
第8図	奥の山古墳調査区全測図	23・24	第23図	II区平面図（1）	43
第9図	I区平面図	26	第24図	II区平面図（2）	44
第10図	43トレンチ平面図・断面図	27	第25図	II区平面図（3）	45
第11図	38トレンチ平面図・断面図	28	第26図	13トレンチA断面図	46
第12図	41トレンチ平面図・断面図	29	第27図	13トレンチB・C断面図	47
第13図	40トレンチ平面図・断面図	29	第28図	13トレンチD断面図	48
第14図	36トレンチ平面図・断面図	31	第29図	12トレンチE断面図（1）	50
第15図	36トレンチ遺物分布図	32	第30図	12トレンチE断面図（2）	51

第31図	Ⅲ区平面図（1）	53	第69図	須恵器（2）	122
第32図	Ⅲ区平面図（2）	54	第70図	須恵器（3）	123
第33図	22トレンチ平面図・断面図	55	第71図	須恵器（4）	124
第34図	22・24・34・23トレンチ断面図	56	第72図	須恵器（5）・土師器	125
第35図	10トレンチ断面図	57	第73図	須恵器拓本（1）	125
第36図	Ⅲ区平面図（3）	59	第74図	須恵器拓本（2）	126
第37図	18トレンチ遺物分布図	60	第75図	須恵器拓本（3）	127
第38図	17トレンチ断面図	61	第76図	その他の時代の遺物	131
第39図	19トレンチ遺物分布図	61	第77図	その他の時代の遺物分布	132
第40図	Ⅳ区平面図（1）	63	第78図	奥の山古墳水平スライスイメージ	134
第41図	Ⅳ区平面図（2）	64	第79図	探査実験の範囲	135
第42図	Ⅳ区平面図（3）	65	第80図	分析試料の採取位置	141
第43図	2・8・33トレンチ断面図	66	第81図	堀堆積物中の珪藻化石分布図	143
第44図	4・3トレンチ断面図	67	第82図	堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真	144
第45図	4トレンチ遺物分布図	68	第83図	鉄砲山内・外堀試料の花粉化石分布図	148
第46図	31・32トレンチ土層柱状図	69	第84図	鉄砲山古墳の花粉化石	149
第47図	V区平面図	70	第85図	軽石ガラスの屈折率測定結果	151
第48図	円筒埴輪（1）	74	第86図	テフラの実体顕微鏡写真	152
第49図	円筒埴輪（2）	75	第87図	試料採取位置の土層柱状図	157
第50図	円筒埴輪（3）	76	第88図	テフラ写真	158
第51図	円筒埴輪（4）	77	第89図	Hr-FA等の検出層序	160
第52図	円筒埴輪（5）	78	第90図	活用事業参考資料	162
第53図	円筒埴輪（6）	79	第91図	調査成果のダイジェスト版	163
第54図	円筒埴輪（7）	80	第92図	奥の山古墳の変遷	167・168
第55図	円筒埴輪（8）	81	第93図	墳丘推定復元図	171
第56図	円筒埴輪（9）	82	第94図	墳丘盛土等の土量計算	173
第57図	円筒埴輪（10）	83	第95図	普通円筒埴輪の凸帯扁平率	175
第58図	既報告の円筒埴輪（抜粋）	84	第96図	馬形埴輪の類型模式図	176
第59図	形象埴輪（1）	97	第97図	須恵器の推定産地	177
第60図	形象埴輪（2）	98	第98図	装飾付須恵器の類例	177
第61図	形象埴輪（3）	99	第99図	現況（1）（基本計画より）	181
第62図	形象埴輪（4）	100	第100図	現況（2）（基本計画より）	182
第63図	形象埴輪（5）	101	第101図	保存整備協議会検討資料1（抜粋）	186
第64図	形象埴輪（6）	102	第102図	保存整備協議会検討資料2（抜粋）	187
第65図	形象埴輪（7）	103	第103図	整備計画（1）（基本計画より）	190
第66図	既報告の形象埴輪（1）	104	第104図	整備計画（2）（基本計画より）	191
第67図	既報告の形象埴輪（2）	105	第105図	実施設計図（抜粋）	192
第68図	須恵器（1）	121	第106図	伐採平面図（平成21・22年度）	201

第107図	埋立造成平面図（平成21年度）……………	204	第118図	造成平面図（平成23年度）……………	220
第108図	埋立造成横断面図（平成21年度）……………	205	第119図	造成横断面図（平成23年度）……………	221
第109図	年度別工事概略図……………	207	第120図	張芝平面図（平成23年度）……………	222
第110図	造成平面図（平成22年度）……………	212	第121図	施設平面図（平成23年度）……………	223
第111図	造成横断面図（平成22年度）……………	213	第122図	施設詳細図（1）（平成23年度）……………	224
第112図	施設平面図（平成22年度）……………	214	第123図	施設詳細図（2）（平成23年度）……………	225
第113図	標準断面図（平成22年度）……………	215	第124図	史跡標柱詳細図（平成23年度）……………	226
第114図	施設詳細図（平成22年度）……………	216	第125図	古墳解説板詳細図（平成23年度）……………	227
第115図	電気施設平面図（平成22年度）……………	217	第126図	誘導標識詳細図（平成23年度）……………	228
第116図	電気設備詳細図（平成22年度）……………	218	第127図	史跡埼玉古墳群整備イメージ図等……………	231
第117図	仮設計画平面図（平成22年度）……………	219			

表目次

第1表	円筒墳輪観表……………	85～90	第14表	平成19年度の事業工程……………	195
第2表	形象墳輪観表……………	106～113	第15表	平成20年度の事業工程……………	196
第3表	須臾器観察表……………	128～130	第16表	平成21年度の事業工程……………	196
第4表	探査結果一覧……………	135	第17表	平成22年度の事業工程……………	197
第5表	県内の主要箱式石棺の法量……………	135	第18表	平成23年度の事業工程……………	199
第6表	堀堆積物の特徴と分析項目……………	137	第19表	平成24年度の事業工程……………	199
第7表	堀堆積物中の珪藻化石産出表……………	142	第20表	伐採対象樹木一覧……………	202
第8表	花粉化石産出表……………	147	第21表	内堀埋立工事の土量計算書……………	203
第9表	テフラ検出分析結果……………	156	第22表	平成22年度工事の各種数量……………	210
第10表	屈折率測定結果……………	156	第23表	平成23年度工事の各種数量……………	211
第11表	Hr-FA検出一覧……………	160	第24表	史跡埼玉古墳群の調査・整備年表……………	232
第12表	活用事業一覧……………	161	第25表	奥の山古墳保存整備費……………	234
第13表	整備工事の全事業工程……………	194			

写真図版目次

図版1	昭和23年航空写真（国土地理院所蔵）	図版11	I区41・40トレンチ
図版2	昭和23年航空写真（国土地理院所蔵）	図版12	I区40トレンチ
図版3	昭和42年度調査の航空写真	図版13	I区36トレンチ
図版4	昭和42年度調査風景	図版14	I区36トレンチ
図版5	平成20年航空写真	図版15	I区36トレンチ円筒墳輪出土状況
図版6	調査前の奥の山古墳	図版16	I区35トレンチ
図版7	I区43トレンチ	図版17	I区35トレンチ分析サンプリング
図版8	I区38トレンチ	図版18	I区造出し部調査前
図版9	I区38トレンチ	図版19	I区造出し部調査風景
図版10	I区41トレンチ	図版20	I区造出し部遺物出土状況

図版21	I区造出し部遺物出土状況	図版58	円筒埴輪(5)
図版22	I区造出し部遺物出土状況	図版59	円筒埴輪(6)
図版23	I区造出し部42トレンチ出土状況	図版60	形象埴輪(1)
図版24	I区造出し部土層断面	図版61	形象埴輪(2)
図版25	I区造出し部全景	図版62	形象埴輪(3)
図版26	II区航空写真	図版63	形象埴輪(4)
図版27	II・III区航空写真(部分)	図版64	形象埴輪(5)
図版28	II区調査風景	図版65	形象埴輪(6)
図版29	II区13トレンチ調査状況	図版66	形象埴輪(7)
図版30	II区13トレンチ土層	図版67	形象埴輪(8)
図版31	II区27トレンチ	図版68	須恵器(1)
図版32	II区12トレンチ	図版69	須恵器(2)
図版33	III区22トレンチ内堀検出状況	図版70	須恵器(3)
図版34	III区22トレンチ外堀検出状況	図版71	須恵器(4)
図版35	III区15トレンチ他	図版72	須恵器(5)
図版36	III区18トレンチ遺物出土状況	図版73	須恵器(6)・その他の時代の遺物
図版37	III区17・19トレンチ	図版74	平成21年度工事(1)
図版38	III区16トレンチ他	図版75	平成21年度工事(2)
図版39	IV区4トレンチ遺物出土状況他	図版76	平成21年度工事(3)
図版40	IV区4トレンチ	図版77	平成21年度工事(4)
図版41	IV区4トレンチ	図版78	平成22年度工事(1)
図版42	IV区4・3トレンチ	図版79	平成22年度工事(2)
図版43	IV区33トレンチ・V区31トレンチ	図版80	平成22年度工事(3)
図版44	III区25トレンチ他	図版81	平成22年度工事(4)
図版45	II区13トレンチA断面土層	図版82	平成22年度工事(5)
図版46	II区13トレンチB断面土層	図版83	平成22年度工事(6)
図版47	II区13トレンチB断面土層	図版84	支障樹木除去状況
図版48	昭和42年度第1トレンチの再調査	図版85	平成23年度工事(1)
図版49	遺構保護・埋戻し状況	図版86	平成23年度工事(2)
図版50	発掘調査現地説明会風景	図版87	平成23年度工事(3)
図版51	史跡埼玉古墳群保存整備協議会風景	図版88	平成23年度工事(4)
図版52	地中レーダー探査実験	図版89	解説板等製作・設置
図版53	出土遺物接合作業	図版90	整備工事完成写真(1)
図版54	円筒埴輪(1)	図版91	整備工事完成写真(2)
図版55	円筒埴輪(2)	図版92	整備工事完成写真(3)
図版56	円筒埴輪(3)	図版93	整備工事完成後の航空写真(1)
図版57	円筒埴輪(4)	図版94	整備工事完成後の航空写真(2)

付 図

付図1 奥の山古墳出土来高測量図

付図2 重ね合わせ図

第 I 部 発掘調査とその成果

第I部 発掘調査とその成果

第1章 発掘調査とその経過

第1節 発掘調査に至る経過と調査の組織

奥の山古墳は「さきたま風土記の丘整備事業」によって、昭和43年3月に確認調査が実施され、翌44年度からは二子山古墳とともに一重の水堀として整備された。しかし、その後40年以上が経過し、水位変動や生物の営巣等により墳丘の裾部は大きく抉られ、大規模な崩落が懸念された。また水堀が危険であるため、安全対策により堀外側を植栽により全面囲んだことから、古墳の形態がよく見えず、また、周辺は前回の整備で植栽した樹木が大きく育ち、昼なお暗い状況にあった。古墳群の見学者のほとんどは丸墓山、稲荷山古墳が所在する古墳群北側を散策し、南側に位置する奥の山古墳周辺は見学者が非常に少なかった。

以上のことから、平成19年3月に埼玉県教育委員会が策定した「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」において、奥の山古墳の整備を最優先することが決定した。

事業を実施するにあたっては、学識経験者を中心とした「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」を設置し、埼玉県教育委員会を主体に以下のような組織とした。

史跡埼玉古墳群保存整備協議会 委員 (あいうえお順 敬称略 平成19年度～25年度)

青木繁夫 (サイバー大学教授 平成19～25年度)

梅沢太久夫 (元埼玉県立歴史資料館長 平成25年度)

大澤由子 (行田市社会教育委員 平成19～25年度)

大野康夫 (行田県土整備事務所長 平成24・25年)

柿沼幹夫 (元埼玉県立自然史博物館長 平成25年度)

梶島邦江 (埼玉大学教授 平成19～25年度)

佐藤 信 (東京大学大学院教授 平成19～25年度)

塩野 博 (埼玉考古学会会長 平成19～24年度)

須田 勉 (国士舘大学教授 平成19～25年度)

高久健二 (専修大学教授 平成19～25年度)

並木孝之 (埼玉県行田県土整備事務所長 平成19年度)

南沢郁一郎 (行田県土整備事務所長 平成20・21年度)

諸貫貞雄 (元荒川上流土地改良区管理者 平成19～21年度)

山田 清 (元荒川上流土地改良区管理者 平成22～24年度)

横川好富 (埼玉県文化財保護審議会会長 平成19～24年度)

吉田 学 (行田県土整備事務所長 平成22・23年度)

吉野悠一郎 (元埼玉県東松山県土整備事務所副所長 平成19～25年度)

事務局

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 島村 和男（平成18～21年度）

前島 富雄（平成22～25年7月10日）

関根 郁夫（平成25年7月11日～）

事務局（企画・調整）埼玉県教育局生涯学習文化財課長

銭場 正人（平成19年度） 中村 英樹（平成20年度）

牧 恒男（平成21・22年度） 児玉 大輔（平成23年度）

清水 隆（平成24年度） 代島 常造（平成25年度）

文化財活用・博物館、指定文化財保護、埋蔵文化財担当副課長

鈴木 敏昭（平成19・20年度） 浅野 晴樹（平成21・22年度）

杉崎 茂樹（平成23・24年度） 書上 元博（平成25年度）

指定文化財保護担当主幹

岡本 一雄（平成19年度） 田中 英司（平成20年度）

関 義則（平成20年度） 書上 元博（平成21年度）

石坂 俊郎（平成22・23年度） 田中 裕子（平成24年度）

末木 啓介（平成25年度）

指定文化財保護担当主査

関 義則（平成19・20年度） 村田 章人（平成20～22年度）

石坂 俊郎（平成21年度）

事務局（発掘調査・整理・報告）埼玉県立さきたま史跡の博物館

館長 水村 孝行（平成19・20年度） 参事兼館長 藤野 龍宏（平成21年度）

館長 鈴木 敏昭（平成22年度） 館長 井上 肇（平成23年度）

館長 浅野 晴樹（平成24・25年度）

副館長 小口 和夫（平成19・20・21年度） 鈴木 進（平成22～25年度）

総務・管理担当部長 根本 勝（平成19・20年度）

総務・公園管理担当部長 丹羽 龍雄（平成21・22年度） 細井 良正（平成23年度）

志村 進（平成24年度） 大谷 嘉明（平成25年度）

総務・管理担当課長 細井 良正（平成19年度） 岩崎 裕（平成20年度）

総務・公園管理担当課長 岩崎 裕（平成21・22年度） 加藤 浩一（平成23～25年度）

広報・学習支援、資料・展示、史跡整備担当

学芸主幹 中島 宏（平成19・20年度）主席学芸主幹 田中 英司（平成21～23年度）

副館長兼主席学芸主幹 今井 宏（平成24年度） 主席学芸主幹 鈴木 秀雄（平成25年度）

史跡整備担当学芸主幹

井上 高明（平成19～21年度） 西口 正純（平成21・22年度） 関 義則（平成23・24年度）

主任学芸員

石坂 俊郎（平成19・20年度） 西口 正純（平成19・20年度） 末木 啓介（平成22・23年度）

岩田 明広（平成24・25年度） 佐藤 康二（平成21～25年度）

学芸員

堀口 智彦（平成25年度）

発掘・整理参加者（あいうえお順）

○発掘調査

一枚田薫・伊藤彰吾・稲垣自由・内田国男・大久保隆史・大塚和子・大村冬樹・大屋暁
尾堤小春・加藤裕基・木村辰雄・黒川光子・高坂ちよ子・小林鳴美・佐藤弘・澤島徳
柴田寿久・滝沢久子・田中沙紀・中島惇内・中根大志・中村遼・野口忠彦・橋本脩平
長谷尾篤・長谷尾友美・日向祥子・福島永子・前田悦三・村社弘・目黒達磨・茂木一寛
山口千恵・山中弘也・横田隆夫

○報告書作成

菅谷操・木島芳江・室久佳代子

第2節 発掘調査の経過

(1) 平成19年度

① 補助事業及び現状変更等手続き

平成19年4月16日付け教生文第178号で国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書（以下、交付申請書）を文化庁へ提出する。同年6月1日付け19庁財第70号で交付決定が通知される。平成20年3月31日付け埼博第580号で国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書（以下、実績報告書）を文化庁へ提出する。

平成19年7月31日付け教生文第1030号で現状変更許可申請書（発掘調査）を文化庁へ提出する。同年9月5日付け19委庁財第4の825号で許可される。平成20年4月9日付け埼博第28号で現状変更終了届を提出する。

平成19年6月12日付け埼博第142号で文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育長あて提出する。

発掘調査によりコンテナ25箱の出土遺物があったため、平成20年4月2日付けで行田警察署あて埋蔵文化財発見・認定通知を提出する。

② 調査日誌抄録

7月11日 基準点測量開始。史跡埼玉古墳群保存整備協議会を行い、調査前の現地視察を行う。

7月24日 発掘調査スタート。前方部東側コーナ一部に設定した第1トレンチの表土剥ぎを行う。県教育長の視察が行われる。

7月26日 第1トレンチ完掘。覆土はすべて造成土と攪乱であり、遺構は検出されず。

現況の内堀法面に第2トレンチ設定し、調査開始する。

7月31日 第2トレンチ完掘する。法面の表土を除去するとローム層であり、内堀覆土は遺存せず。古墳主軸ラインに第3トレンチ設定し、調査開始する。

8月1日 第3トレンチ南端から黒い落ち込み。あるいは外堀内辺か。第4トレンチ設定し、調査を開始する。

8月1日 第4トレンチ南端からも埴輪片とともに黒い落ち込み検出される。第3トレンチと対応する可能性高い。

8月9日 第7トレンチ完掘する。外堀検出されず。

8月21日 後円部北東コーナ一部に第10トレンチ設定し、調査開始する。

8月24日 外堀が検出された第3、4トレンチを延伸するため、園路脇の植栽撤去を行う。

8月29日 第3トレンチから多数の埴輪片が出土する。

9月18日 鉄砲山古墳との間に設定した第12トレンチの調査を開始する。

9月21日 第12トレンチで鉄砲山古墳の外堀覆土、立ち上がりが検出される。

9月26日 第12トレンチで鉄砲山古墳の中堤検出される。鉄砲山の外堀は異様に幅広い。

10月4日 昭和42年度トレンチを探すため、調査開始。

10月11日 昭和42年度トレンチを検出する。

- 10月12日 第15トレンチで外堀検出される。
- 10月17日 第17トレンチ東側で外堀覆土が検出される。
- 10月19日 重機による表土剥ぎ開始。
- 11月2日 後円部東側に第22トレンチ設定し調査開始。外堀ブランが検出される。
- 11月27日 第17トレンチから埴輪大型破片が多数出土する。
- 12月8日 発掘調査現地説明会を開催する。参加者は午前190名、午後197名の計387名。
- 1月22日 調査再開する。第4トレンチの埴輪集中区の調査を実施する。
- 2月7日 第18トレンチの埴輪集中区の調査を開始する。
- 2月8日 東側外堀北端の第25トレンチ内は全面攪乱であることが判明する。
- 2月13日 史跡埼玉古墳群保存整備協議会が開催され、現地視察が行われる。
- 2月21日 第12トレンチ鉄砲山古墳外堀で厚さ2～3cmの火山灰層を検出する。
- 3月13日 調査区全景、個別の写真撮影を実施する。
- 3月14日 重機による埋め戻しを開始する。
- 3月25日 重機による埋め戻し終了する。
- 3月27日 機材撤収し、調査を終了する。

(2) 平成20年度

① 補助事業及び現状変更手続き

平成20年2月27日付け教生文第2556号で交付申請書を文化庁へ提出する。同年4月1日付け20
 庁財第2号で交付決定が通知される。

調査の進捗により新たに発見された内堀の空中写真撮影や火山灰分析等を実施するため同年12
 月22日付け埼博第371号で計画変更承認申請書を提出する。平成21年1月29日付け20委庁財第15
 の227号で計画変更の承認の旨、通知される。

平成21年3月31日付け教生文第539号で実績報告書を文化庁へ提出する。

平成20年4月16日付け教生文第188号で現状変更許可申請書(発掘調査)を文化庁へ提出。同年
 5月28日付け20委庁財第4の87号で許可される。平成21年4月13日付け埼博第54号で現状変更終
 了届を提出する。

平成20年5月6日付け埼博第58号で文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の
 通知を県教育長あて提出する。

発掘調査によりコンテナ71箱の出土遺物があつたため、平成21年3月31日付けで行田警察署あ
 て埋蔵文化財発見・認定通知を提出する。

② 調査日誌抄録

- 5月13日 テント設営し、発掘調査を開始する。第12トレンチの東側の拡張を開始する。
- 5月22日 外堀南側に第20トレンチを設定し、調査を開始する。
- 5月27日 第20トレンチ完掘する。ローム面の遺存状況は良好だが外堀は検出されず。
- 6月4日 第14トレンチの西側を拡張し、調査を開始する。

- 6月10日 第14トレンチ拡張区で鉄砲山古墳外堀内辺が検出される。
- 6月11日 第14トレンチ拡張区で鉄砲山古墳内堀外辺が検出される。
- 7月3日 外堀北東コーナー想定区域に第24トレンチを設定し、調査を開始する。
- 7月9日 前年度調査した第22トレンチを再発掘・拡張を行う。
- 7月10日 第22トレンチ拡張区で外堀プランを検出する。
- 7月20日 遺跡発掘調査報告会で前年度調査成果を発表する（埼玉考古学会等と共催）。
- 7月24日 前年度未検出の外堀南側コーナー検出のため第21トレンチの調査を開始。
- 7月27日 第41回遺跡発掘調査報告会で調査成果の発表を行う。
- 7月30日 第21トレンチからは外堀は検出されず。第20トレンチで検出された溝跡が延伸することが判明する。
- 8月8日 第13トレンチの鉄砲山古墳墳丘裾部の調査を開始する。
- 8月18日 重機による排土移動、表土掘削を開始する。
- 8月19日 第12トレンチの鉄砲山古墳裾部の調査を開始する。
- 8月29日 昭和42年度トレンチの再発掘を開始する。
- 9月5日 第22トレンチで内堀と思われるプランが検出される。
- 9月10日 第22トレンチで内堀プランを確定する。立ち上がりラインの精査を開始する。
- 9月25日 内堀覆土及び底面を確認するため、第27トレンチを設定し調査する。
- 10月25日 発掘調査現地説明会を実施する。参加者は計390名であった。
- 11月12日 第23トレンチで内堀プラン検出のため精査を行う。
- 11月20日 第23トレンチの内堀の遺存状況が悪いため、拡張して調査を行う。
- 12月2日 第12トレンチの根切溝を掘り上げる。
- 12月12日 第24トレンチの僅かに残存した内堀覆土の精査を開始する。
- 1月14日 文化庁記念物課調査官の視察が行われる。
- 1月21日 第12、13トレンチの鉄砲山古墳の墳丘裾部について裁ち割り調査を実施する。
- 2月12日 第27トレンチを東へ拡張し調査を実施する。
- 2月17日 第22トレンチの外堀精査を終了する。
- 3月3日 花粉等分析のサンプリングを実施する（委託業務）。
- 3月11日 各区の写真撮影を行い、遺構保護のための砂入れを開始する。
- 3月26日 埋め戻し終了し、調査を終了する。

（3）平成21年度

① 補助事業及び現状変更等手続き

平成21年4月6日付け教生文第47号で交付申請書を文化庁へ提出する。同年6月1日付け21年財第6060号で交付決定が通知される。平成22年3月30日付け埼博第467号で実績報告書を文化庁へ提出する。

平成21年5月19日付け埼博第115号で現状変更申請書（発掘調査）を文化庁へ提出する。同年6

月19日付け21委庁財第4の6362号で許可される。平成22年3月4日付け埼博第444号で現状変更終了届を提出する。

平成21年6月11日付け埼博第163号で文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育長あて提出する。

発掘調査によりコンテナ35箱の出土遺物があったため、平成22年3月5日付けで行田警察署あて埋蔵文化財発見・認定通知を提出する。

② 調査日誌抄録

- 7月1日 発掘調査を開始する。今まで未検出の西側の外堀を検出するために、第31トレンチを設定し調査を開始する。
- 7月3日 「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」を行う。奥の山古墳の現地視察を行う。
第31トレンチは現地表下1.2mで旧水田面が検出されるが、その0.3m下は地山ローム面であることが判明する。外堀は検出されなかった。
- 7月7日 第3、4トレンチで検出された北側外堀の推定延伸部に予想される区域に第33トレンチを設定し、調査を開始する。
- 7月9日 第33トレンチで外堀覆土と想定される黒褐色土が検出されたため、トレンチを拡張し、調査を進める。前年度調査で未検出であった外堀北東コーナ一部を検出を目的に第34トレンチを設定し、調査を開始する。
- 7月14日 第33トレンチで検出された外堀の遺存部を壊す状況で平安時代の溝跡があることが確認される。
- 7月15日 墳丘造出し部の調査のため、仮設架橋の作業を開始する。
- 7月17日 第34トレンチ完掘する。外堀は検出されなかった。
- 7月21日 造出し部の調査区を設定し、調査を開始する。
- 7月23日 墳丘東側くびれ部に第35トレンチを設定し調査を開始する。
- 7月26日 遺跡報告会（埼玉考古学会共催）関連の現地説明会を実施する。
- 7月29日 造出し部の1回目の遺物出土状況の作図を行う。
- 7月30日 墳丘西側くびれ部に第36トレンチを設定し調査を開始する。
- 8月18日 第36トレンチの中段部で出土遺物が多いため、拡張して精査する。
- 8月19日 前方部主軸に沿って第38トレンチを設定し、調査を開始する。
- 8月20日 第38トレンチにおいて旧表土面からなる幅狭のテラスを検出する。
- 8月27日 造出し部のつけ根部分に第39トレンチを設定し、調査を開始する。
- 9月1日 前方部コーナ一部の墳丘の遺存状況を確認するため、第40、41トレンチを設定し調査を開始する。
- 9月3日 後円部主軸に沿って第43トレンチを設定し、調査を開始する。
- 9月4日 第38トレンチの墳丘盛土の裾部と旧表土について、調査を実施する。
- 9月8日 造出し部、第39トレンチの調査が概ね終了し、写真撮影を行う。
- 9月11日 本日から発掘調査を一時休止する。

- 10月9日 発掘調査再開する。
- 10月12日 発掘調査現地説明会を開催する。事前の新聞掲載等の効果により午前501名、午後370名、計871名であった。
- 10月15日 本日より埋め戻し作業を開始する。また、造出し部のつけ根部分のさらなる確認のため第44トレンチを設定し、調査を開始する。
- 10月16日 第36トレンチの中段テラスから出土した円筒埴輪を取り上げた際に、隣からも円筒埴輪が検出される。記録をとり、取り上げずに保護して埋め戻す。
- 10月23日 内堀の遺存状況の良い第35トレンチの土壌のテフラ分析のためサンプリングを行う（委託業務）。
- 10月29日 調査を終了する。
- 12月4日 「埼玉県史跡整備研修会」を行い、奥の山古墳の復原整備の概要説明および整備状況の視察を行う。参加者33名。
- 3月4日 「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」を行い、現地視察を行う。

（４）平成22年度

出土遺物の接合、復元作業等を実施する。

（奥の山古墳の整備工事を行う。鉄砲山古墳の発掘調査を開始する。）

7月22日 第43回遺跡発掘調査報告会で調査成果の発表を行う。

7月30日 史跡埼玉古墳群保存整備協議会が開催され現地視察が行われる。

12月5日 「埼玉県史跡整備研修会」を行い、整備状況の視察を行う。参加者は29名。

（５）平成23年度

墳丘造出し部出土の遺物の接合、復元作業を進めたところ、県内初発見となる装飾付須恵器であることが判明した。7月に報道発表（資料提供）を行い、新聞に掲載される。7月16日から開催した平成23年度最新出土品展に装飾付須恵器等の資料を出品する。12月6日に「埼玉県史跡整備研修会」を行い、奥の山古墳の整備状況の視察を行う。参加者は24名。（奥の山古墳の整備工事を行う。鉄砲山古墳の発掘調査を継続する。）3月13日に史跡埼玉古墳群保存整備協議会が開催され現地視察が行われる。

（６）平成24年度

遺物実測、トレース、遺構図版作成等の報告書作成作業を行う。

（奥の山古墳の整備工事を行い終了する。二子山古墳1工区の内堀埋立工事に着手する。鉄砲山古墳の発掘調査を継続する。）

（７）平成25年度

原稿執筆、遺物写真撮影等を行い、報告書を刊行する。

（二子山古墳の発掘調査に着手する。鉄砲山古墳の発掘調査を継続する。二子山古墳2工区の内堀埋立工事を行う。）

第3節 立地と環境

(1) 埼玉古墳群の位置

埼玉古墳群は第1図のとおり、関東地方の中央に位置する。北に利根川が東流し、南には荒川が西から南に流れている。行田市街地の東南約2.5kmの所にある。行田市から羽生、加須市周辺は加須低地と呼ばれ、大宮台地が北へ延びて鴻巣市周辺までは低地との比高差が明確であったものが、これより北方では、徐々に低くなり、利根川、荒川の氾濫による沖積土の堆積作用によって、埋没ローム台地となっている。ただし関東造盆地運動の作用を考慮すると、現地形のような微高地ではなく、比高差のあるローム台地基盤の地形であったとも考えられている。古墳群周辺の標高は18m程であり、周囲は水田および宅地となっている。現状では、古墳群は周囲より微高地状に高くなった部分にあるが、行田市街地の忍城跡周辺や小針沼等の埋め立て用に土取りされた後に、水田として利用されたため、比高差を生じたものが多く、注意が必要である。

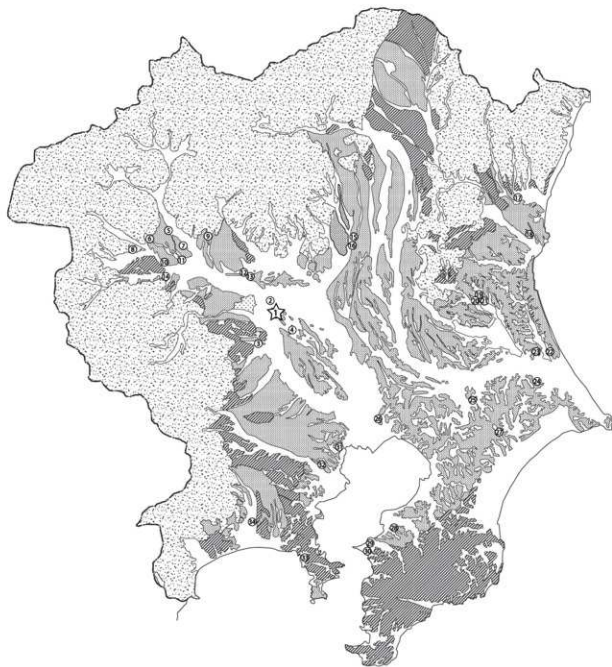
行田市周辺地域では、弥生時代中期後半から後期の遺跡が皆無に等しい。近年の研究では、かつては大宮台地の西側を流れていた利根川の流路が、この時期に大宮台地を超えて台地東側に流路が変遷したと推測されている。弥生時代後半は利根川の乱流地帯であった可能性が高い。ところが古墳時代前期になるとS字甕を伴う小規模な集落が出現することから、肥沃な低地を対象とした開発が開始されたと考えられている。

利根川、荒川の二大河川の当時の流路については研究が進められている。古墳時代後期に榛名山の火山活動により利根川に流入した角閃石安山岩の転石の分布状況から当時の利根川流路が推定されている(秋池2000)。それによれば、星川が行田市左岸で分流し、埼玉古墳群東方を通過して加須市(旧騎西町西方)から蓮田市で元荒川に流入する流れが転石の見つかる最西端の流路であるとされる。また、元荒川で検出される転石は星川と古隅田川からの流入の結果であり、荒川、入間川、元荒川には基本的には転石は認められないとされる。したがって角閃石安山石の転石の分布状況からは、6世紀中ごろの利根川は行田市南河原付近でまっすぐ南下していたことになる。

これらのことから当時の荒川は利根川に流れ込む支流で、利根川自体も低地部では複数の流路が錯綜し、その一部が埼玉古墳群周辺を通過していたとの推定もされている。また、埼玉古墳群の造営時期である5世紀後半から7世紀前半の百数十年の期間内でも、利根川の流路が変遷したとの指摘もある(柿沼他2011)。

また関東地方の古墳時代後期の主要古墳群、前方後円墳との位置関係について第1図のとおりである。群馬県域を概観してみると、埼玉古墳群と同時期のものとしては5世紀後半～6世紀初頭に築造された高崎市保渡田古墳群、6世紀前半～後半に築造された前橋市大室古墳群が所在する。さらには高崎市八幡観音塚古墳、綿貫観音塚古墳等の6世紀末の古墳は、いずれも直線距離で40～55kmの位置にある。次に栃木県域を見ると5世紀後半～6世紀前半に築造された小山市摩利支天塚古墳、琵琶塚古墳が北東に位置する。

南に転じて千葉県域の東京湾東岸地域には姉ヶ崎古墳群、内裏塚古墳群、あるいは石棺に緑泥片岩が用いられた金鈴塚古墳が所在する。これらの東京湾東岸地域の大規模古墳群と埼玉古墳群との



- | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|
| 埼玉県 | 11 納賢観音山古墳 | 21 三味塚古墳 | 東京都 |
| 1 埼玉古墳群 | 12 別所茶臼山古墳 | 22 宮中野台古墳群 | 31 芝丸山古墳 |
| 2 小見真観寺古墳 | 13 太田天神山古墳 | 23 大生古墳群 | 32 荏原台古墳群 |
| 3 野本将軍塚古墳 | 14 白石古墳群 | 千葉県 | 神奈川県 |
| 4 栢山天王山塚古墳 | 栃木県 | 24 城山1号墳 | 33 長柄桜山1号墳 |
| 群馬県 | 15 琵琶塚古墳 | 25 竜角寺古墳群 | 34 宮前中里H5号墳 |
| 5 船社古墳群 | 16 摩利支天塚古墳 | 26 法皇塚古墳 | |
| 6 保瀬田古墳群 | 茨城県 | 27 芝山古墳群 | |
| 7 広瀬古墳群 | 17 梵天山古墳 | 28 姉崎古墳群 | |
| 8 八幡観音塚古墳 | 18 虎塚古墳 | 29 金鈴塚古墳 | |
| 9 大室古墳群 | 19 舟塚古墳 | 30 内裏塚古墳群 | |
| 10 浅間山古墳 | 20 舟塚山古墳 | | |

第1図 関東地方の主要古墳群と埼玉古墳群

関係が深いことが指摘されている。また、鴻巣市生田塚産の埴輪を出土した法皇塚古墳は、ちょうど中間地点に位置する。関東地方の主要古墳群の分布状況からは、北関東と南関東を結ぶ、河川交通の要の位置と言えよう。

(2) 周辺の遺跡

ここでは埼玉古墳群を中心として、周辺古墳および関連する遺跡について概観する。第2図には埼玉県内に所在する墳丘長90m以上の前方後円墳と直径80m以上の円墳がすべて所収している。前方後円墳の墳丘規模では県下最大の埼玉古墳群二子山古墳(138m)から9位の若王子古墳(跡)(92m)までが埼玉古墳群を中心に半径14kmの範囲内に収まる。

埼玉古墳群から4km圏内には、埼玉古墳群を構成する8基とその他9基の前方後円墳が所在する。県下に約130基の前方後円墳の所在からすると、13%であるが、70mを超える前方後円墳のおよそ50%にあたる12基が、この圏内に収まる(荒神山古墳等、若小玉古墳群は推定規模)。

埼玉古墳群の東700mには若王子古墳跡が所在する。昭和9年頃、墳丘は削平されたが、昭和23年撮影の航空写真に前方後円形のソイルマークが写し出されていた。確認調査を実施したところ、ソイルマークとほぼ一致して墳丘プランが検出され、墳丘長は92mであることが判明した(今後報告予定)。

2km北にある若小玉古墳群は、100基以上の古墳が存在していたとも言われる。八幡山古墳は長大な横穴式石室と夾棺椁片出土で有名である。古墳時代終末期において最大級の円墳である。また三宝(方)塚、愛宕山、荒神山、笹塚・稲荷塚古墳など4基以上の前方後円墳の存在が推定されており、時期的には埼玉古墳群と並行すると考えられている(太田2007)。若小玉古墳群の北1kmには墳丘長102mを誇る小見真観寺古墳と50mの虚空蔵山古墳が所在する。

埼玉古墳群の東4kmに位置する真名板高山古墳は、関東造盆地運動によって3m埋没していることが判明し、墳丘長127mに及ぶ前方後円墳と推定される。周堀の形態は盾形の二重周堀と推定されている(塚田・中島1997)。この墳丘規模は県下最大の二子山古墳に次ぐ大きさである。

これら埼玉古墳群の4km圏内の若王子、小見真観寺、真名板高山古墳という100m級の前方後円墳のあり方については、6世紀前半には目立った大型古墳が存在しない地点に新たに造営を開始した古墳であり、埼玉古墳群との関係が注目される(関2013)。

8km圏内を目を転じると、北北西方向には、稲荷山古墳に先行する可能性があるとやま古墳が所在する。さらには豊富な形象埴輪の出土で知られる酒巻14号墳をはじめとする酒巻古墳群が位置する。さらには荒川の対岸には、とうかん山古墳、あるいは丸壺山古墳に匹敵する規模の円墳甲山古墳も圏内に入る。

13km圏内を目を転じると、南東には墳丘長107mの久喜市天王山塚古墳を主墳とした柘間古墳群が位置する。北東には墳丘長73mの羽生市永明寺古墳が所在する。また南南東には東松山市野本將軍塚古墳が所在する。野本將軍塚古墳周辺には県内で初めて三角縁神獣鏡が出土した高坂古墳群、多くの外来系土器や玉造工房が発見された反町遺跡、あるいは学史上有名な五領遺跡なども近い。野本將軍塚古墳の時期は確定していないが、付近には前方後方墳も含め、古墳時代前期の主要な遺跡が集中していることは確かである。

次に埴輪窯跡を概観してみると、南東8kmに鴻巣市生田塚窯が所在する。本窯は関東地方最大級の埴輪窯跡であり、5世紀末から6世紀末まで操業していたと考えられている。40基の窯の他、埴輪生産関係の遺構が多数検出されている。本窯は埼玉古墳群への供給のために操業が開始されたと考えられているが、千葉県市原市の山倉1号墳、神奈川県横浜市の北門1号墳等、遠隔地への供給が判明している。

鴻巣市馬室埴輪窯は南東10kmの位置にある。生田塚埴輪窯跡からは約3kmの至近距離にある。10～13基の窯が検出されており、小型の円筒埴輪や形象埴輪が生産されている。生田塚窯産と製作技術や表現技法が近似しているとされ、同時期に操業していた両者は何らかの関係性があったと考えられている。

10km南南東には吉見町と名埴輪窯跡が所在する。現在までに6基の窯跡が確認されている。灰原からは大型の円筒埴輪、家形埴輪、人物埴輪等が多数出土している。行田市酒巻14号墳出土の力士埴輪は本窯産のものと酷似していることから、本窯産の埴輪は吉見丘陵や松山台地等、至近距離の古墳以外にも供給されたことが判明している。両遺跡は直線距離で15km離れる。

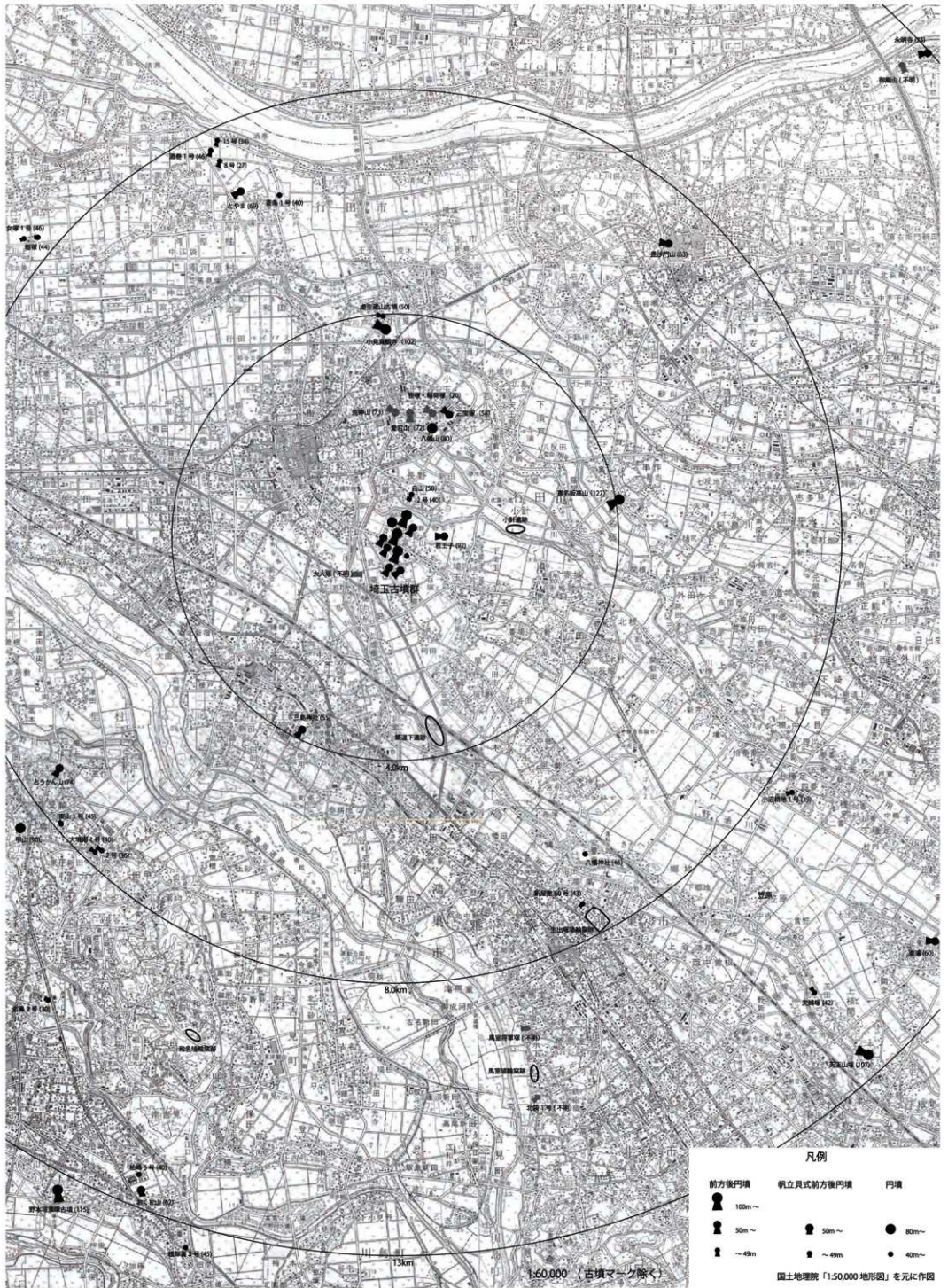
第2図の範囲外となるが、東松山市桜山窯は野本將軍塚の南西4km、埼玉古墳群から約17km地点に位置する。6世紀前半から後半の操業時期が考えられている。17基の埴輪窯跡の他、2基の須恵器窯や工房も検出されている。調査で出土したものは、小型の円筒埴輪が多く、馬形埴輪、人物埴輪も出土している。近年の研究で、桜山窯産の供給先については埼玉古墳群二子山古墳、吉見町三ノ耕地遺跡、行田市大入塚古墳等が指摘されている。また、窯跡は未検出だが、桜山窯周辺で製作された埴輪の埼玉古墳群への搬入が注目されており（城倉2011a）、今後の発見が期待される。ちなみに埼玉古墳群中の山古墳に須恵質埴輪壺を供給した末野窯は、西30kmに位置する。

次に「埼玉の津」の候補地として名前の挙がる行田市築道下遺跡は、埼玉古墳群南方約3km、現在の元荒川左岸に面した遺跡である。湾入する低地を囲むように広がり、数百軒の堅穴住居跡と二百棟を超える建物跡が検出されている、同じく候補地である行田市小針遺跡は旧小針沿岸の遺跡で、建物跡10棟、大型堅穴住居跡が検出されている。また「大部鳥麻呂」の刻書のある紡錘車の出土も注目されている。両者のいずれか、あるいは未検出の「埼玉の津」遺跡を決定するためには今後、先述した当時の河川流路の研究の進展とともに人工の運河等の発見が期待される。

最後に『日本書紀』巻一八の安閑天皇の条に記された「武蔵国造の乱」の記述に見える武蔵国造「笠原」との関連が指摘される鴻巣市笠原は埼玉古墳群の南東9kmの位置にある。周辺の遺跡との距離は天王山塚古墳、生田塚埴輪窯跡いずれからも3kmの位置にある。ただし鴻巣市笠原周辺を含め、豪族居館に比定される遺跡は未だ発見されていない。

（3） 埼玉古墳群の構成

埼玉古墳群は稲荷山古墳、二子山古墳等の前方後円墳8基、直径105mの大円墳である丸墓山古墳および小円墳からなる。残念ながら墳丘は遺存しないが、方墳の戸場口山古墳、現在、前玉神社が鎮座する浅間塚古墳も本古墳群に含まれて考えられている。また稲荷山古墳の北北東には白山古墳群が所在する。現況では、両古墳群の間には旧忍川が存在するが、近世の開削の可能性が高いことから、白山古墳群を埼玉古墳群に含める意見もある（中村2012）。



第2図 周辺の遺跡分布図



第3図 埼玉古墳群地図

白山古墳群を含め、かつては周辺には小円墳が数十基あったとされるが、墳丘の遺存するものは少ない。ただし発掘調査により周堀内径で12～30m程度であることが判明している。隣接地域の円墳と比較すれば決して小さくない。出土遺物からは稲荷山古墳直後の6世紀前半の円墳もあることから、埼玉古墳群造営に関係する被葬者が指摘されている。なお、近年の調査で稲荷山古墳東側のソイルマークについて調査を実施したところ、周堀が遺存することが判明したことから埼玉8～10号墳と名称を付した（佐藤2012）。

埼玉古墳群を構成する各前方後円墳については主軸方向や造出し形態、他地域の二重周堀の類例等多くの研究が進められてきた。それら研究の前提となる古墳の築造順については、近年の研究成果及び発掘調査成果により、議論が活発化してきている。代表的なものとして、二子山古墳と丸墓山古墳の前後関係、鉄砲山古墳と將軍山古墳の前後関係である(城倉2011b)。

鉄砲山古墳については平成22年度から整備に伴う発掘調査を開始しているが、角閃石安山岩を使用する横穴式石室の可能性が高くなった。さらには丸墓山と二子山古墳の前後関係と同様、円筒墳輪の分析により將軍山古墳に後出することも指摘されており、いずれも今後の整備に伴う発掘調査により判明する日も近いと思われる。

さらには、今回報告のとおり、一重の盾形周堀と考えられてきた奥の山古墳が長方形の二重周堀であることが判明したこと、鉄砲山古墳の西側については三重周堀の可能性があること等、調査により多くの新知見が得られている。

今後は、発掘調査及び出土遺物の分析はもちろん、当時の流路変遷や古環境の解明等、学際的な研究を体系的に進める必要がある。

本節の引用・参考文献

秋池 武 2000「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第21号

柿沼幹夫・清水康守他2011「座談会 荒川の流路と遺跡」『熊谷市史研究』第3号

塚田良道・中島洋一1997「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告』第4集

太田博之2007「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15 雄山閣

城倉正祥a2011「北武蔵の墳輪生産と埼玉古墳群」『科学研究補助金 研究成果報告書』奈良文化財研究所

城倉正祥b2011「埼玉古墳群の墳輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第8号

佐藤康二2012「平成22年度埼玉古墳群周辺確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第6号

塩野博 『埼玉の古墳』2004 さきたま出版会

関 義則 2013「埼玉古墳群の構造変遷」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第7号

中村倉司 2012「加蓋披余の本貫地」『埼玉考古』第47号

さきたま史跡の博物館2013「鉄砲山古墳 発掘調査現地説明会資料」

第4節 過去に実施された発掘調査の概要

(1) 整備前の状況

埼玉古墳群の記述は江戸時代から地誌や絵図に記載されているが、奥の山古墳に関しての詳しい記載は『史蹟埼玉』(高木1936)が初出である。そこには前方部高さ6m弱、後円部高さ5m強、前方部幅37m弱、後円部幅37m強、墳丘長67mの計測値とともに「中の山の西方約135mの地にあり、前方後円墳で近年石器時代の土器の破片を出せり」との記述がある。

埼玉古墳群は行田市が誕生する前は、埼玉村と渡柳村にまたがって分布していた。渡柳村に所在する古墳について、東側から順に「戸場口山」、「中の山」、「奥の山」という名称で呼ばれていたことが、現在の古墳名称となっている。

なお、奥の山古墳は、前方部が破壊された稲荷山古墳や主体部が地元住民により発掘調査された將軍山古墳、あるいは石棺のようなものが発見されたため「唐櫃山」と呼ばれた中の山古墳のような、調査歴や伝承、削平記録は知られておらず、以下に記す昭和43年3月が初調査であった。整備前の状況については第4図の測量図と写真図版1～4が参考となる。

(2) 前回調査の経緯

さきたま風土記の丘整備事業は昭和42年10月から園路の造成工事等が開始され、それと並行して各古墳の調査が実施された。国宝金錯銘鉄剣が出土したことで知られる稲荷山古墳の調査は昭和43年8月であったが、それに先立って昭和42年度末に二子山古墳、奥の山古墳、鉄砲山古墳のトレンチ調査が実施された。二子山古墳と奥の山古墳が調査対象に選ばれたのは、翌昭和43年度からの両古墳の周堀復原工事に先立ち、周堀の位置の確認を目的としたものであった。

以下、既報告と一部重複するが、今回報告と密接に関係するために、触れておきたい。また当時の調査日誌が保存されており、その内容についても報告する。

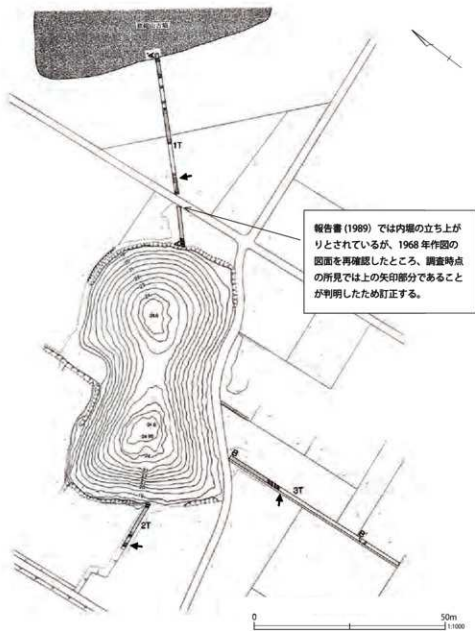
(3) 調査成果

奥の山古墳の調査は昭和43年3月7日から開始された二子山古墳の墳形確認調査と並行して進められた。すでに二子山古墳の調査もほぼ見通しのついた3月15日から、調査の主力を鉄砲山古墳、奥の山古墳に展開し、両古墳の周堀確認調査に着手した。

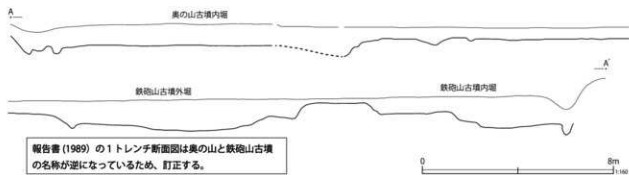
奥の山古墳では3本のトレンチが設定された。第1トレンチは後円部北側に、鉄砲山古墳前方部との間を結ぶ長さ51mのトレンチである。両古墳間には農道が通るため、トレンチを貫通することが出来ず、農道によって区切られた南部分を奥の山第1トレンチ、北部分を鉄砲山第4トレンチと呼称した。第2トレンチは前方部南側に設定した。畑地の現地形の区画に合わせたため、古墳の主軸から若干ずれている。第3トレンチは前方部東側に設定したが、同様の理由により、古墳の主軸に直交するものとはならない。この3本のトレンチ調査成果を踏まえて、奥の山古墳は昭和43年度に一重の周堀に復原された。

(4) 調査日誌から見た奥の山古墳の調査

昭和43年度の調査日誌を改めて確認すると、約20名の調査参加者によって昭和43年3月7日から3月26日の期間、計20日間の調査で二子山古墳、鉄砲山古墳、奥の山古墳、さらには埼玉古



第4図 昭和43年3月のトレンチ配置図(既報告に加筆)



第5図 昭和43年1トレンチ横断面(既報告を修正して作図)

墳群に近い集落跡である陣場遺跡の調査を行っている。

奥の山古墳については3月19日に奥の山古墳1T、3月20日に2T、3Tの調査を実施している。まず第1トレンチの所見だが、2名の所見が残っている。

3月19日記録

「鉄砲山古墳と奥の山古墳に於ける新旧関係を確認すべく、それ等古墳をつないで51m、幅1mのトレンチを設定し調査を行った。(略)周濠のプランを確認できた。それらはいずれもローム層を切り込んで築かれ、その上部は褐色土層、耕作土層の堆積を見る、それらを見ると鉄砲山古墳と奥の山古墳に於ける土層上からの新旧関係をみきわめるのは困難のようである。それらを見ると鉄砲山古墳と奥の山古墳に於ける周濠の幅が西側のそれと比べ、巾が狭く、奥の山古墳を意識して築造された可能性を考える事ができるのではないか。(略)」

「(略)周濠の深さは-87cm程度であった。遺物としては奥の山Tの方は、4、5片円筒埴輪が出土。鉄砲山と比べ、非常に少ない。」

3月20日の日付で下記のとおり、1名の所見が記されている。

「奥の山古墳より南50mの地点に幅1m、長さ29mのトレンチを設定した(2T)。また奥の山古墳東側に3Tを設定する。これらは古墳の周濠の確認と住居跡を探すために設けた。3Tは道路より東側15mの点で周濠が終わり1Tで確認した長さほどで同じ程度であった(略)。」

以上が、調査日誌の記録である。

第2章のとおり、昭和43年の調査で設定した3本のトレンチは、いずれも外堀の遺存状況が悪い場所であったことが惜まれる。しかし、調査時の所見で、僅かなトレンチ調査にも関わらず、鉄砲山古墳との重複関係を意識していたことは重要である。また、第2章第3節のとおり、後円部北東側で内堀の遺存部分が発見されたが、実は昭和43年の1Tで、内堀の立ち上がりを正しく認識していたことが、保存されていた平板測量図面によって確かめることができた(第4図の矢印部分が当時認識された周堀境界線)。つまり、昭和43年度に整備された周堀形態のうち、北東側は調査成果を反映せずに復原されたことが判明した。恐らく当時の園路計画を優先した結果として、丸みを帯びた周堀ラインに設計した可能性がある。

(5) 出土遺物

既刊行の報告書所収の遺物については、そのほとんどが工事中の発見とされ、大半は周堀の整備の過程で墳丘の北側から西側で採集されたものとされる。今回報告で、同一個体と推定される家形埴輪をはじめ、同一個体の可能性がある遺物が出土したので、主要遺物については58、66、67図に転載した。

本節の引用・参考文献

高木豊三郎 1936『史蹟埼玉』埼玉村教育会

駒宮史朗他 1989『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』「埼玉古墳群発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会

第5節 平成19～21年度発掘調査の概要

(1) 平成19年度

平成19年度から奥の山古墳の発掘調査を開始した。調査前の計画では平成19年度～20年度上半期にかけて発掘調査を実施し、20年度下半期から21年度にかけて周堀を埋め立てて、若干の修景工事を行うものであった。発掘調査の主要な目的として、以下の2点が掲げられた。

①一重の周堀は、埼玉古墳群の前方後円墳の中では奥の山古墳のみである。それが確実であるか再確認する。

②隣接する鉄砲山古墳の周堀との位置関係を確認する。

しかし平成19年度に設定し、調査したトレンチから外堀が検出されたことにより、調査、整備とも大幅な変更が必要となった。すなわち、外堀全体の位置と遺存状況の確認を行い、その結果を踏まえて内堀と合わせて外堀も復原整備することとなった。

(2) 平成20年度

平成20年度は、新たに検出された奥の山古墳の外堀と鉄砲山古墳外堀との位置関係を確認するために、Ⅱ区に面的な調査区を設定し、両者の関係把握を目的とした調査を実施した。

その結果、外堀同士は極めて近接することが判明したが、最も接近する箇所については、近世以降の溝に壊されており、重複関係は不明であった。また、内堀についても前回の復原形態と本来の内堀の形態も大きく異なることが判明した。コーナー部はほぼ直角に曲がりながらも、鉄砲山古墳の短軸に平行となる方向に歪むことが判明した。これにより盾形の一重周堀から、歪みながらも台形の二重周堀を有することが判明した。さらには現状では把握できなかった内堀底面も部分的に確認することができた。

(3) 平成21年度

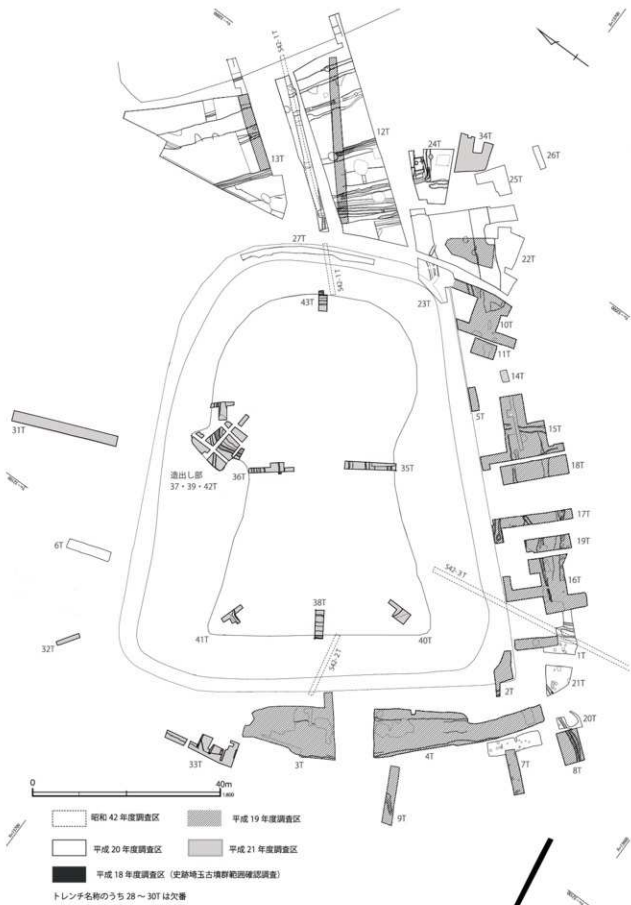
平成21年度は、墳丘を中心に調査を実施した。また外堀の遺存箇所の範囲を確認するための補足調査を行った。墳丘については、整備工事は及ばないことから、最低限のトレンチ設定による調査を行った。墳丘調査の目的として①「墳丘規模及び形態の確認」、②「造り出し部の形態の確認」の二点に絞り調査に着手した。

墳丘規模については、従来墳丘長約70mとされてきたが、内堀立上がり、墳丘盛土、両者の間にある幅70cm前後の狭い平坦面との関係から、約4m小さい、66mであることが判明した。また、くびれ部については、特に東側において約5mも墳丘が内側になることが判明した。

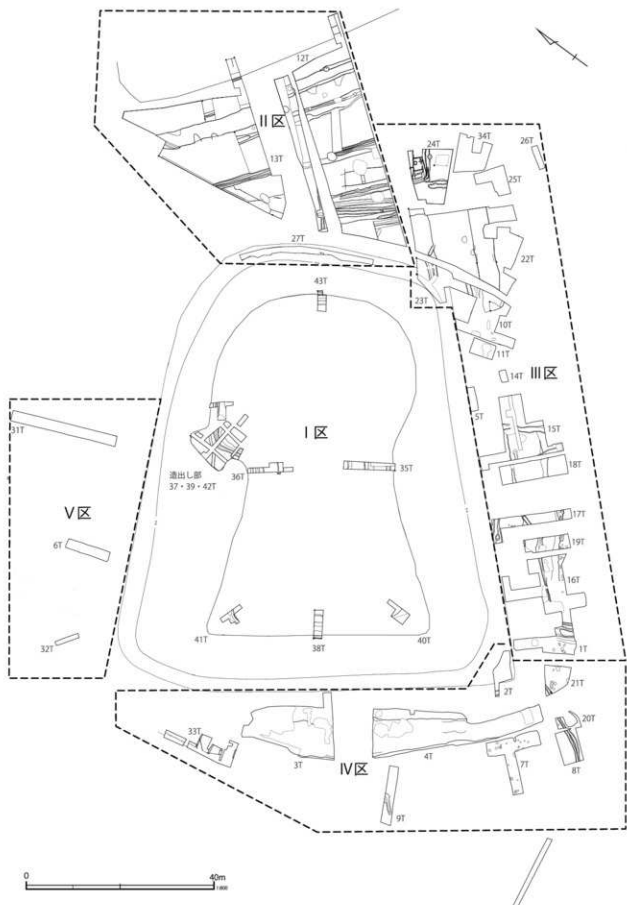
造り出し部については、全面調査を実施した。その結果、現況の造り出し部のほぼ全ては古墳時代の旧表土より下位に位置することが判明した。また、多量の遺物が出土したものの、原位置を保つものはなく、後世の改変を受けていた。これらのことから、撥状の大きな造り出し部は昭和43年度の整備により作出されたことが判明した。

(4) 本報告の記載方法

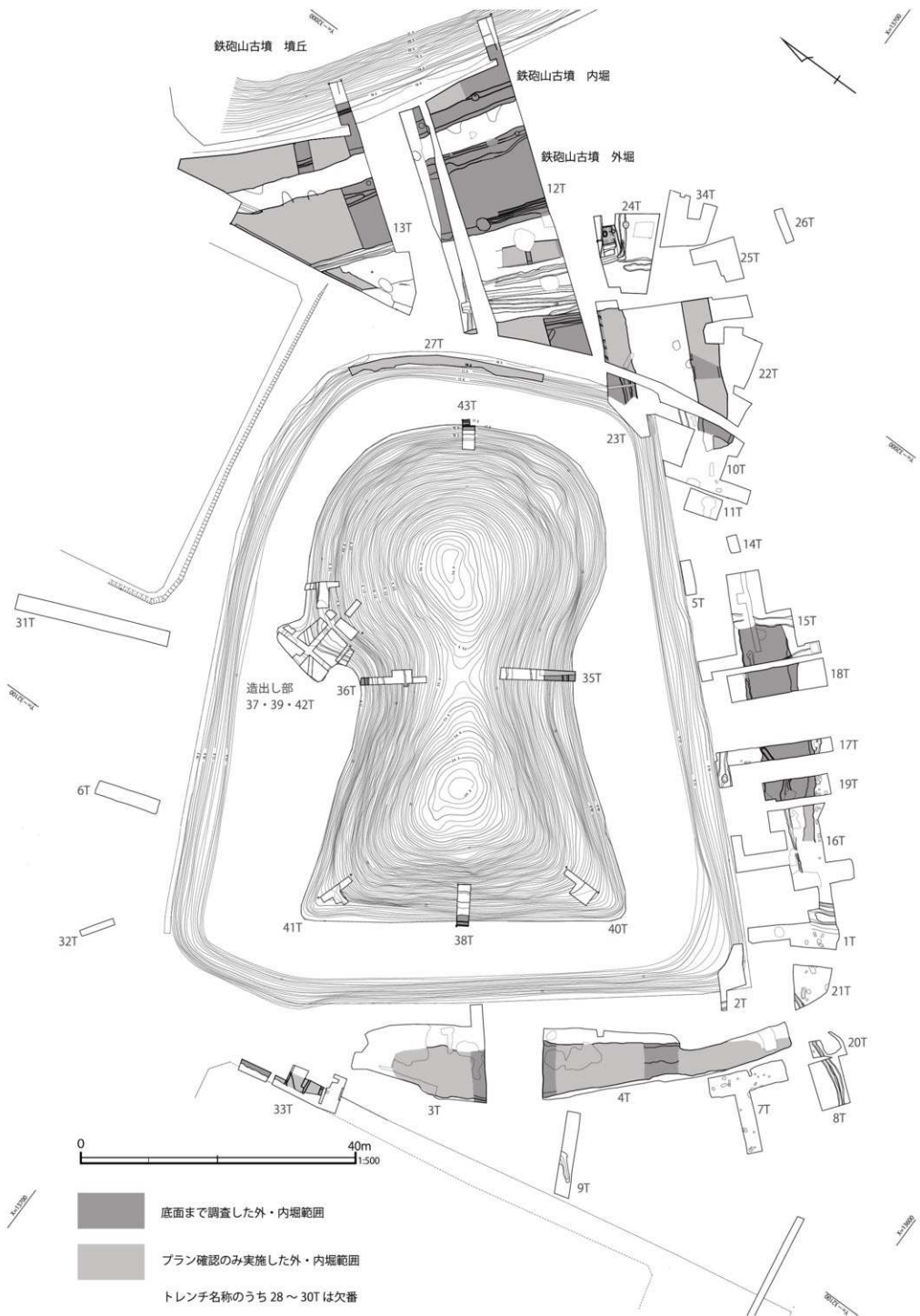
3カ年にまたがる調査については、前年度の調査箇所を次年度に拡張するという手法が採られたため、調査年度毎による記載ではなく、第7図のとおり、調査区を便宜上5区に分けて報告する。



第6図 年度別調査区



第7図 調査区 区分け図



第8図 奥の山古墳 調査区全測図

第2章 発掘調査の成果

第1節 I区

I区墳丘部の調査は、平成20年度に一部43トレンチ周辺の調査を行ったが、それ以外はすべて平成21年度に実施した。墳丘規模、墳丘形態の把握および造出し部の形態の精査を目的に調査を実施した。ただし、墳丘は現況のまま整備する方針が決定していたため、造出し部を除き、最低限の面積のトレンチ調査を実施した。

① 43トレンチ

後円部主軸にトレンチを設定し、墳丘長の把握及び墳裾の内堀の遺存状況を確認することを目的として調査を実施した。昭和42年度第1トレンチ調査で検出されたSD・1、2の2条の溝跡が墳丘立上り部で確認された。溝跡の上端部の地山ロームの標高は17.0mであり、昭和42年度調査で確認された内堀底面よりも低い位置にあることから、本トレンチにおいては内堀底面は全く遺存していなかった。なお墳裾を巡るSD・1、2については第4図の整備前の図面と比較すると、墳丘から急激に落ち込むマークが記されており、さらには後円部西寄りには溝が埋没しきつておらず開口している状況が読み取れることから、昭和時代の所産とも考えられる。

法面上端の標高18m前後の箇所に平坦面が検出された。しかしb層の堆積状況から溝開削に伴うもので墳丘本来の平坦面ではないと考えられ、急激に約20cm立ち上がる段差についても根切溝開削に伴う段差と考えられる。またb層上面に堆積するa層については、暗灰黄色シルトであり、自然堆積ではなく、貼りつけた状況を呈していた。前回の整備に際し、墳裾に貼りつけた客土の可能性が高い。

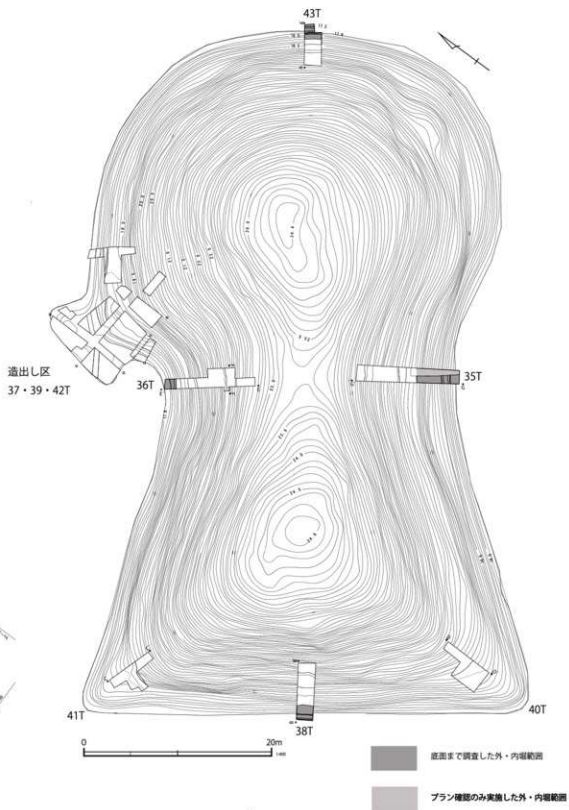
墳丘盛土と旧表土の遺存状況を把握するために、最小限の範囲で断ち割り調査を実施した。3層下に所在した墳丘盛土については非常に硬化したローム主体土であった。3層はローム粒子と崩壊ロームブロックを多量に含有する。墳丘盛土に近似した土質だが、軟化しており墳丘の崩落土あるいは植物等により墳丘盛土が軟化した可能性がある。

I層、極堅緻な黒色土、II層、やや堅緻な灰黄褐色土。この層序は後述する35トレンチと同一で、I層上面を古墳築造段階の表土面と推定した。I層上面の標高は18.9m。ただし同一層序をなす35トレンチのI、II層がほぼ水平堆積なのに対し、本トレンチのI層は墳丘側に向かって傾斜している。標高18.8m前後のI層旧表土の露出した緩斜面部については、その直上を覆う2、3層土の状況から、後世の改変を受けていない緩斜面と推定される。

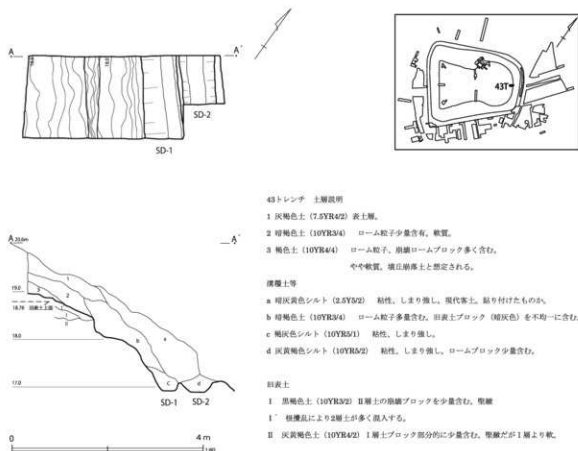
また内堀法面上の土壌は根切り溝覆土の上ののることと、土壌の状況から内堀覆土ではない。出土遺物は円筒埴輪の小片が数点出土した。

② 38トレンチ

前方部の墳丘主軸ラインに設定した。墳丘長の把握及び墳裾・内堀の遺存状況を確認することを目的として概ね墳丘主軸ラインに対応させトレンチ設定を行い、調査を実施した。第4図の昭和42年度第2トレンチ調査で検出された溝跡と同一と想定されるSD・3が検出された。内堀法面には大きく2段のテラス状の緩斜面が存在していた。標高17.5m前後と同18.0m前後である。いずれも



第9図 I区平面図



第10図 43トレンチ平面図・断面図

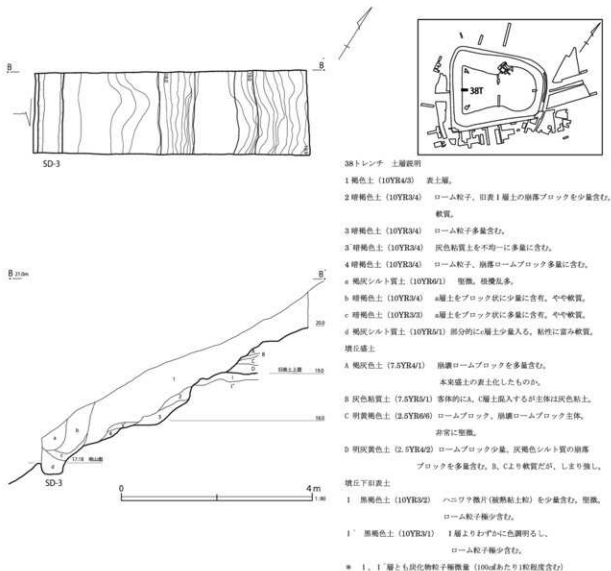
直上の覆土の2～4層は墳丘盛土の崩落土の自然堆積と推定されることから、いずれの緩斜面も内堀法面に伴うものと考えられる。SD-3を境に前回整備で復元された内堀底面になるため、厳密な法尻は不明と言わざるを得ない。

墳丘盛土の裾部については、盛土の始まる標高18.8～19.0m付近に幅60～90cmの平坦面があった。平坦面の土壌は黒褐色の旧表土であり、非常に硬化していた。

古墳時代旧表土及び墳丘盛土の状況を把握するためにサブトレンチを設定し最小限の断ち割りを行った。古墳築造段階の表土面については、非常に堅緻な黒色土であるI層上面が相当すると考えられる。なおI層土中には微量の埴輪片状の細片が数点観察された。層厚約15cmのI層下は僅かに色調が明るいI[~]層であった。堅緻であるが、I層よりも僅かに軟質であった。なお両層いずれからも微量の1mm程の炭化物片が検出されたが10cm四方に1点程度であった。

墳丘盛土についてはA～Dの4層が検出された。盛土の土質については、黄褐色ローム起源のもの、灰色粘土の大きく2つの傾向があった。特にC層については灰色粘土が主体を占めていた。最下層のD層直下の旧表土面は、やや波打っていたが概ね水平であり、43トレンチとは状況が異なっていた。本トレンチにおいては43トレンチのような前回整備に伴う埴輪の貼りつけ客土はなかった。

出土遺物は少なく、円筒埴輪の細片が数点出土したのみであった。



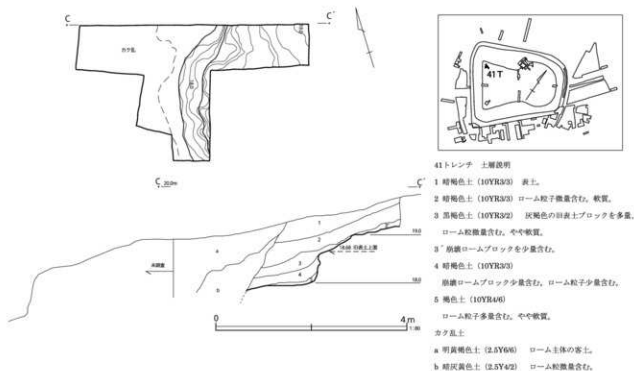
第11図 38トレンチ平面図・断面図

③ 41トレンチ

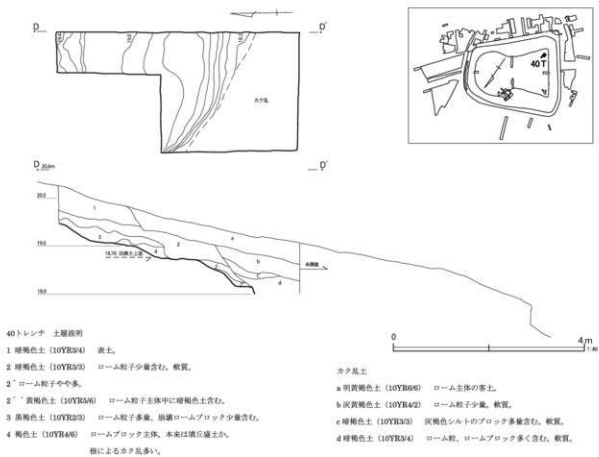
40トレンチとともに前方形コーナーにおける墳丘形態の確認を目的として調査を実施した。調査前に測量図による検討を行ったが、第4図から、昭和43年度の整備前は丸みを帯びたコーナー部であったことが分かる。また、整備後のコーナー部の等高線に注目すると、裾部において非常に緩やかな緩斜面が存在する。この2点から、昭和43年度整備において、シャープな前方形コーナーが作出された可能性を想定して調査を行った。

第12図の断面図a、b層は客土である。天地返し状の堆積を示すことから、整備時に重機により貼りつけたものと考えられる。

墳裾は、標高18.0m前後でローム層土からなる平坦面が検出された。この平坦面から標高18.68mで検出された旧表土上面までの比高差は0.7mであったが、急角度で立ち上がっていた。この立ち上がり周辺の覆土は概ね三角堆積の状況を呈するが、遺存状況が良好であった他のトレンチと比較すると、旧表土の土壌ブロックを多量に含んでいること等から、整備前に掘削、改変を受け



第12図 41トレンチ平面図・断面図



第13図 40トレンチ平面図・断面図

た可能性が高い。

狭小なコーナー部であり、かつa、b層が軟質のため、崩落の危険が大きいことから填丘保護及び安全管理のため、現況の掘部先端まではトレンチを延伸しなかった。

今回検出された標高18.0m前後の填裾については、第4図の昭和43年度以前の測量図のコーナー部とほぼ一致している。したがってこの客土については昭和43年度の整備に際して填丘外周ラインの整形に伴うものと推定される。

また、旧表土上の填丘盛土も立ち上がりが緩やかであることから、整備前からコーナー部の填裾は大きく流出していた可能性が高い。

④ 40トレンチ

41トレンチ同様に前方部コーナーにおける填丘形態の確認を目的として調査を実施した。測量図によると、第4図から、昭和43年度の整備前は丸みを帯びたコーナー部であったことが分かる。また、整備後のコーナー部の等高線に注目すると、41トレンチ同様、掘部において非常に緩やかな緩斜面が存在する。この2点から、昭和43年度整備において、シャープな前方部コーナーが作出された可能性を想定して調査を行った。

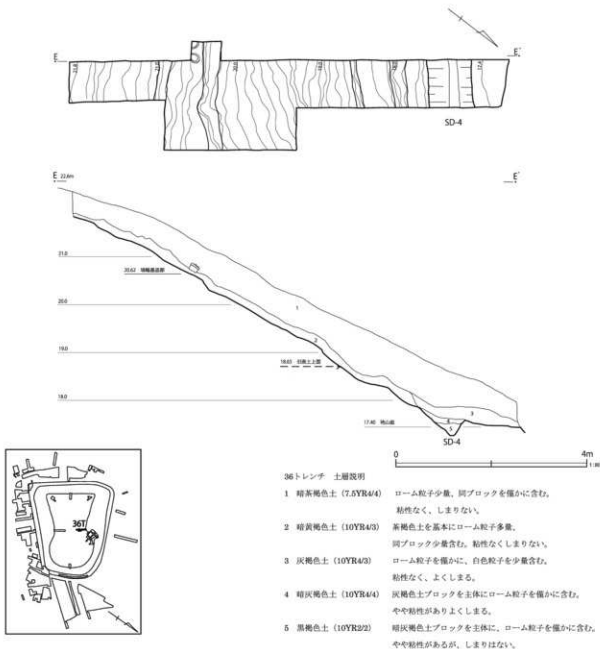
標高18.76mで旧表土が確認された。その直上を覆う第4層はロームブロック主体であり、填丘盛土の可能性はあるが、木根による攪乱の影響で軟質であった。また、旧表土レベルに近い標高18.7m付近からは幅1mほどの平坦面が検出されたが、直上にある第2層は軟質であり、填丘崩落土とは認めがたい。標高18.1m前後で僅かな平坦面が遺存していたが、この平坦面も第2層土がのることから後世の改変である可能性が高い。したがって遺存する填裾部はすべて後世の改変を受けていたことが判明した。また填裾以下の標高18.2mから下位は攪乱を受けていたため、形態は不明である。現況のコーナー部が崩落しないように、狭い範囲の調査で留めたが、41トレンチ同様、旧表土上の填丘盛土の立ち上がりは緩やかであることから、整備前からコーナー部の填裾は大きく流出していた可能性が高い。そして整備に伴ってシャープなコーナー部が復原されたと推定される。ごくわずかの円筒填輪小片が出土した。

⑤ 36トレンチ

填丘くびれ部の形態と幅の把握を目的として調査を実施した。填丘上は攪乱等は受けておらず、概ね0.5～0.7mの表土層で被覆されている状況であった。第2層はしまりのない暗黄褐色土であり、ローム粒子を多量に含むことから、填丘盛土の小規模な流出によるものと考えられる。

標高20.4～20.8m付近に、僅かに傾斜の弱い緩斜面が検出された。この緩斜面には、大型の円筒填輪片が集中していたため、トレンチを拡張して調査を実施した。またトレンチ際からは、傾きつつも原位置のE08円筒填輪が検出された。填輪の埋設状況を確認するために精査に努めたが、堀方や土壌の充填等の痕跡は検出されなかった。検出された段階では底部から1段目までの遺存であったが、接合作業の結果、3段目まで確認できた。また、この填輪を取り上げた際に、約15cmの至近距離で、もう一個体の円筒填輪が検出された。検出段階では1段目まで遺存していた。なお、この填輪は、取り上げずに現状のまま保存した。

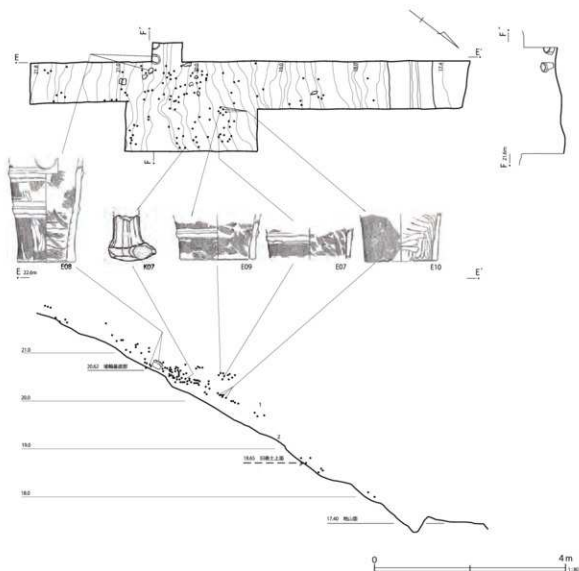
明らかな平坦面は検出されなかったが、2個体の填輪の出土状況と、その直下の標高20.0～



第14図 36トレンチ平面図・断面図

20.7m付近に大型破片が集中していたことから、この2個体の出土位置にあたる標高20.6m前後にある緩斜面が墳丘中段の墳輪列であると推定される。

墳丘中段より下位は、概ね28度の傾斜があり、標高18.7mの旧表土に至る。旧表土レベルでは反対側のくびれ部35トレンチで検出されたような明瞭なテラスは検出されなかった。それより下位にあたる墳丘盛土の端と内堀法面との間の標高18.2m付近からは幅0.8mの緩斜面が検出されたが平坦面とは言い難い。内堀底面から法面にかけて第4号溝が検出された。覆土の状況から近・現代の遺構と思われる。この4号溝は、その延長が37トレンチおよび造出し部からも検出されており、墳裾を取り巻いて掘削されている。特記すべき点として、4号溝周辺の地山ローム層からなる平坦面の標高が17.4mであることである。後述する造出し部の地山ローム面とほぼ同じであること



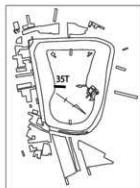
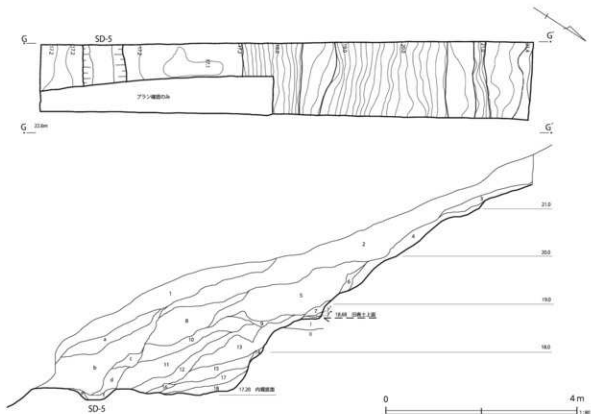
第15図 36トレンチ遺物分布図

から、周囲の内堀底面標高は17.4mより高かったと推定される。

出土遺物はE08円筒埴輪以外も多く出土した。大多数は円筒埴輪片であるが、K07の形象埴輪が1点出土している。またE08の出土位置よりも標高が約1m高い21.5m付近にも円筒埴輪片が少量検出された。埴頂部に配列された埴輪列の流れ込みの可能性もある。

⑥ 35トレンチ

くびれ部の形態と幅の把握を目的として調査を実施した。現況の埴丘裾部上面の第1層はロームを主体とする客土で、ビニールゴミ等が混入する客土である。I区埴丘部の各トレンチの中で内堀覆土の遺存状態が最も良好であったことから、本トレンチについてはテフラ分析を行った。分析の詳細報告については第3章第3節に掲載した。概要としては第2層からは浅間A軽石(A_s-A)、11層より上位では浅間Bテフラ(A_s-B)、埴丘直下から榛名二ッ岳渋川テフラ(H_r-FA)が検出されたことである。検出された各火山灰、軽石と覆土の堆積状況からは以下の推移が想定される。FAの堆積後に埴丘盛土が行われ、浅間B降下前までに第12層までの三角堆積が起

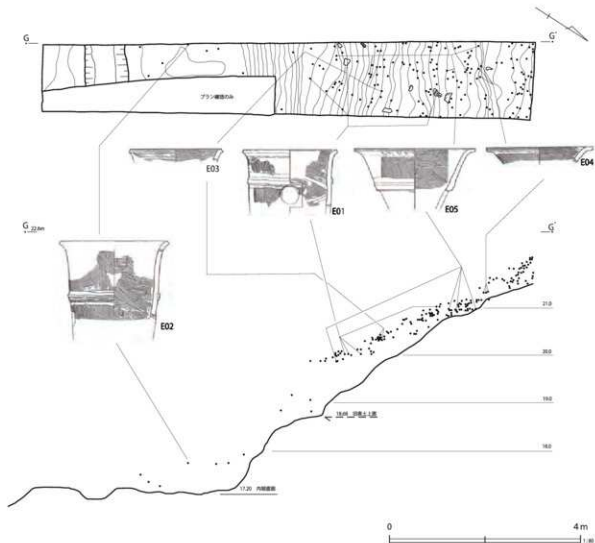


35トレンチ 土層説明

- 1 明黄褐色土 (2.5Y7/6) ロームを主体とする客土。現代ゴミ混入する。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 表土層。根葉乱根著。層下部からのハニワ片出土多。
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 2層土に少量のローム粒子及び崩壊ロームブロック入る。
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) 3層より多量のローム粒子及び崩壊ロームブロック入る。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) 褐色シルト崩壊ブロック (φ20~30mm主体) を多量に含む。ローム粒子ごく微量含む。軟質。
- 6 黄褐色土 (2.5Y5/4) 崩壊ロームブロック主体。客体的に4層土。
- 7 暗褐色土 (10YR3/4) 墳丘盛土の崩落部。崩落ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。
- 7' ロームブロック 7層より多。
- 7'' ロームブロック少量 (7層より少し)。
- 8 黒褐色土 (10YR2/2) 5層より色調暗い。褐色シルト (10YR4/1) の崩壊ブロック多量に含む。軟質。

- 9 灰黄褐色土 (10YR4/2) 褐色土 (10YR4/1) 崩壊ブロックを非常に多量 (全体の30~50%程) 含む。やや堅微。
- 10 黒褐色土 (10YR3/1) 褐色シルトの崩壊ブロック少量、ローム粒子微量含む。やや堅微。
- 11 黒色土 (10YR2/1) 褐色シルトの崩壊ブロック少量含む。ローム粒子微量。最も色調は暗い。やや堅微。
- 12 黒褐色土 (10YR3/1) 10層に近引。褐色シルトの崩壊ブロック少量。
- 13 黒褐色土 (10YR3/2) φ5mm前後のロームブロック及びローム粒子をやや多く含む。
- 14 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子を多量に含む。
- 15 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子、崩壊ロームブロックを少量含む。やや堅微。
- 16 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子少量。やや堅微。
- 17 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子、崩壊ロームブロック多く含む。やや堅微。
- 18 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子、崩壊ロームブロック多量含む。堅微。
遺構上等
- a 暗褐色土 (10YR3/4) シルト質の灰褐色ブロックを多量に含む。
- b 黒褐色土 (10YR3/2) シルト質の灰褐色ブロックを多量に含む。ブロックの入り方から自然堆積を呈しておらず。埋戻しの可能性高し。
- c 黒色土 (10YR2/1) シルト質の灰褐色ブロックを少量含む。
- d 暗褐色土 (10YR3/4) シルト質の灰褐色ブロックを多量に含む。
- e 黒褐色土 (10YR3/2) シルト質の灰褐色ブロック多く含む。
- f 褐色シルト (10YR4/1) 水性堆積。粘性に富む。
- 印表土
- I 黒褐色土 (10YR3/2) II層土の崩壊ブロックを少量含む。堅微。
- II 灰黄褐色土 (10YR4/2) I層土ブロック部分的に少量含む。堅微だがI層より軟。

第16図 35トレンチ平面図・断面図



第17図 35 トレンチ遺物分布図

こる。浅間B降下後に5、8層のような崩壊ロームブロックを多量に含有する軟質の黒褐色土、すなわち一定量の墳丘の崩落が生じた可能性が高い。5、8層の堆積後、小規模な盛土の流出、および植物による表土化により第2層が形成されたものと推定される。また第2層、浅間A降下後には第5号溝が掘削されている。なお本溝の下層部はシルト質の水性堆積と思われる。

本トレンチではF A検出を目的に墳丘盛土の断ち割り調査を実施した。その結果、第89図及び写真図版17のとおり、墳丘盛土がのる旧表土I層の最上面から約10cm下位からF Aが検出された。なお確認した限りにおいては堅緻な黒褐色土のI層土は約20cmの厚さを測り、その下にはやや軟質の灰黄褐色土、いわゆるソフトロームが分布していた。

墳丘については標高20.7m付近から、緩やかな緩斜面が検出された。この緩斜面周辺には大型の円筒埴輪片が多数検出された。さらにはこの遺物集中地点の標高が、反対側のくびれ部の36トレンチで検出された円筒埴輪列の標高20.62mと概ね一致することから、この緩斜面が中段テラスと

推定される。中段テラス以下は約30°の角度で墳裾へ傾斜していくが、標高18.68m地点で旧表土の硬化した黒褐色土の平坦面が検出された。幅は約0.7mである。標高が0.3m違うが、先述した38トレンチとほぼ同じ構造と言える。平坦面の末端から内堀法面となる。法面はごく小さな段を有しながら標高17.2mの底面に至る。5号溝で壊されている箇所以外は、概ね平坦である。この内堀底面が、今回調査した中で、唯一良好な状態で遺存していた箇所にあたる。

遺物の出土状況は中段テラスから下方へ流れ込む状況を呈しているが、第17図のとおり2層土直下からの出土が多い。出土遺物の大半は円筒埴輪であるが、朝顔形埴輪の破片も一定量出土している。なお36トレンチ同様、中段テラスよりも上方からの遺物出土量も多い。墳頂部付近の埴輪列に起因したものと推定される。

また、本トレンチの調査成果として、従来認識されていくびれ部の墳裾から、約5m内側に本来の墳裾が遺存することが判明した。これにより、後円部から前方部にかけてのくびれ部が、よりシャープな墳丘形態となり、埼玉古墳群内の前方後円墳の中で、やや特異な形態であった本古墳も、本来は瓦塚古墳等と近似したくびれ部であることが判明した。

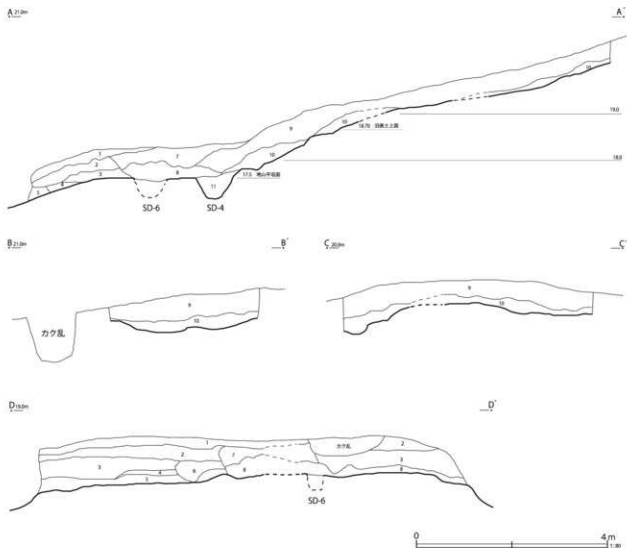
⑦ 造出し部

造出し部は昭和43年度の整備前後で形態、規模が大きく異なるため、整備に伴う変更の可能性が高いことから、他の調査箇所と異なり面的な調査を実施した。

前回整備以後の造出し部の形態は、後円部西側のくびれ部付近から、古墳主軸からおよそ45°の角度で突出する。平面形態は、最大幅約10m、付け根部分の最小幅約8mであった。後円部からの長さは4.8mである。内堀との境界となる端部にむかって緩やかに広がる撥状を呈する。端部は概ね直線を呈するがコーナー部は僅かに円みを帯びる。造出し部の横断面形態は、造出しの付け根までは後円部の傾斜と同様だが、付け根以降は、平坦面が約3.5m続き、先端部にかけての1.3mは僅かに傾斜しながら、法面に至る。法面については、写真図版18のとおり、上位がほぼ直角あるいはオーバーハングしていた。これは水位変動による浸食の結果と考えられる。法面下位から内堀底面にかけての形態については、渇水期に3次元レーザー測量により標高を計測し、等高線を記した。造り出し部周辺の内堀底面の等高線からは、造出し部先端から約4m先の内堀最深部の標高16.3m地点から傾斜を保ちながら、現況の造出し部の法尻標高17.2mに至る。なお、内堀の下層にはヘドロ等の沈殿があったことから、前回整備における正確な掘削レベルではない。

当初はTK-1から7トレンチを設定して調査を開始したが、調査の過程で、突出する南側の付け根にあたる37トレンチ、北側の39、44トレンチおよび42トレンチを追加設定して調査を行った。出土遺物は全点ドットマップを作成した。なお調査に際しては、内堀は滞水していたため、安全管理と排土の搬出のために簡易的に架橋を行い調査に及んだ。

造出し部の覆土の状況については、墳丘側から造出し部付け根にかけて全体に分布する第9層は褐灰色土ブロックを多量に含んでおり、浅間A軽石がランダムに混入する。その下の10層は径1～2cmのロームブロックとローム粒子を主体とするが軟質であることから墳丘盛土の崩落土が主体と考えられる。なおTK-1トレンチは、ビニール等の現代ゴミが表土直下から検出された。隣接する44トレンチの南側も同様で、3～4m程度の範囲の擾乱を被っていることが判明した。



造出し部・42トレンチ 土層説明

- 1 茶褐色土 (10YR6/2) ローム粒子 (1mm以下) を少量含む, 粘性なくよくしまる。
- 2 灰褐色土 (10YR5/2) 白色粒子 (A軽石) を多量に含む, 粘性なく堅くよくしまる。
- 3 暗灰褐色土 (7.5YR4/2) ローム粒子 (1mm~2mm) を多量, 白色粒子を少量含む, 粘性なく堅くよくしまる。
- 4 黒褐色土 (7.5YR3/2) ローム粒子 (1~2mm) を少量含む, 同ブロック (5mm~1cm) を若干含む, 粘性なく堅くよくしまる。
- 5 暗黒褐色土 (10YR2/2) ロームブロック (1~2cm) を多量, 同粒子 (2~3mm) を少量含む, 粘性なく堅くよくしまる。
- 6 黄褐色土 (10YR5/6) 茶褐色土を主体にロームブロック (1~2cm) をまばらに, ローム土を少量含む, 粘性なく堅くよくしまる。
- 7 灰褐色土 (7.5YR4/2) 茶褐色土を主体に, 白色粒子を多量に含む, 粘性なくよくしまる。
- 8 黄茶褐色土 (7.5YR4/4) 茶褐色土を主体に, ローム粒子 (1~2mm) を多量に含む, 白色粒子を少量含む, 粘性なく堅くよくしまる。
- 9 明褐色土 (7.5YR7/2) 茶褐色土を主体に褐色土ブロックを多量に含む, 粘性なく, しまりがなくやわらかい。
- 10 黄褐色土 (10YR5/6) 茶褐色土を主体に, ロームブロック (1~2cm) 同粒子 (2~3cm) を多量に含む, 粘性なくしまりもない。
- 11 暗茶褐色土 (7.5YR5/4) 茶褐色土を主体にローム粒子 (1~2mm) を多量, 白色粒子を少量含む, 粘性なく堅くしまる。

第19図 造出し部・42トレンチ断面図

平坦な造出し部本体を被覆する覆土の状況については、第1層からは近世の陶磁器や現代のビニール等が少量出土している。第2層は浅間A軽石を多量に含有し、堅緻であった。第3層には少量の浅間A軽石が含まれる。したがって3層以上は近世以降に形成された土壌であると考えられる。

造出し末端部のみ僅かに残存していた第4、5層は35トレンチ等の内堀覆土と近似した堅緻な黒褐色土であった。また、2条の溝跡の上面を被覆する7、8層および溝跡覆土のSD4溝の覆土11層にも浅間A軽石がランダムに混入していたことから、溝跡周辺は近世以降に攪拌された土壌の可能性が高い。

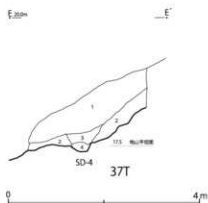
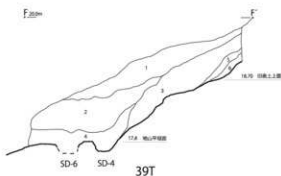
次に各トレンチの状況について墳丘側から記述する。42トレンチは後円部に相当するが、標高19.5～20.1mの緩やか斜面を呈する。表土下約0.4mで部分的に墳丘盛土が検出されたが、盛土面の遺存状況は悪かった。墳丘盛土直上の10層黄褐色土はロームブロックを多量に含有していた。

TK-2トレンチは標高18.8～19.2mの緩斜面であるが、本トレンチも墳丘面の遺存状況は悪かった、硬化した盛土面は僅かにブロック状に検出されたに過ぎない。

TK-3、4トレンチは現況の造出し部の付け根に該当する。墳丘側の標高18.8mから4号溝跡の西に広がる平坦面にかけて約1.3mの比高差があり、約24°の勾配であった。4号溝以西の平坦面は標高17.5mの地山のローム層からなる。近接した6号溝はブラン確認のみ実施した。上層覆土は4号溝と酷似していた。古墳時代旧表土は標高18.7mで検出された。標高18.5m付近で幅0.4mの幅狭の平坦面が部分的に検出されたが、遺存状況が悪く不明瞭であった。TK-5、6、7トレンチは標高17.3～17.5mの地山ローム層からなる平坦面であり6号溝跡が検出された。

TK-2、3トレンチで検出された4号溝跡で区画されたような状況を呈する張り出し部について、後円部との関係を調べるために39トレンチおよび44トレンチを追加設定して調査を実施した。南端はTK-1トレンチで確認された攪乱が広がっていたが、それ以外は墳丘盛土表面の遺存状況は概ね良好であった。第19図のとおり標高18.7mで黒褐色土からなる堅緻な旧表土面が検出された。旧表土の土壌が露出した状況で幅40cmの平坦面が検出された。旧表土の直上には黄褐色ローム土を主体とした堅緻な墳丘盛土が始まっていた。平坦面端部から約40度勾配の法面となる。法尻部は4号溝で壊されていたが、隣接する6号溝との間に僅かにローム地山の平坦面が遺存していた。標高は17.4mであった。本トレンチ内の等高線は、概ねTK-3、4トレンチの等高線と対応している。

昭和43年度の整備前は、第4図、写真図版1～3のとおり、楕形の造出しは存在せず、後円部から先端がやや尖る張り出しのみが存在していた。今回の調査で検出された張り出しは、整備前の形態と一致している。また、この張り出しを圍繞するSD-4号溝が検出された。この溝の覆土および上層土には浅間A軽石が混入していることから近世に開削されたと想定される。墳裾に設定したトレンチすべてから、墳丘を圍繞する溝が検出されたが、覆土の状況からいずれも古墳時代の所産ではない。また、検出された旧表土の標高は18.7mであり、他のトレンチと一致する。その場合、平坦な造出し部のすべては古墳築造時の地面よりも低い位置にあることになる。したがって地山削り出し以外には、この造出し部は作出できない。また、4号溝の外側に広がる地山ローム面の標高は概ね17.5mである。この数値は造出し部から離れた39トレンチの地山平坦面17.4m、くび



39トレンチ土層説明

- 1 暗茶褐色土 (7.5YR3/4) 茶褐色土を主体に暗茶褐色土ブロックを多量に含む、ローム粒子、白色粒子を少量含む、粘性、しまりない。
- 2 灰褐色土 (10YR4/3) 白色粒子を少量、ローム粒子 (1mm以下) を僅かに含む、粘性なく堅くしまる。
- 3 茶褐色土 (10YR4/3) ローム粒子 (1mm以下) を僅かに含む、粘性なくしまりない。
- 4 褐灰色土 (7.5YR4/1) 茶褐色土を主体に、灰色土ブロック (1~2cm) を多量に含む、粘性なくよくしまる。
- 5 褐色土 (10YR4/4) 崩壊ロームブロック及びローム粒子を主体とするが軟質、墳丘崩落土。
- 6 暗褐色土 (10YR3/4) 崩壊ロームブロック少量、ローム粒子多く含む、軟質 (6層土より色調明るし)、墳丘崩落土

37トレンチ 土層説明

- 1 暗茶褐色土 (7.5YR3/4) 茶褐色土を主体に暗茶褐色土ブロックを多量に含む、ローム粒子、白色粒子を少量含む、粘性、しまりない。
- 2 暗灰褐色土 (10YR4/2) 暗灰褐色土ブロックを多量に含む、やや粘性がありよくしまる。
- 3 暗黄褐色土 (10YR4/3) 暗灰色土ブロックを主体に茶褐色土を少量含む、やや粘性があり、よくしまる。
- 4 灰褐色土 (10YR4/2) 灰褐色粘土ブロックを主体に茶褐色土を含む、やや粘性があり堅くしまる。

第20図 39・37トレンチ断面図

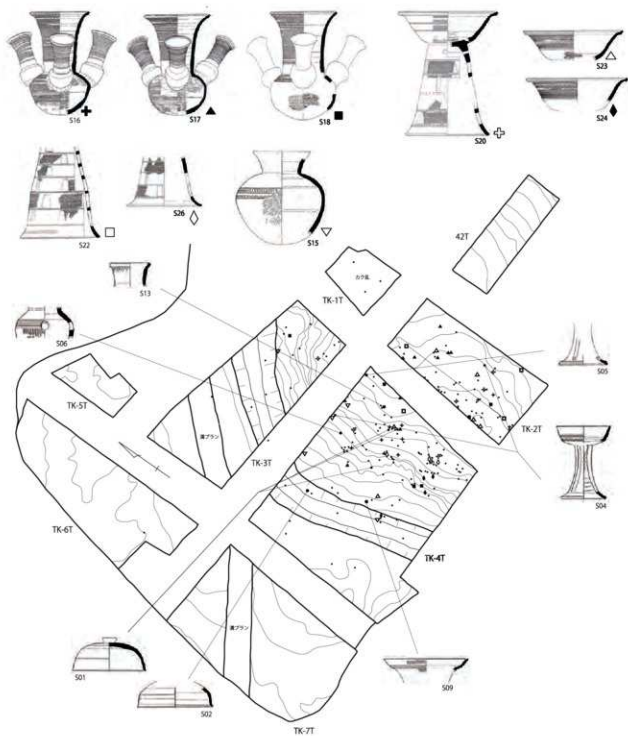
れ部の36トレンチの地山面17.4mと概ね一致する。したがって撥状に広がるロームの地山面は内堀底面に近い標高である。

次に遺物出土状況であるが、全点ドットで取り上げた遺物の総数は1393点である。約1,000片が円筒埴輪の細片であるが、第8節のとおり形象埴輪も多く、須恵器も200片以上出土した。いずれも4号溝より内側の張り出し部からの出土が大半で、平坦面から出土したものはごく少数である。

第21、22図のとおり、遺物片が散在して出土した。大半が10層からの出土である。また、遺物の接合関係からも同一個体の破片が広範囲から検出された。唯一、E14円筒埴輪の底部のみが遺存率が高かったが、埋設されている状況ではなかった。なお円筒埴輪の底部が計5個体検出されていることから、より上段に予想される埴輪列も流出している可能性が高い。人物、馬、家、器材埴輪など多様な形象埴輪が出土しているが、出土傾向として指摘できるのは墳丘に設定した42トレンチは須恵器の出土がなく、馬形埴輪等の形象埴輪が多かった点程度である。

装飾付須恵器、高坏形器台等の出土状況も同様で、張り出し部全面から出土した。なお標高18.5m周辺の僅かに平坦となった部分からの出土が多い傾向にあるが、それよりも標高の高い場所から出土した破片と接合していることから、この平坦面に設置された可能性は低いと言える。

ただし、他のトレンチでは検出されなかった須恵器が多量に発見されたことと、形象埴輪片の出土量から、張り出し部周辺あるいは今回未調査の後円部に配列されていた可能性があろう。



第 22 図 造出し部 須恵器分布図

第2節 II区

II区は奥の山古墳と鉄砲山古墳の墳丘との間である。両古墳の墳丘間の最も狭い場所は45mであり、奥の山古墳と鉄砲山古墳の外堀との関係を探るために設定した。調査前の状況は前回復原整備された奥の山古墳の内堀のすぐ北側に園路があり、その北側は平坦な公園用地となっていた。なおII区の13トレンチより西側は民地である。昭和42年3月に調査した第1トレンチも本区内にあたる。なお第6図のとおり、本区は平成19年度に2本のトレンチを設定し調査を行ったが、平成20年度に大規模な調査区を設定し、発掘調査を実施した。

① 13トレンチ

本トレンチの調査面積は約400m²である。北から順に鉄砲山古墳内堀、外堀、奥の山古墳外堀が検出された。なお調査方法は一部堀底面まで調査を行ったが、大半はプラン確認後、上面の10cm程度の覆土のみ除去して現状保存に努めた。鉄砲山古墳の両堀の遺存状況は概ね良好であったが、奥の山古墳の外堀範囲の東側は攪乱が多く、検出することができなかった。

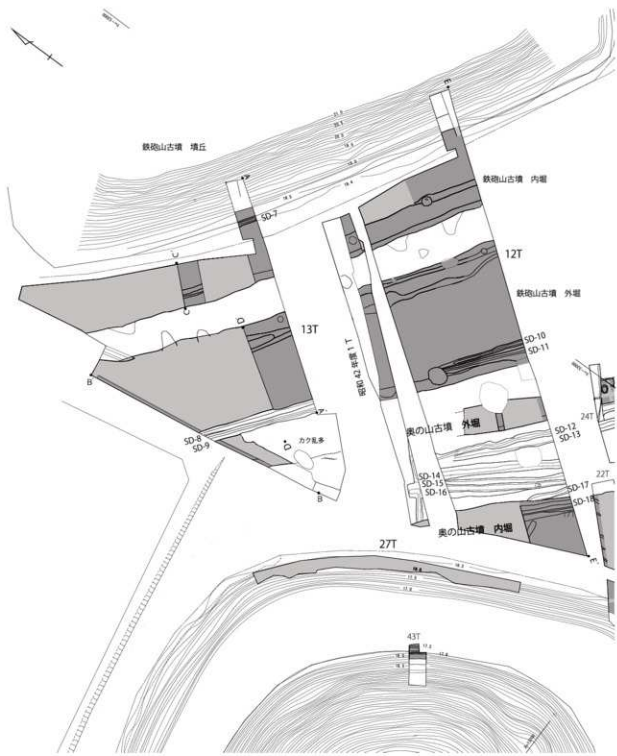
第26図は鉄砲山古墳墳丘から外堀に至る長さ25mの断面図である。鉄砲山古墳の墳丘裾は、一部断ち割り調査を実施した。G層黄灰色土が地山ロームに貼り付けられている状況であった。今後報告予定の鉄砲山古墳の墳丘裾には同様の貼り付けが大半のトレンチで認められることから、鉄砲山古墳の築造の特徴の一つと言える。なお鉄砲山古墳墳丘下の旧表土と墳丘盛土との関係は不詳である。内堀は現地地表下0.8mの深度を測り、幅は約9mであった。底面の中央は概ね平坦であるが、中堤側で段を有し、約0.2m場底が高くなり外側の法面に至る。法面には不定形な段を有していた。上面には公園造成土である7、8層がのる。中堤範囲では現地地表下0.4mで地山ローム面が確認されたが、盛土は確認されなかった。

鉄砲山古墳外堀は遺存状況が良好であった。外堀の幅は12.4mであり、内堀よりも幅広である。中堤側から28度勾配で緩やかに下がり、標高17.2m付近でやや上向きの段を有する。その段以降は、およそ23度勾配で最深部の標高16.9mに至る。堀底面は平坦にならず、およそ7度勾配で外側へ向かう。外側法面は樹根と8号溝により壊されており検出することができなかった。

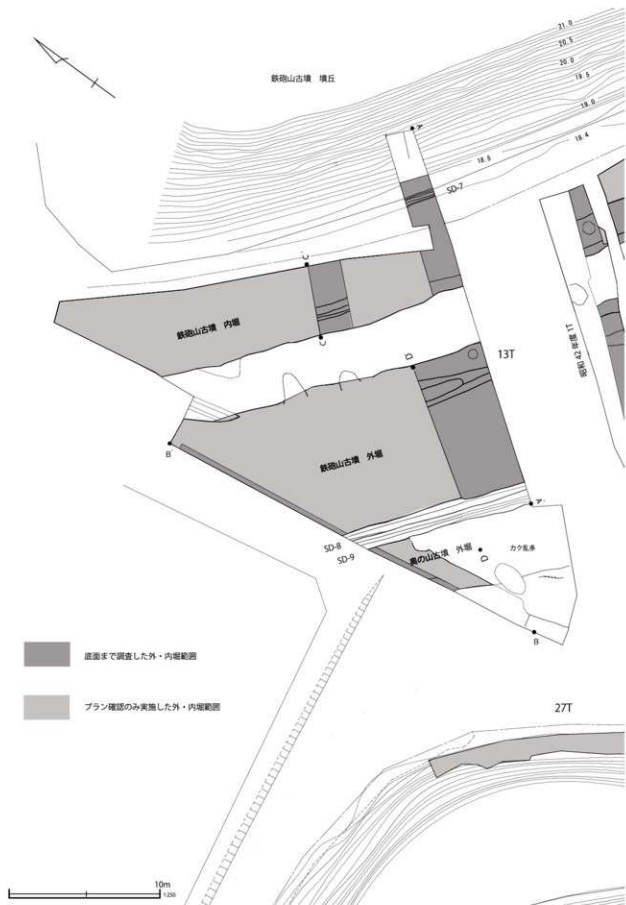
本トレンチの鉄砲山古墳外堀からは26層浅間Bテフラ(A s - B)が検出された。詳細は第3章第2節に詳しいが、底面近くに帯状に堆積していることから、2次堆積の可能性はないと考えられる。したがって鉄砲山古墳外堀の中央部は、西暦1108年までの期間に30cmほどしか埋没していなかったことが判明した。

遺物は鉄砲山古墳の内堀、外堀からは多量に出土したが、奥の山古墳外堀範囲はプラン確認にとどめたこともあり、ほとんど出土しなかった。唯一図化できたE53は突帯が非常に低いことと細密なハケメであることから本来は鉄砲山古墳に帰属する埴輪と考えられる。

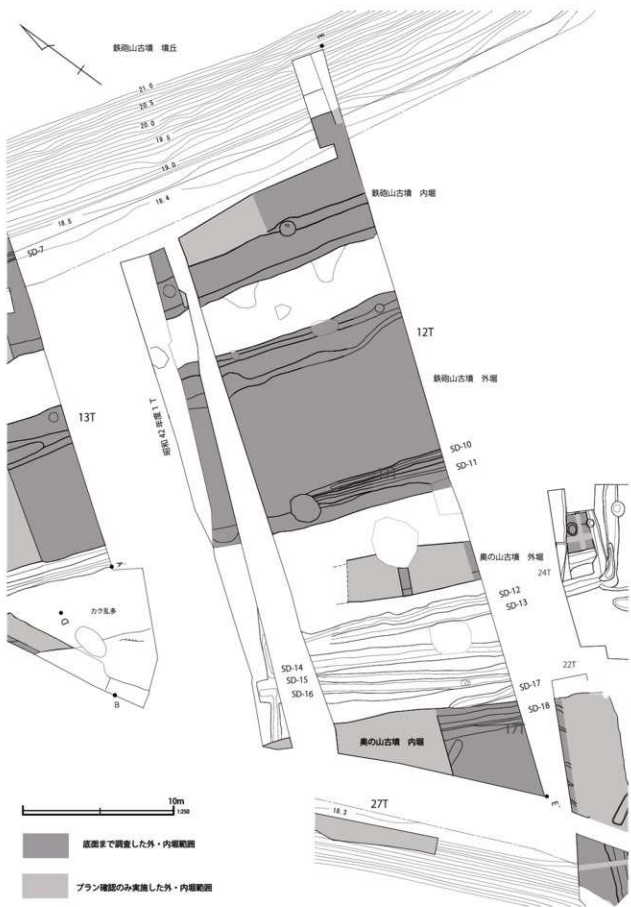
第25図は13トレンチの調査区壁面の断面図である。中堤の範囲内に10cmほどの地山ロームの高まりが検出されたが、中堤に伴う高まりかは不明であった。奥の山古墳の外堀は深さ15cmほど遺存していた。検出された底面は概ね平坦であったが、外側に向かって僅かに高くなる傾向があった。外堀底面の標高は17.4～17.6mであった。この外堀の外側は近世以降の開削と想定される9号溝と8号溝により壊されており、外側の法面は検出することができなかった。



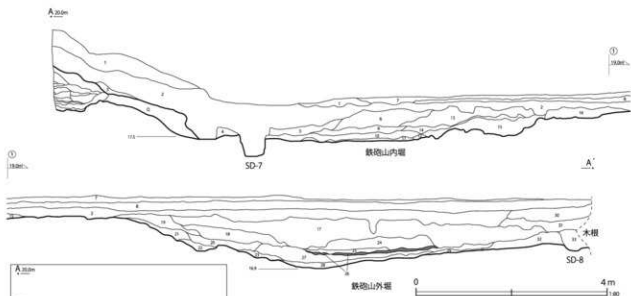
第 23 図 II 区平面図 (1)



第24図 II区平面図(2)



第 25 図 II区平面図 (3)

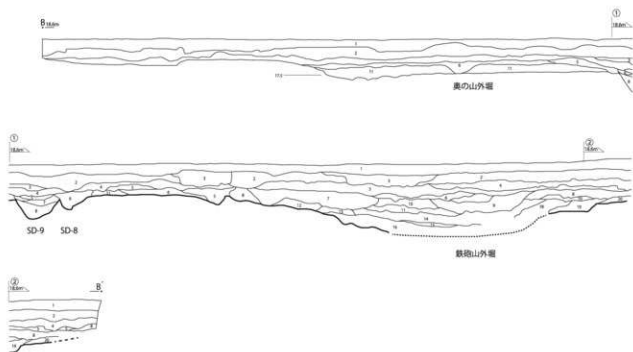


13トレンチA 土層説明

- 1 黄褐色土 (10YR4/3) ボソボソの表土。
- 2 黄褐色土 (10YR4/3) しまりゆるい。
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばらに含む。しまる。
- 4 褐色土 (10YR4/1) ローム粒多く含む。ややしまっている。
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒、1~2cmロームブロック、黄白色粘土ブロック少し含む。
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) 1cm黄白色粘土粒まばらに含む。しまりややゆるい。
- 7 赤褐色土 (黒色土)。
- 8 赤褐色土 (黄白色土)。
- 9 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。ややしまる。
- 10 褐色土 (10YR4/1) ローム粒まばらに含む。しまる。
- 11 褐色土 (10YR4/1) ローム粒多く含む。しまりややゆるい。
- 12 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。しまりややゆるい。
- 13 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。しまりややゆるい。
- 14 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばら。白色粘土多く含む。しまる。
- 15 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばらに含む。ややしまる。
- 16 黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒多く含む。ややしまる。
- 17 黄褐色土 (10YR4/3) ロームまばら。白色粘土粒多く含む。しまりややゆるい。
- 18 黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒まばら。φ1cm白色粘土ブロックまばらに含む。しまりややゆるい。
- 19 黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒まばら。白色粘土粒多く含む。しまりややゆるい。

- 20 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ1cm黄白色粘土ブロック多く含む。ややしまる。
- 21 黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒多く含む。しまる。
- 22 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。しまる。
- 23 褐色土 (10YR4/1) ローム粒まばらに含む。粘質シルト。しまりややゆるい。
- 24 褐色土 (10YR4/1) マンゴシ粒。ローム粒まばら。粘土少し含む。しまる。
- 25 オリープ層 (SY30) 赤褐色白色粘土ブロックまばらに含む。火山灰 (浅間山) 多く含む。(けずるとジャリジャリ)
- 26 オリープ層 (SY30) 火山灰が厚状に集中。
- 27 オリープ層 (SY30) 火山灰を含まない。まぎりもの少ないまきこまがや。
- 28 灰白色土 (2.5Y7/1) ローム粒まばらに含む。粘質。しまりややゆるい。
- 29 黄褐色土 (2.5Y5/3) ローム主体。しまる。
- 30 黄褐色土 (10YR4/3) 浅間A。ローム粒まばらに含む。しまる。
- 31 黄褐色土 (10YR4/3) 浅間A少し含む。しまる。
- 32 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばらに含む。ややしまっている。
- 33 褐色土 (10YR4/1) 浅間A粘着層を含みしまっている。2本のミヅのうち低い方の礫土。埋込土
- A 褐色土 (10YR4/1) ローム粒含む。しまる。
- B 褐色土 (2.5Y4/1) きこまかな灰色粘質土。しまってたかい。ローム粒まばらに含む。この色はいずれもきこまかな灰色粘質土。
- C 黄褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒多く含む。しまってたかい。
- D 黄褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒少し含む。しまってたかい。
- E 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒。小豆大ロームブロック多く含む。しまってたかい。
- F 黄褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒まばら。しまってたかい。
- G 黄褐色土 (2.5Y4/1) ローム。ラミナ状に含む。しまってたかい。
- H 黄褐色土 (10YR4/1) ローム粒多く含む。ややしまる。
- I 黄褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒まばらに含む。しまってたかい。
- J 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。しまってたかい。
- K 褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒まばらに含む。しまってたかい。
- L 黄褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒を少し含む。しまってたかい。
- M 黄褐色土 (2.5Y4/1) ロームブロック主体。しまってたかい。
- N 褐色土 (2.5Y4/1) ローム粒わずかに含む。しまってたかい。
- O 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ1~3cmロームブロック多く含む。しまってたかい。
- P 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒多く含む。しまってたかい。
- Q 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばらに含む。ややしまる。掘り付けたような礫層。

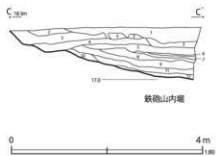
第26図 13トレンチA断面図



13トレンチB 土層説明

- 1 表土、砂利を多く含む。
- 2 明黄褐色土 (10YR7/8) 白色粒多く、しまっている。黒色粒少量。明るい茶色。
- 3 褐灰色土 (10YR5/1) 白色粒、赤褐色粒含む。しまり強く、粘性あり。濃い灰色。
- 4 黄黄褐色土 (10YR5/4) ローム粒、赤褐色粒少量含む。明るい茶色。
- 5 明黄褐色土 (10YR6/6) ローム、白色粒少量含む。しまり強い。
- 6 褐色土 (10YR4/4) ロームブロック多く含む。
- 7 鈍黄褐色土 (10YR7/3) 白色粒、ローム粒少量含む。白色顔じりの茶色。
- 8 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒少量。面ざりもの少ない。粘性あり。濃い茶色。
- 9 鈍黄褐色土 (10YR5/4) ローム粒、白色粒少量。

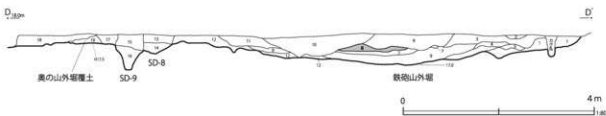
- 10 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒多量、白色粒少量含む。埴輪少量含む。こげ茶色。
- 11 黒色土 (10YR2/1) ローム粒、白色粒少量含む。粘性有り。黒色。
- 12 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒少量。薄い茶色。
- 13 ローム粒少量。しまっている。
- 14 ローム粒少量。粘性強い。濃い黒色。
- 15 黒褐色土 (10YR3/2) 白色粘土多量。ローム粒少量。粘性あり。灰色顔じりの茶色。
- 16 鈍黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒多量。粘性強い。こげ茶色。
- 17 暗褐色土 (10YR3/1) ローム粒少量。しまっている。黒色。
- 18 鈍黄褐色土 (10YR5/3) ローム粒少量。
- 19 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒少量。
- 20 暗褐色土 (10YR3/3)



13トレンチC 土層説明

- 1 淡黄色土 (2.5Y8/4) しまり弱く、粘性弱い。薄い茶色。
- 2 黄褐色土 (10YR6/6) 黄褐色粒子少量含む。明るい茶色。
- 3 鈍黄色土 (2.5Y6/4) ややしまっている。埴輪少量。明るい茶色。
- 4 鈍黄褐色土 (10YR6/4) 埴輪少量、黄褐色粒子多量に含む。濃い茶色。
- 5 褐色土 (10YR4/4) しまり強く粘性弱い。埴輪、黄褐色粒子多量に含む。
- 6 黄灰色土 (2.5Y5/1) しまり弱く、粘性強い。白色粒 (火山灰) 多量に含む。濃い黒色。
- 7 褐灰色土 (10YR5/1) しまり強く粘性強い。白色粒黄褐色粒多量に含む。濃い黒色。
- 8 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) しまり強く粘性強い。白色粒少量含む。濃い焦げ茶色。
- 9 黄褐色土 (2.5Y5/3) しまり強く粘性強い。濃い茶色。
- 10 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) しまり強く粘性強い。黄褐色粒子多量に含む。薄い茶色。
- 11 黄褐色土 (2.5Y5/4) しまり強く粘性強い。黄褐色粒子多量に含む。
- 12 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり強く粘性強い。

第27図 13トレンチB・C断面図



- 13 トレンチD 土層説明
- | | |
|--|--|
| <p>1 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ1~2cmロームブロック多く含みしまりややゆらい。</p> <p>2 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばらに含みしまりややゆらい。</p> <p>3 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多。φ1cmロームブロック少し含む。しまる。</p> <p>4 褐色土 (10YR4/1) ローム粒まばら。マンガン粒まばらに含む。ややしまる。</p> <p>5 褐色土 (10YR4/1) ローム粒。マンガン粒まばら。礫土粒わずかに含む。ややしまる。</p> <p>6 鈍黄褐色土 (10YR4/3) マンガン粒まざっている。灰褐色粘土粒多く含む。ややしまる。</p> <p>7 黒褐色土 (10YR3/2) マンガン粒まばら。ローム粒少し含む。しまる。黒色系。</p> <p>8 オリーブ黒色土 (5Y3/0) 黄白色粘土が帯状に堆積(上層)。火山灰集中(ジャリジャリ)。</p> | <p>9 オリーブ黒色土 (5Y3/0) 火山灰を含まない。まざりも少なく。きめ細かい。</p> <p>10 暗オリーブ色土 (5Y4/3) ローム粒。マンガン粒まばら。灰白色粘土粒多く含む。ややしまる。</p> <p>11 灰オリーブ色土 (5Y4/2) ローム粒まばら。マンガン粒少し含む。ややしまる。</p> <p>12 灰オリーブ色土 (5Y4/2) φ3cm灰褐色粘土ブロック多く含む。しまっている。</p> <p>13 灰色土 (5Y4/1) 洗間A層石まばらに含む。しまっている。</p> <p>14 灰色土 (5Y4/1) ローム粒まばらに含む。しまっている。</p> <p>15 灰色土 (5Y4/1) 黒色火山灰(洗間山)ブロックに含む。</p> <p>16 灰色土 (5Y4/1) マンガン粒多く含みしまっている。</p> <p>17 灰色土 (5Y6/1) 白色火山灰少し含み硬化。グライト。</p> <p>18 灰色土 (5Y6/1) カタ乱。</p> <p>19 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。しまっている。</p> <p>18層カタ乱土の下に偏かに残った奥の山古墳覆土。</p> |
|--|--|

第28図 13 トレンチD断面図

第27図は鉄砲山古墳内堀の断面図である。外側法面には2段の緩やかな段を有して底面に至る。検出された堀底面の標高は17.0mであった。

第28図は鉄砲山古墳外堀と奥の山古墳外堀にかけての断面図である。鉄砲山古墳外堀は他の箇所と同様、平坦な底面ではなくレンズ状となる。また浅間Bテフラも検出された。奥の山古墳外堀との間には8、9号溝が位置しており、両外堀の重複関係は不明であった。奥の山古墳外堀については、18層攪乱土の下に覆土が僅かに残っていたのみであり、法面は検出されなかった。

② 12トレンチ

12トレンチは昭和43年3月に設定、調査された1トレンチ(第4図参照)の西側の再確認調査区と面的調査を実施した東側に分かれる。再確認調査区では、概ね前回調査成果として記録された位置から鉄砲山古墳の内堀、外堀が検出されたが、前回調査と同様、奥の山古墳の外堀は検出されなかった。このことは今回の調査で本トレンチを挟む東側12トレンチ、西側の13トレンチいずれも外堀の遺存状況が極めて悪かったことから首肯されよう。また、本トレンチ南端部からは奥の山古墳内堀プランが検出されたが、これについても昭和43年の平板測量図には明確な記載がある。前回報告書では明記されていないが、昭和43年度に整備された内堀形態については、確認調査で検出された成果よりも園路計画を優先した結果と推察される。

12トレンチの調査面積は約430m²である。13トレンチ同様、北から鉄砲山古墳内堀、同古墳外堀、奥の山古墳外堀、同内堀が検出された。また、古墳の堀とほぼ並行する方向で7条の根切り

溝が検出された。奥の山古墳の外堀を除いて遺存状況は概ね良好であった。同外堀は、幅3m、長さ8mの範囲でプランが検出された。

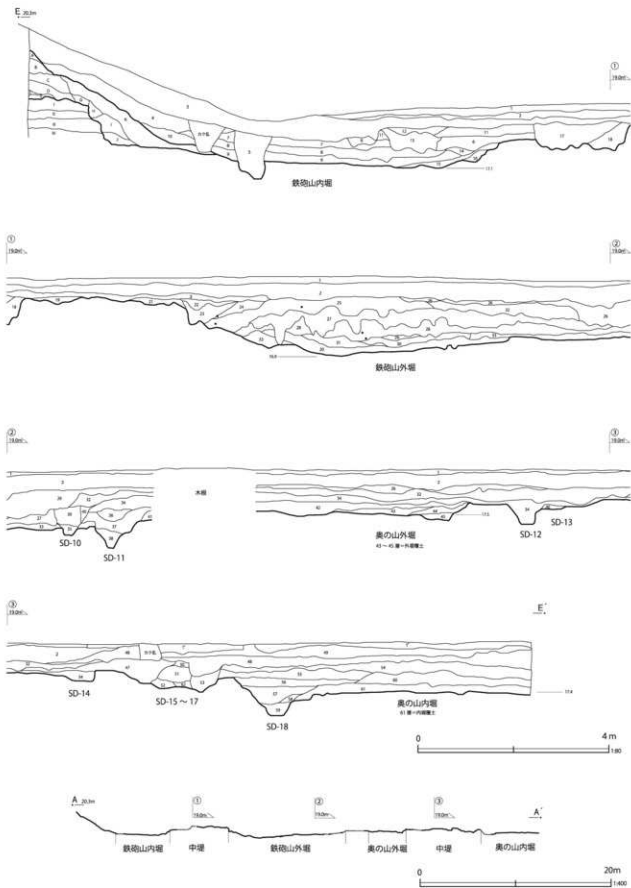
第28図は鉄砲山古墳の内堀から奥の山古墳内堀に至る長さ49mの断面図である。鉄砲山古墳の墳丘は、一部断ち割り調査を実施した。13トレンチA断面と同様、墳裾には灰黄褐色土からなるK層が貼り付けられていたが、K層と地山との間からはG～J層が検出された。いずれも盛土であることから、K層貼り付けの前段階に盛土したものと思われる。墳丘盛土直下の旧表土上面の標高は18.7mで、I区43トレンチの奥の山古墳後円部の裾で検出された標高とほぼ一致している。旧表土直上からA～F層からなる墳丘盛土が確認された。拳大のロームブロックが主体の盛土であった。K層先端から緩やかな勾配を経た後に内堀底面となる。内堀底面の標高は17.1mであった。およそ4.8mの平坦面を経て、小さな段を有する外側の法面となっていた。内堀幅は約10mである。鉄砲山古墳外堀は、小さな2段の段を有する法面から標高16.9mの最深部に至る。堀底は他で検出されたものと同様に平坦にならず、約6度の勾配で緩やかに上がっていく。ただし外側の立ち上がり部は10、11号溝および樹根により検出することができなかった。奥の山古墳の外堀は外側の立ち上がり部が不明瞭であった。43～45層が覆土と想定される。外堀底面の標高は17.5mであり、13トレンチB断面と同じ標高であった。45層が堆積する深さ15cmほどの浅い落ち込みを経て、僅かに遺存していた内側の立ち上がりとなっていた。奥の山古墳の中堤範囲から検出された根切り溝を経て、奥の山古墳内堀が検出された。現地表下80cmには内堀覆土である61層黒褐色土が、厚さ15cmほど遺存しており、埴輪の細片が確認された。堀底面はほぼ平坦で標高17.4mであった。この数値はI区造出し部周辺のローム地山面とほぼ一致する。したがって本トレンチで検出された奥の山古墳の内堀と外堀の底面は、概ね同じ深度を有し、その数値はI区墳丘部の調査で検出された内堀底面とも一致することが判明した。

奥の山古墳外堀覆土からはK103翳形埴輪片が出土した。また周辺からは同一個体と思われるK102翳形埴輪が表採された。

③ 27トレンチ

12トレンチの調査で、奥の山古墳の内堀が現況内堀の外側まで延伸していることが判明したため調査を実施した。現況の内堀法面を精査する方法で実施したが、写真図版31のとおり、ほぼ調査区全面から堅緻な黒褐色土からなる内堀覆土が検出された。遺存していた覆土の厚さは約15cm程度であり、一部堀底を確認したところ標高は17.4m前後であった。直下に所在する現況の復元内堀の最深部は標高16.4mである。内堀底面を平坦面と仮定した場合、昭和43年の整備の際に、深さ1mほど堀底を壊してしまったと推定される。なお本トレンチからは、少量の円筒埴輪片とK79形象埴輪片が出土している。

12トレンチの調査では鉄砲山古墳の内、外堀の大半を堀底まで調査した。その結果、大量の埴輪が出土したが、その報告は、今後刊行予定の鉄砲山古墳の調査報告書に所収する予定である。



第29図 12トレンチE断面図(1)

12 トレンチE 土層説明

- 1 2層面造成黒色土（笠土）
 1' 砂利
 2 合面造成真白色土
 3 純真褐色土（10YR5/3） しまりゆくゴツゴツの表土。
 4 純真褐色土（10YR5/3） ローム粒まばら、ややしまる。
 5 純真褐色土（10YR5/3） しまりややゆるい、塊状シブ層土。
 6 純真褐色土（10YR5/3） 真白色粘土粒多、同小石大ブロックまばらに含む、しまりややゆるい。
 7 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒まばら、塊状わずかに含む、しまりややゆるい。
 8 真褐色土（10YR3/1） ローム粒まばら、ややしまる。
 9 真褐色土（10YR3/2） しまっている。
 10 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多、ややしまる。
 11 真真褐色土（10YR5/2） 真白色粘土粒、同小石大ブロック多く含む、しまっている。
 12 真真褐色土（10YR5/2） 真白色粘土土、こぶし大ブロック多く含む、しまりややゆるい。
 13 真真褐色土（10YR5/2） 2層よりやや硬質、真白色粘土粒、同小石大ブロック多く含む、しまりゆるく木根の影響も有。
 14 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多、真白色粘土粒まばらに含む、しまっている。
 15 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多く含む、しまっている。
 16 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒、小豆大ロームブロック多く含む、しまっている。
 17 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多、白色粘土ブロックまばらに含む、しまりややゆるい。
 木根の影響。
 18 真真褐色土（10YR4/4） ローム粒、小石大ロームブロック多、しまっている。木根の影響。
 19 純真褐色土（10YR5/4） ローム多、しまっている。
 20 真褐色土（10YR3/1） まざりものなくしまっている。
 21 純真褐色土（10YR4/3） ローム粒多、小石大ロームブロック多く含む、しまっている。
 22 真真褐色土（10YR5/2） 小石大ロームブロックまばら、ローム粒を含む、ややしまっている。
 中硬砂層土とみられる。
 23 真真褐色土（10YR5/2） 61~8mロームブロック多く含む、ややしまっている。32、24層に比ベローム量中、中硬砂層土とみられる。
 24 真真褐色土（10YR5/2） 36層に似るしまりややゆるい、中硬砂層土とみられる。
 25 真真褐色土（10YR5/2） ローム粒多く含む、しまりややゆるい。
 26 砂利層（田道層減少）
 27 真真褐色土（10YR5/2） 真白色粘土粒多、61~8mロームブロック含む、しまりややゆるい。
 6層に似る。木根の影響有。
 28 暗褐色土（10YR3/0） ローム粒少し含む、ややしまっている。上層より硬質。
 29 黒色土（2.5Y2/1） 赤っぽい火山灰を挟み混じりに含む。アーク集巾層。
 30 黒色土（2.5Y2/1） 61m白色粘土ブロック塊状に含む。火山灰含む。粘質土、ややしまっている。
 31 黒色土（10YR2/1） まざりものなく粘質シルト土、しまりややゆるい。
 32 硬化グライ土層 道の影響でカタカナに硬化。
 33 黒褐色土（10YR3/1） 黒粒ロームブロックまばらに含むややしまっている。
 34 褐色土（10YR3/1） 白色火山灰まばらに含む、しまっている。水跡、水田開闢。
 35 褐色土（10YR4/1） ローム粒少し含む、しまりややゆるい。水跡、水田開闢。
 36 褐色土（10YR4/1） 白色火山灰粒まばら。減少し含む、ややしまっている。水跡、水田開闢。
 37 褐色土（10YR4/1） 白色火山灰粒まばらに含む、しまっている。マンガン粒多、水跡、水田開闢。
 38 褐色土（10YR3/1） 砂っぽくしまりややゆるい。マンガン粒多、水跡、水田開闢。

- 39 褐色土（10YR5/1） やや砂を含む、しまっている。水跡、水田開闢。
 40 褐色土（10YR1） 粘土。ローム粒を少し含む、しまっている。水跡、水田開闢。
 41 褐色土（10YR4/1） ローム粒を多く含むしまっている。塊状層土。
 42 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒を多く含むしまっている。
 43 真褐色土（10YR3/1） ローム粒少し含むしまっている。奥の山古墳外周層土。
 44 真真褐色土（10YR5/2） ローム粒多く含ましまっている。奥の山古墳外周層土。
 45 真真褐色土（10YR5/2） ローム粒多く含む。黒色土を断面に含む、しまっている。奥の山古墳外周層土。
 46 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒まばらに含むしまっている。
 47 褐色土（10YR4/1） 白色火山灰まばらに含む、しまっている。硬い。
 48 褐色土（7.5Y4/1） 白色火山灰多く含む。硬化グライ層。
 49 褐色土（5Y4/1） 白色火山灰多く含む。硬化グライ層。
 50 褐色土（10YR5/1） 白色火山灰多く含む。硬化グライ層。
 51 真真褐色土（10YR4/2） 白色火山灰まばらに含む。ローム粒多、しまっている。
 52 真真褐色土（10YR4/2） 白色火山灰まばら。ローム粒少し含む、しまっている。ミノ層土。
 53 褐色土（7.5Y4/1） 硬化グライ土ブロック、ロームブロック多（小石大）。
 54 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒まばら。白色火山灰少し含む、しまっている。
 55 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒まばらに含む、しまっている。
 56 褐色土（10YR4/1） ローム粒、真白色粘土粒まばらに含む。やや粘質、しまっている。
 57 褐色土（10YR4/1） 小豆大ロームブロックまばら。マンガン粒多く含む、ややしまっている。
 58 褐色土（10YR4/1） ローム粒少し。マンガン粒多く含む、ややしまっている。
 59 褐色土（10YR4/1） 小石大塊状ロームブロック多く含む、ややしまっている。
 60 褐色土（10YR4/1） ローム粒、小豆大マンガン粒まばらに含む、しまっている。
 61 真褐色土（10YR3/1） ローム粒、ハコ層片まばら。マンガン粒多く含む、しまっている。奥の山内周層土。
 62 真真褐色土（10YR4/2） 白色火山灰、ローム粒まばらに含む、しまっている。ミノ層土。

埋戻土

- A 真真褐色土（10YR5/4） ローム粒多、ややしまる。古墳盛土。
 B 純真褐色土（10YR5/3） 小石〜こぶし大ロームブロック多多く含む、しまりゆるい。古墳盛土。
 C 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多、こぶし大ロームブロック含む、しまりややゆるい。古墳盛土。
 D 真真褐色土（10YR4/2） 小石〜こぶし大ロームブロック多多く含む、しまっている。古墳盛土。
 E 真褐色土（10YR3/2） ローム粒少し含む、しまっている。古墳盛土。
 F 純真褐色土（10YR4/3） ローム粒、ブロック多く含む、しまっている。古墳盛土。
 G 真褐色土（10YR3/2） 水粒〜小豆大ロームブロック多。しまっている。やや粘質。古墳盛土。
 H 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多、塊状わずかに含む、しまりややゆるい。古墳盛土。
 I 真真褐色土（10YR4/2） ローム粒多く含む、ややしまっている。古墳盛土。
 J 褐色土（10YR4/1） ローム粒わずかに含む、やや粘質で1層も似る、しまっている。埋戻土。古墳盛土。
 K 真真褐色土（10YR4/2） 小ぶし大ロームブロック多く含む、しまっている。古墳盛土。

埋戻土調査等

- 1 真褐色土（10YR3/1） まざりものなし、しまっている。埋戻。
 B・H・N ローム地山。

第 30 図 12 トレンチE断面図（2）

第3節 Ⅲ区

Ⅲ区は奥の山古墳外堀北東コーナーから南方向へ検出された外堀域を中心とする。外堀の位置及び遺存状況を確認するために調査を実施した。また、本区からは内堀の北東コーナー部も検出された。調査前の状況は植栽および樹木が多かったが、概ね平坦面であった。

昭和42年3月に調査した第3トレンチは、本区の1トレンチ周辺に該当するが、当時の調査では外堀は検出されていない。なお本区は第6図のとおり、大半を平成19年度に調査し、平成20年度に一部のトレンチを拡張して調査を行った。また平成21年度には、外堀コーナー部の検出を目的に34トレンチを設定し調査を行った。

① 22トレンチ

本トレンチは第6図のとおり、平成19年度に調査した結果、外堀が検出されたため、平成20年度に大規模に拡張したものである。調査面積は約220㎡である。立木があったことからトレンチの形は変則に設定した。本トレンチからは前回整備で掘削されなかった内堀コーナー部が検出された。立ち上がりラインは1区12トレンチで検出されたプランの延長上であった。コーナー部は概ね直角であった。

第33図の上図は約10cm覆土を除去した際に検出された平面上の覆土の堆積状況である。4つの層が識別できたが、写真図版33のとおり、2～4層は褐色から暗褐色を示しており、ローム粒子及びブロックを多量に含有していた。それに対して、それらを被覆する4層は色調が明らかに異なる黒褐色土であった。これらの状況は中堤方向からの三角堆積を示すものと考えられる。

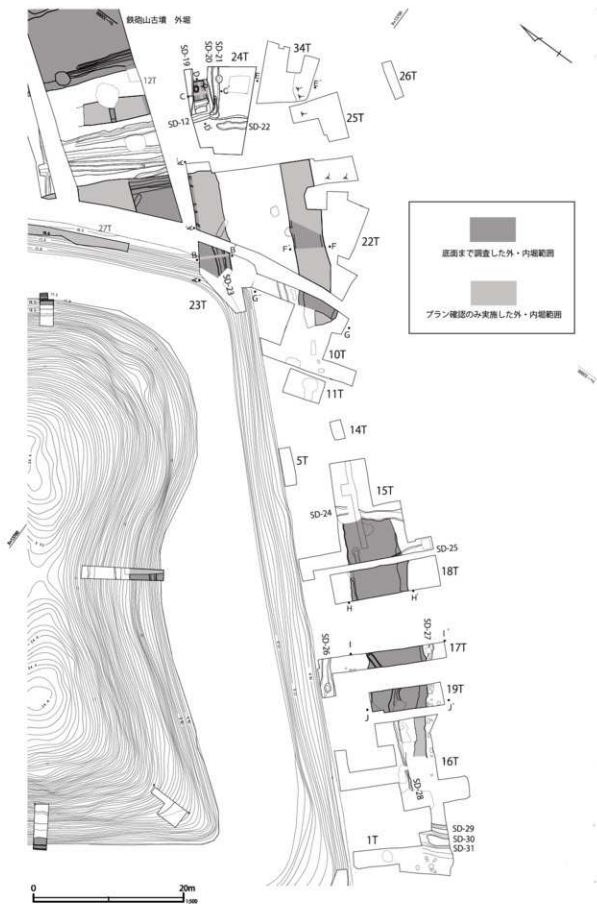
トレンチ壁面に沿って底面まで調査したところ、現地表下1m下の標高17.4mで堀底面が検出された。法面直下には幅0.8m、深さ0.3m程の溝状の落ち込みが検出された。断面観察の結果は、内堀最下層の覆土を切り込んでおり、時期は不詳である。これ以外は概ね平坦な底面が検出された。なお、トレンチ際を除き、底面まで調査せず現状保存とした。遺物はE51円筒埴輪をはじめ、円筒埴輪小片が少量出土した。

22トレンチからは外堀も検出された。内堀外側から8.0m東が外堀内側となる。したがって中堤幅は8.0mを測る。本トレンチ内では長さ16m分が検出された。外堀幅は3.8～4.2mであった。内側ラインはほぼ直線であったが、外側ラインはやや歪んでいた。大部分の覆土は現状保存とし、中央部のみ底面まで調査を行った。第34図F断面図のとおり、両方の法面とも緩やかな段を有していた。底面は外側が僅かに深い傾向にあり、標高は17.4～17.5mであった。覆土の堆積状況からは内堀で検出された土壌と酷似した1層土が検出された。なお覆土の土層観察用のベルト部分については完掘せず、現状保存とした。E62円筒埴輪片など、少量の円筒埴輪片が出土した。

なお本トレンチの外堀北東側は、確認面が東に向かって緩やかに傾斜していることが判明した。この傾斜は25、34トレンチでも確認された。

② 24トレンチ

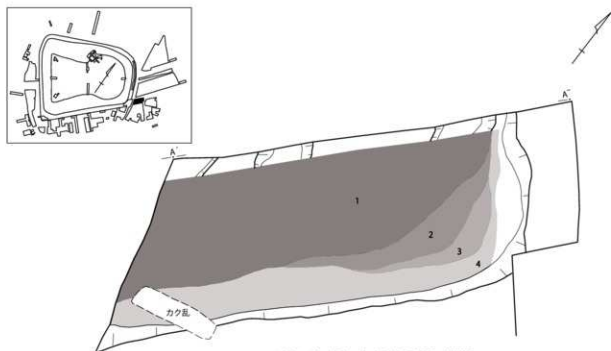
本トレンチの調査面積は約60㎡である。外堀覆土が僅かに検出された。検出された範囲は幅2.4mであった。周囲には5条の根切り溝と樹木が分布し、遺存状況は不良であった。第34図C、D断面図のとおり、底面標高は17.5mで上層には黒褐色土が堆積していた。



第31図 III区平面図(1)

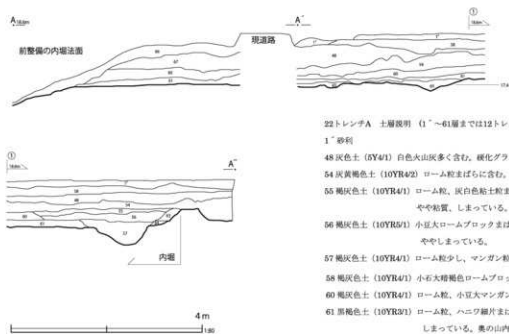


第32図 III区平面図(2)



22トレンチ 内堀コーナー部プラン微縮図 土層説明

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性が強く、しまりやや悪い、埴輪片を含む。
- 2 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや強く、しまりやや悪い、ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性強い。ローム粒、ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強い。ローム粒、ロームブロック多量含む。



22トレンチA 土層説明 (1'~61層まで22トレンチAと同一)

- 1' 砂利
- 48 灰色土 (5Y4/1) 白色火山灰多く含む、硬化グライ層。
- 54 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒まばらに含む、しまっている。
- 55 褐色土 (10YR4/1) ローム粒、灰白色粘土粒まばらに含む。
やや粘質、しまっている。
- 56 褐灰色土 (10YR5/1) 小豆大ロームブロックまばら、マンガン粒多く含む。
ややしまっている。
- 57 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒少し、マンガン粒多く含む、ややしまっている。
- 58 褐色土 (10YR4/1) 小豆大暗褐色ロームブロック多く含む、ややしまっている。
- 60 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒、小豆大マンガン粒まばらに含む、しまっている。
- 61 黒褐色土 (10YR2/1) ローム粒、ハニワ細片まばら、マンガン粒多く含む。
しまっている。奥の山内堀覆土。
- 63 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒多く含む、よくしまっている。
- 64 褐色土 (10YR4/4) ローム主体、よくしまっている。
- 65 褐色土 (10YR4/4) ローム主体、よくしまる。
- 66 暗褐色土 (10YR3/4) ボソボソの腐植表土。
- 67 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒、白色火山灰まばらに含む、よくしまっている。

第33図 22トレンチ平面図・断面図



SD-22

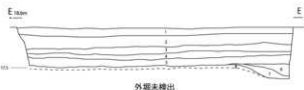
22トレンチF 土層説明

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒少し含みしまっている。(3D)
- 2 灰褐色土 (10YR4/2) ローム粒多く含む。
- 3 純黄褐色土 (10YR4/3) ローム主体。
- 4 灰黄褐色土 (10YR5/2) ローム粒。直径1cmロームブロック多く含みしまっている。(うす層)
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) しまっている。



24トレンチC, D 土層説明

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) まざりもの少なくなった黒色土。
- 2 灰黄褐色土 (10YR5/2) ローム粒多く、しまっている。
- 3 褐灰色土 (10YR4/1) 外堀を破す溝跡の覆土。ローム粒多く含む、しまっている。



34トレンチE 土層説明

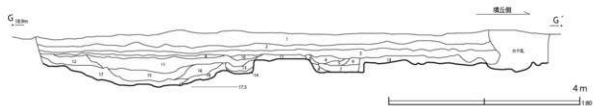
- 1 表土。
- 2 浅黄色粘土 (5Y7/4) 土質不均一。公園造成土。非常に堅微。
- 3 灰黄褐色シルト (10YR6/2) 洗間A多量。酸化鉄多量を含む。田舎田耕作土か。非常に堅微。
- 4 純黄褐色土 (10YR5/3) 洗間A少量含む。3層、5層の薄層層の色調。
- 5 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子微量含む。やや堅微。
- 6 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子及びφ5mmの同ブロック含有。やや軟質。
- 7 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子、同ブロック微量。土質均一。
- 8 ローム地山



23トレンチB 土層説明

- 1 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒まばら。マンガン粒多くしまっている。
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) φ2~3cmロームブロックまばら。マンガン粒多く含みしまっている。
- 3 灰褐色土 (10YR5/2) ローム粒まばら。マンガン粒多く含むややしまっている。
- 4 褐灰色土 (10YR5/1) ローム粒まばら。マンガン粒多く含むややしまっている。
- 5 純黄褐色土 (10YR5/4) ローム主体でややしまっている。

第34図 22・24・34・23 トレンチ断面図



10トレンチの土層説明

- | | |
|--|---|
| 1 赤褐色土 (10YR5/2) しまりやや強く、粘性、公団整備土。 | 11 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) しまりやや弱く、粘性やや強い、ロームブロックを多量に含む。 |
| 2 暗灰黄色土 (2.5Y3/2) しまり強く、粘性やや弱い、下部に酸化鉄粒子を多量に含む。 | 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/2) しまり弱く、粘性中、ロームブロックをわずかに含む。 |
| 3 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) しまり強く、粘性やや弱い。 | 13 黄褐色土 (10YR5/2) しまりやや強く、粘性やや強い、ロームブロックを多量、酸化物をわずかに含む。 |
| 4 褐色土 (10YR4/4) しまりやや強く、粘性中、ロームブロックをわずかに含む。 | 14 黄褐色土 (10YR5/3) しまりやや弱く、粘性中、ロームブロックを多量に含む。 |
| 5 褐色土 (10YR4/4) しまり弱く、粘性弱、ロームブロックをわずかに含む。 | 15 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱く、粘性中、ロームブロックをわずかに含む。 |
| 6 黄褐色土 (10YR4/3) しまりやや弱く、粘性やや強い、ロームブロックを含む。 | 16 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱く、粘性やや強い、ロームブロックを含む。 |
| 7 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱く、粘性強い、ロームブロックを多量に含む。 | 17 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや強く、粘性やや強い、ロームブロックを含む。 |
| 8 黄褐色土 (10YR4/3) しまり弱く、粘性強い、ロームブロックを多量に含む。 | 18 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱く、粘性やや強い、ロームブロックを多量に含む。 |
| 9 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり強く、粘性中、酸化鉄粒子、酸化物をわずかに含む。 | 19 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱く、粘性強い、ロームブロックを含む。 |
| 10 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱く、粘性中、酸化鉄粒子、酸化物、ロームブロックをわずかに含む。 | |

第35図 10トレンチ断面図

③ 25・26・34トレンチ

外堀のコーナー部を検出するために設定したが、いずれのトレンチからも検出されなかった。第34図E断面図のとおり、34トレンチ周辺は標高17.5mまで地山面が検出されなかった。他のトレンチで検出できた外堀の最底面は概ね標高17.5m前後であったことから、外堀コーナー部については削平された可能性がある。

なお22トレンチと同様、34、25トレンチにおいても地山ローム面の傾斜が確認された。地山の確認面標高の17.5mは、奥の山、鉄砲山古墳の墳丘下で検出された古墳時代旧表土面標高18.7mより1m以上低いことから、古墳築造時の地形を反映しているかは不明である。

④ 10・23トレンチ

第6図のとおり、平成19年度に10トレンチの調査を実施し、平成20年度に23トレンチの調査を実施した。22トレンチとの間に園路が所在する。本トレンチからは内堀と外堀が検出された。内堀は22トレンチの延長上で検出され、前回整備の法面の途中までの長さ4m程を検出することができた。第34図B断面図のとおり、縦走する23号溝が内堀の一部と重複していた。底面標高は17.3mで、22トレンチで検出された底面よりも10cmほど深くなっていた。

22トレンチの延長上で外堀が検出されたが、南側では検出されなかった。検出された長さはおよそ4mであった。第34図のとおり、外堀底面の標高は17.4mであり、底面は平坦とならない。中堤側の法面には幅60cmほどの落ち込みがあるが、土層観察からは外堀の埋設途中で掘削された状況を呈している。なお外堀と内堀の間には幅2mほどの落ち込みが検出されたが、延長上には伸びていないことから、溝跡ではないと思われる。時期は不詳であるが、覆土の状況から古墳時代の所産ではないと思われる。

⑤ 11・5トレンチ

11トレンチは、10トレンチで一部確認された外堀の延伸部の検出を目的に設定した。しかし樹木根による攪乱等もあり、外堀は検出されなかった。

5トレンチは前整備で掘削された内堀範囲の外に、本来の内堀が遺存する可能性があることから調査を行ったが、覆土は検出されなかった。

⑥ 15トレンチ

幅6～7.2mの外堀が長さ5mの範囲で検出されたが、北側では覆土が認められず検出することができなかった。外堀を壊すように24、25号溝が横走していた。不定形な土坑状の落ち込みが2箇所で見出されたが、いずれも古墳時代に帰属するものではなく近世以降の所産と推測された。なお、本トレンチも内堀側に延伸したが、近世以降の所産と考えられる26号溝以外は検出されなかった。

⑦ 18トレンチ

幅7.6～7mの外堀が長さ4mの範囲で、ほぼトレンチ内全面で検出された。外堀内側の法面は約35度勾配で傾斜し、標高17.3mの最深部に至る。底面は墳丘側が低く、外側に向けて緩やかに傾斜していた。外側法面は16度勾配であり、内側に比べて緩やかであった。第37図のとおり、本トレンチからは埴輪片が多量に出土した。E20～22、E66～70等、第6節で分類したB類の円筒埴輪が主体であった。出土傾向は、下層からの出土は少なかった。外堀ほぼ中央に分布が集中することから、どちらから流れ込んだかは判然としなかった。

⑧ 17トレンチ

幅7mの外堀が長さ2.2mの範囲で検出され、確認面から深さ30cmほど遺存していた。外堀底面の標高は17.6～17.4mで概ね平坦であったが、外側法面はステップ状の小さな段が認められた。

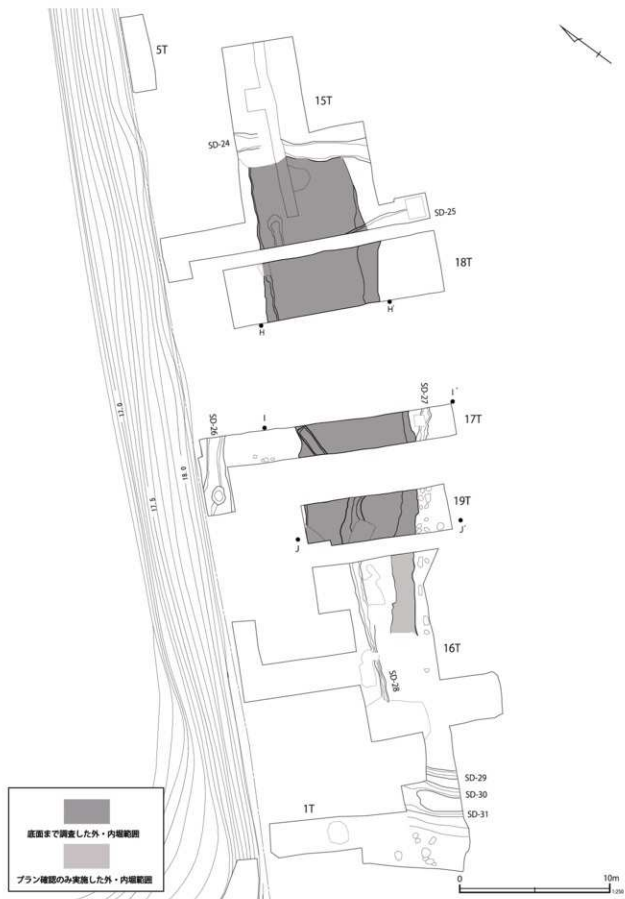
本トレンチは内堀側に拡張して、内堀の残存部の確認を行った。しかし、覆土の様相から近世以降と推定される26号溝および新しい土坑が検出されたのみで、内堀は検出されなかった。

⑨ 19トレンチ

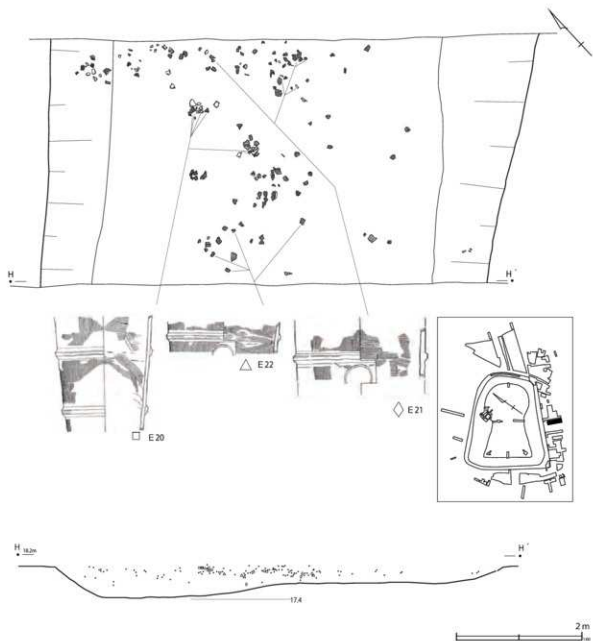
幅7.2mの外堀が長さ3mの範囲で検出された。ほぼ中央は28号溝により底面が壊されていた。また攪乱による影響も大きかった。外堀は確認面から深さ30cm程遺存しており、底面の標高は17.6mであった。内側から外側に向かい、やや下がる傾向にあった。外側は緩やかな勾配を示していた。覆土からはK01人物埴輪、K63不明形象埴輪、E23朝顔形埴輪等が検出された。人物埴輪の破片は顔部しか出土しなかった。出土位置は外側から約1.5mの位置であるが、外側から流れ込んだかは不明である。

⑩ 16トレンチ

幅2m程度の外堀覆土が長さ8mの範囲で検出された。検出された覆土は黒褐色を呈し堅緻であった。残存していた覆土は掘削せずに現状保存とした。しかし本トレンチのほぼ中央で途切れた外堀覆土は以南からは検出されなかった。樹木の根等による攪乱の影響が大きかった。さらには28号溝以南は重機の掘削による攪乱が認められた。本トレンチのほぼ中央から検出された28号溝は、外堀覆土との重複関係は判明しなかったが、近世以降の遺構と推定される。



第36図 Ⅲ区平面図(3)



第37図 18トレンチ遺物分布図

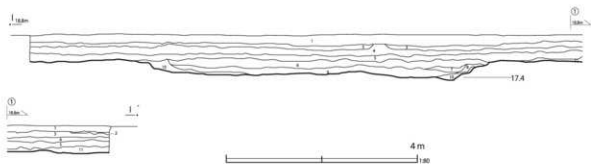
なお本トレンチも内堀側に拡張して内堀の残存部位の確認を行ったが、検出されなかった。

⑩ 1トレンチ

トレンチ名のとおり、最初に調査に着手したトレンチであるが、外堀は検出されなかった。

なお第6図のとおり、昭和43年3月の確認調査で設定した第3トレンチは、本トレンチから検出された29～30号溝周辺を通っていたと思われる。したがって前回の確認調査では、外堀の遺存していない箇所を調査し、一重堀と判断したと推測される。

なお本トレンチも内堀側に拡張して内堀の残存部位の確認を行ったが検出されなかった。



17 トレンチ 1 上層断面

1 黒色 (2.SY21) 表土、概い上。

2 増オリーブ褐色 (2.SY32) ロームブロック、ローム粒子を多量に含む、粘性弱く、しまり強い。

3 黄灰色 (2.SY41) AK石と鉄分を含む、粘性非常に弱く、しまり非常に強い。

4 オリーブ褐色 (2.SY42) AK石を多量に含む、ローム粒子、鉄土粒子を少量含む、粘性弱く、しまり非常に強い。

5 オリーブ褐色 (2.SY43) ロームブロックを含む、粘性弱く、しまり強い。

6 褐色 (10YR4/4) 粘性が強く、しまりはやや強い、ローム粒子がじゅっかん混入。

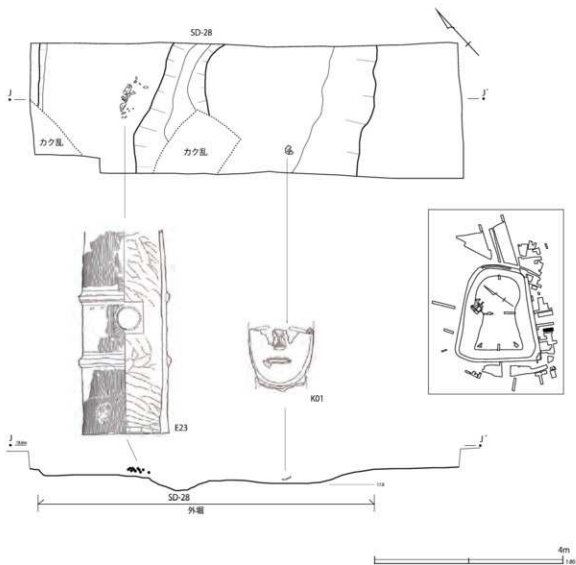
7 黄褐色 (10YR5/3) 粘性が強く、しまりはやや強い、ロームブロック多量。

8 黄褐色 (10YR5/2) 粘性は中、しまりは中。

9 結核褐色 (2.SY42) 粘性は強く、しまりはやや強い、ロームブロック多量。

10 黄褐色 (10YR5/3) ローム多。

第 38 図 17 トレンチ断面図



第 39 図 19 トレンチ遺物分布図

第4節 IV区

IV区は墳丘南側の外堀範囲を中心とする。第6図のとおり、平成19年度に大半の調査を実施し、平成20、21年度に補足調査を行った。

33トレンチから西側は比高差1mの崖上となり、そこからは現在の水田面となっている。検出された外堀の長さは約56mである。外堀の位置は概ね園路の直下に位置しており、現地地表下40～50cmがローム層の確認面であり、堀底は現地地表下約1mから検出された。ローム層の上はオリブ褐色を呈する旧水田耕作土が被覆していた。なお公園整備前の状況は第4図のとおり、昭和43年度調査の2トレンチの位置には段差があったようである。また、今回設定した4トレンチを跨ぐように道路が存在していた。

① 2トレンチ

昭和43年度の整備に伴う掘削範囲と本来の内堀との関係を確認するために調査を実施した。

現況の法面は整備後に埋没した状況だった。8、9層は昭和43年度以降に三角堆積した土壌と想定される。II区で検出されたような内堀覆土の残存は認められなかった。なおトレンチ端から34号溝が検出された。幅60cm、深度は30cmであった。溝跡の覆土は、平安時代の遺物が検出されたものと近似していることから、平安時代の可能性がある。

② 21トレンチ

外堀の南東側コーナーを検出する目的で設定した。樹木根等による攪乱も多かったが、ローム層からなる確認面は比較的遺存状況が良好であった。しかし、内堀の覆土は検出されなかった。

なお本トレンチからも平安時代の可能性がある32号溝が検出された。

③ 8・20トレンチ

平成19年度に8トレンチ、20年度に20トレンチを設定し、調査を行った。現地地表下30cmに、ローム層の確認面が検出された。確認面は概ね良好であったが外堀覆土は検出されなかった。なお本トレンチからも平安時代の可能性がある溝跡が検出された。2条の溝が重複している状況であったが新旧関係は判然としなかった。これら8、20、21、2トレンチで検出された溝跡は断面形態および方向性から、同一の溝跡の可能性が高い。

④ 7トレンチ

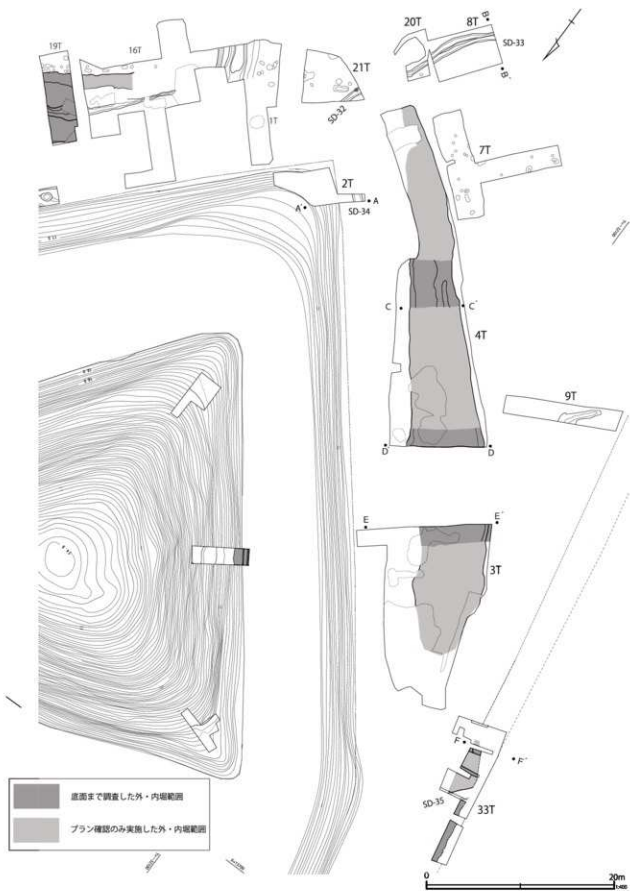
4トレンチで検出された外堀プランの延伸範囲を確認するために調査を実施した。現地地表下約40cmが地山ローム層である確認面であった。樹木根による攪乱がややあったが、確認面の状況は比較的良好であった。しかし、外堀の覆土は検出されなかった。

⑤ 9トレンチ

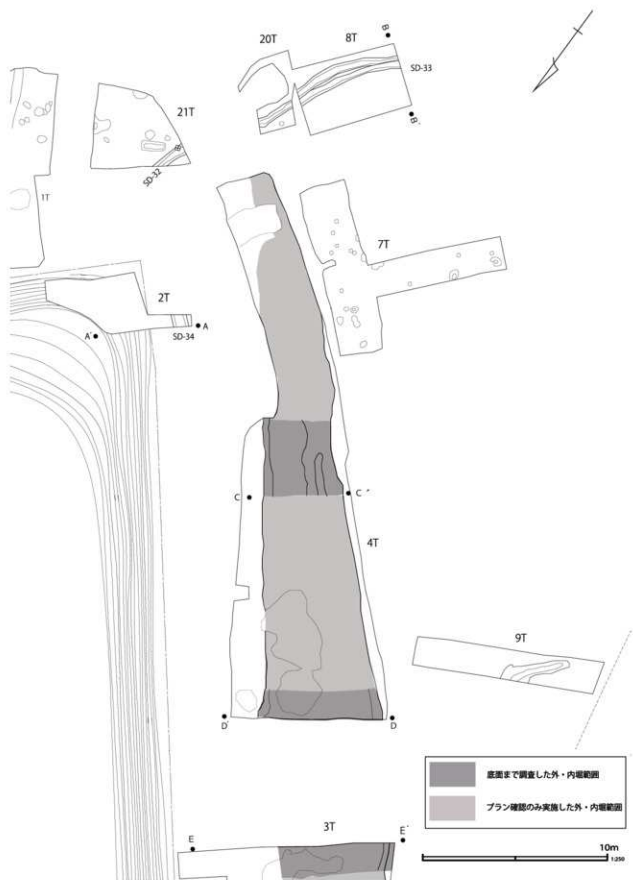
外堀の外側範囲の確認を目的に調査を実施した。現況は樹木が生い茂っており、その隙間にトレンチを設定した。現地地表下約40cmで地山のローム面の確認面が検出されたが、不定形な溝状の落ち込みが認められたのみで、外堀に伴う覆土等は検出されなかった。

⑥ 4トレンチ

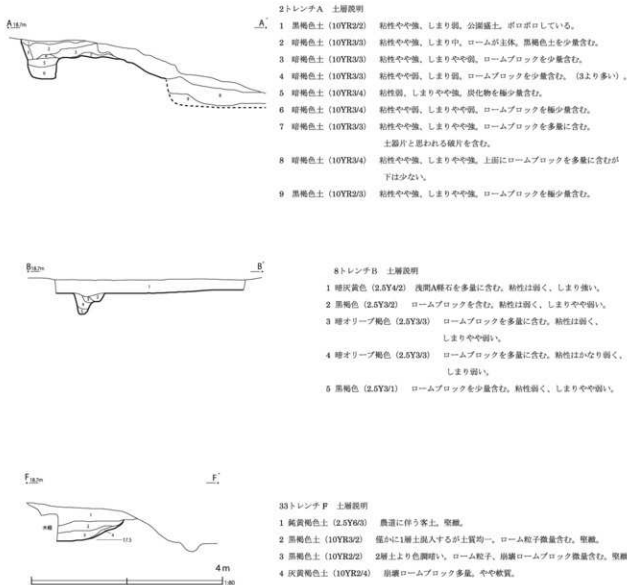
外堀のプランが、長さ35mの範囲で検出された。奥の山古墳の外堀の中で最も遺存状況の良好な範囲であった。大部分はプラン確認のみ実施し、覆土は現状保存とし、2箇所について、外堀の



第40図 IV区平面図(1)



第41図 IV区平面図(2)



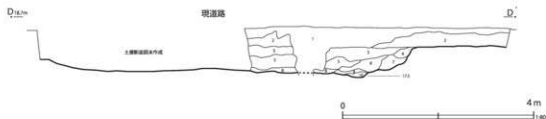
第43図 2・8・33トレンチ断面図

遺存状況等を確認するために堀底面まで調査を実施した。

遺存状況は、トレンチ西端は公園整備後に植栽した樹木の根による攪乱の影響が大きかった。また東端にも攪乱が入っていた。それ以外の箇所は概ね遺存状況は良好であった。第44図の土層断面図は、攪乱、樹木根により壊されていなかった外堀覆土の状況を示す。これによると外側の法面は傾斜の大きい勾配から、約50cmの小さな段を経て、標高17.5mの堀底面となっていた。覆土のうち、第3層は小礫を含有することから近年の園路整備等の影響が大きいと考えられる。したがって、遺存していた覆土は黒褐色を呈する第5層以下である。

本トレンチは、一部堀底まで調査を実施した。第45図は、その範囲の遺物分布図である。外堀は内側は緩やかな勾配を保ちつつ直線的に堀底に至る。対して外側は緩やかな段を有しており、立ち上がりも非常に緩やかであった。

図化できたのはE24朝顔形円筒埴輪、E26、E27、E48、E52等の円筒埴輪であるが、形象



4トレンチ 土層説明

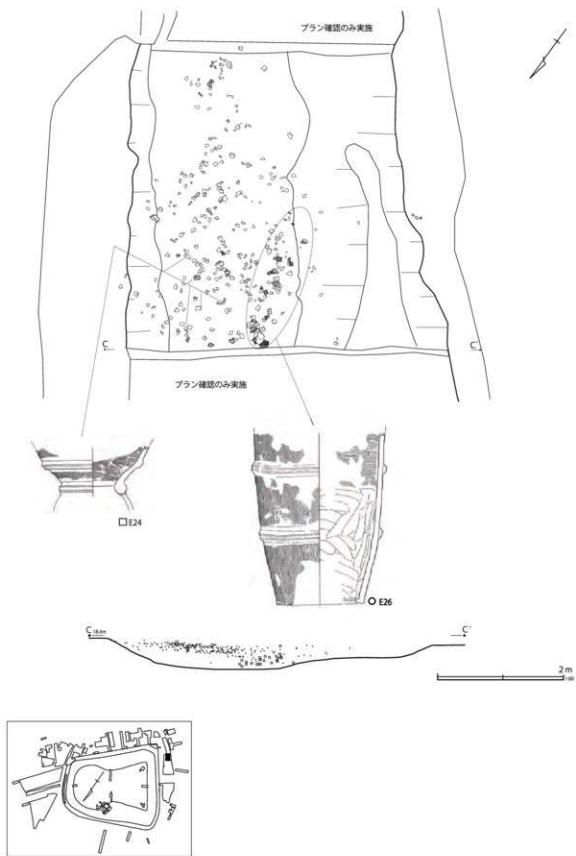
- | | |
|--|--|
| <p>1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細かいロームブロックと大きなロームブロック (4×4m) を含む。粘性は弱く、しまり強い。(擾乱)</p> <p>2 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細かいロームブロックと夜明AK石を含む。粘性弱く、しまり強い。</p> <p>3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) ロームブロック多量、小石を少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。</p> <p>4 黄褐色 (2.5Y5/6) ロームブロックを少量含む粘性弱く、しまり強い。</p> | <p>5 黒褐色 (2.5Y3/2) ロームブロックを少量含む。粘性やや弱い。</p> <p>6 黒褐色 (2.5Y3/1) ロームブロックを少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。</p> <p>7 黄褐色 (2.5Y5/3) 炭化物を少量含む。粘性弱く、しまり強い。</p> <p>8 黒褐色 (2.5Y3/2) ロームブロックを少量含む。粘性強く、しまり弱い。</p> <p>9 黒褐色 (2.5Y3/2) ロームブロックを少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。</p> <p>10 黄褐色 (2.5Y5/6) ロームブロックを少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。</p> |
|--|--|



3トレンチ 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 表土。根の侵入が非常に多く、粘性弱く、しまりやや弱い。</p> <p>2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 埴輪片と見られる赤色の粒子が見られる。粘性弱く、しまりかなり強い。</p> <p>3 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 黒色粒が少量混入。粘性弱く、しまり強い。</p> <p>4 黒褐色 (2.5Y3/2) 埴輪片と見られる赤色粒子が見られる。粘性弱く、しまり強い。</p> | <p>5 黒褐色 (2.5Y3/1) 埴輪片 (中) を数点含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。</p> <p>5' 黒褐色 (2.5Y3/1) ローム粒子含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。</p> <p>6 黒褐色 (2.5Y3/1) ローム粒子多く含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。</p> <p>7 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性弱く、しまりやや弱い。</p> <p>8 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性弱く、しまり強い。</p> <p>9 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 埴輪片を含む。粘性弱く、しまり強い。</p> <p>10 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) ローム粒子多量含む。粘性弱く、しまり強い。</p> |
|--|---|

第44図 4・3トレンチ断面図



第45図 4トレンチ遺物分布図

埴輪は出土しなかった。遺物の出土傾向としては、下層土の堆積後に中堤側から流れ込んだような出土状況と言える。

㊦ 3トレンチ

長さ14mの範囲で外堀覆土が検出された。東側4トレンチに近い部分の遺存状況は比較的良好であったが、西側は覆土の遺存状況が悪くなり、西端からは検出されなかった。また4トレンチと同様、樹木の根による攪乱等が多かった。

第44図土層断面図のとおり、現地表下約50cmがローム層の確認面であり、内側の法面から緩やかに落ち込み、標高17.5mの堀底面に至る。底面形態は、中央が僅かに深いものの概ね平坦であった。外側の法面はごく小さい段が認められる以外は概ねなだらかな勾配であった。覆土は第4層から黒褐色を呈し、本来の外堀覆土となる。したがって厚さ70cmほど覆土が遺存しており、4トレンチと比較すると遺存状況が良好であった。出土遺物はE48、E52、E63等の円筒埴輪である。形象埴輪は出土しなかった。

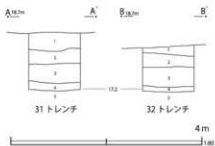
㊧ 33トレンチ

外堀の遺存範囲の最も外側を確認するために、現況で水田面との崖線を呈する箇所にはトレンチを設定した。その結果、外堀覆土が検出された。第4図の西端に記載されている公園整備前の道路が、崖線に沿って検出され、その道路跡より南から、現水田面までの幅約3mの範囲から外堀覆土が検出された。第43図のとおり、検出された底面は揺るやかに立ち上がっていたことから、外堀外側の法面付近と推測される。遺存していた底面は標高17.5mであり、3、4トレンチで検出された底面レベルと同じであった。なお覆土の2、3層は黒褐色を呈する堅緻な土壌であった。

本トレンチからは幅約70cmの35号溝が検出された。覆土下層から第76図Z04の平安時代須恵器が出土したことから、この溝は平安時代の所産と想定される。

第5節 V区

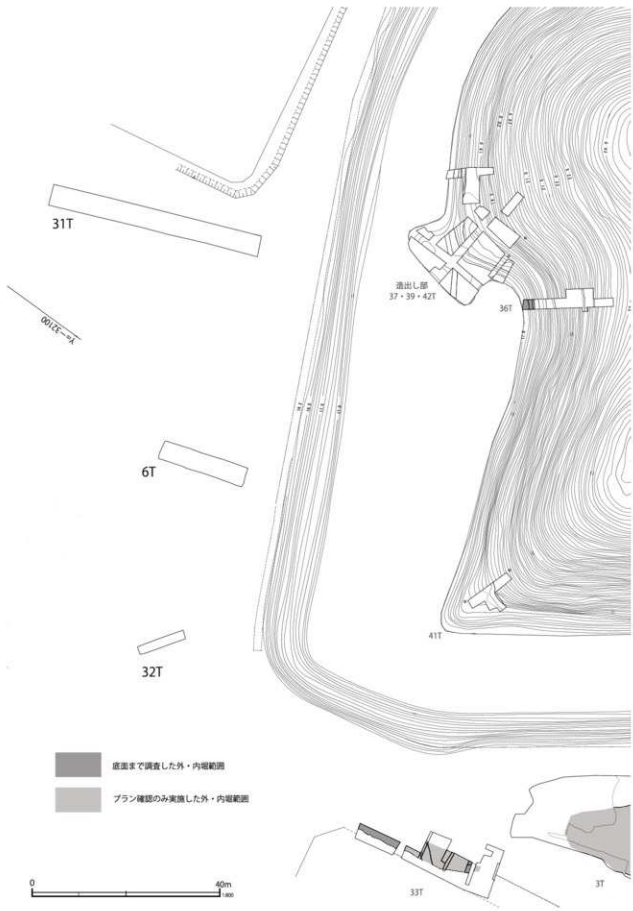
V区は埴丘西側において外堀を検出するために設定した。平成19年に6トレンチ、平成21年度に31、32トレンチの調査を行った。これらのトレンチ箇所は、第4図のとおり他の場所より一段低い水田として使用されていた。公園整備時に第46図のとおり凝灰岩を含む造成土で盛土したと考えられる。いずれのトレンチも標高17.2mに遺存していたローム面を確認面としたが、外堀は検出されなかった。



31・32トレンチ 土層説明

- 1 褐色土 (10YR4/4) 表土層。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 小礫、有機物等含有物多。ハニワ片少量含む。
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) 凝灰岩、粘土等多量を含む。公園造成土。
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭化物粒子微量含む。 目録作土 (公園造成前)
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) ローム層 (黒色)。

第46図 31・32トレンチ土層柱状図



第47図 V区平面図

第6節 円筒埴輪

① 概要

今回の発掘調査により、多くの遺物が出土したが、その90%以上は円筒埴輪である。

円筒埴輪には普通円筒埴輪（以下、円筒埴輪）と朝顔形円筒埴輪に区分される。ただし小破片のみで両者を区別することは不可能である。ここでは円筒部下半以下の小個体については、普通円筒埴輪と仮定して観察表に記載した。内傾する肩部や花状部が識別できた個体のみ、朝顔形とした。

3カ年の調査で多くの円筒埴輪が出土したが、口縁部から底部まで復元できた個体は皆無であった。さらには凸帯の段数が判明したものもなかった。

円筒埴輪は既報告のとおり、色調、胎土・含有物、調整方法により二つのグループに分離可能である。近年の研究で、いくつかの呼称があるが、ここでは既報告に準拠して、赤褐色の色調に代表される一群をA類と呼称する。また、橙色の色調に代表される一群をB類と呼称する。当然ながら器面状態等が不良で、分類に迷う資料もあるが、ここでは観察表のとおり、B類よりもA類に近似するものを（A）、B類に近似するものを（B）と表記した。

また、凸帯数については既報告に所収されているものを含め不明であるが、表記が煩雑となるため便宜的に4条5段構成と仮定して記述する。前回報告では、3条4段構成が推定されているが厳密には判らない。今回出土したのものには最下段の幅が狭い、いわゆる低位置凸帯円筒に類するものが多数認められる。これは鴻巣市生出土塚遺跡D・E地点やM地点から多数出土しているが、これらは基本的に4条5段構成であることが理由である。なお、生出土塚D、E地点から出土した第1段が10cm以内の低位置凸帯の個体は、透孔の位置が第3段のものと4段のものが拮抗している。したがって透孔から残存部位の段数を推定することはできない。

またB類については、近似する類別等から判別することができず、凸帯数を推定する根拠はない。ただしA類と比較するとE20～22、E26等、大型品が多い。このことから4条5段以上の構成をとると推定される。したがってA類同様に4条5段構成と仮定して計測値等を記載した。

② 円筒埴輪A類

A類は鴻巣市生出土塚埴輪窯産と想定されているものである。鮮やかな赤～赤褐色の色調である。胎土は後述するB類と比較して砂礫が少なく、酸化鉄粒子の含有率が高いものが多い。

第48図E01から第49図E18はI区墳丘部の各トレンチから出土したもので、E10、13を除きすべてA類である。計測あるいは推定できた口径はE01、03、06が28～31cm前後である。底径は最小のE17の20cmから最大のE09の25cmである。

第1段の高さは2種類に分別できる。最小はE16の7.1cmである。E09も8.3cmと低い。E15、E18は10cm前後である。対して墳丘中段テラスに樹立していたE08は16.6cmと高い。E08は底径19cmと小さく、4条5段構成の場合、かなり細身となることから注意が必要である。なお、E08と並んで検出された個体は、第1節のとおり、現状保存して取り上げなかった。その個体は第1段まで遺存しており、高さはE08と概ね同じであった。また、E08と直径が近似するE11は第3段の高さが11.6cmと10.3cmで近似する。

口縁端部は平坦だがやや丸みを帯びるE01、凹状を呈するE03等がある。また口縁部内側はナデ

調整により浅い沈線状となる。口縁部外面のハケメは概ねナデ消されているが、E03のように、ハケメ痕が残る個体が多い。口縁部内面はE01、03のように沈線状の凹み直下からヨコハケが残る。

凸帯の形態は、概ねM字状を呈するが、凸帯貼り付け時のナデツケが甘く、特に下端については器面との境界に接合痕が明瞭に残る。凸帯直下のナデツケは概して雑で、E02のようにハケメが多く残る場合が多い。また、凸帯上下のナデによる凹みは概して雑で、浅い傾向にある。E15のように水平に貼りつけておらず波打っていたり、斜めになっている個体も多い。

透孔は、確認できたものはすべて円形である。E01、32のように凸帯下端ぎりぎりに穿孔する個体や、凸帯下のナデ直下から穿孔する個体が大半である。なお、ヘラ記号は小片を含めて1点も確認されなかった。

底部の遺存する個体すべてに製作時に敷いた痕跡とされる棒状の圧痕が認められた。なおB類にみられるような底面の中折れ上の突出があるものはなく、端部内面は丸くなっている。

外面のハケメ調整については、概ね傾斜の弱いナメハケとタテハケである。ただしE09、E14等、底部周辺にハケメ調整が及んでいない個体が多く、概して雑な整形と言える。内面は器形に合わせて傾斜の強いナメハケ、ヨコハケであるが、調整は雑で、ハケメがない部分も多い。特に第1段の内面はE08、42等、輪積み痕が明瞭に残る個体が多い。

外面ハケメ後に、E08、E12など部分的にタテナデが施される例が認められる。しかし、その場所に規則性はない。

E53はⅡ区第13トレンチの奥の山古墳の外堀範囲から出土したものだが、攪乱土からの出土である。痕跡的な凸帯であり、ほとんど突出しない。色調と胎土は明らかなA類を示すが、隣接する鉄砲山古墳から出土した円筒埴輪に酷似していることから、本資料は鉄砲山古墳に帰属する円筒埴輪が混入したものと推定される。

③ 朝顔形埴輪A類

図化できた個体はE04、05の2個体の口縁部のみである。E04の推定口径は35.0cm、E05は39.8cmである。花状部凸帯は幅1.9cm、厚さ0.3cmと薄く、扁平である。口縁部上位で強く外反する。口縁端部は強く凹み、沈線状を呈する。内面上位はナデ整形により緩やかに凹状を呈する。外面調整は、上位はハケメが雑にナデ消され、以下、タテハケである。内面調整はヨコハケである。

④ 円筒埴輪B類

B類は橙色の色調である。胎土には多量の砂礫を含む。また含有量は少ないが、白色針状物質を含む個体が多い。近年の研究で比企地方あるいはその隣接地の窯産と想定されている。

A類と同様、B類も遺存部位が少なく、全体の形態からの分類はできない。また段数も判明する個体はなかった。B類には大型品が多い傾向がある。E25の口径は48cmもあり、A類E01の31cmと比較すると1.5倍以上となる。口縁部は欠失しているが、大型個体の現存部位の最大径はE21が36cm、E22が38cmである。最大径は30cm前後のA類と比較して明らかに大きい。

またA類においては第2段もしくは第3段の高さはE01、11、27のように10～12cm内に収まるが、B類においてはE20が18.9cm、E26が16.9cmである。口径等の推定復元ができた個体のみの比較ではあるが、B類は口径、段高いずれもA類の1.6倍ほどの大きさとなることは特筆される。

口縁端部、凸帯等の整形が非常に丁寧であることはB類の特徴である。口縁端部は概ね平坦あるいは弱い凹状を呈する。断面図からはA類との差異は少ないが、均一に端部を仕上げている、不均一なA類とは対象的である。また口縁部内側はナデ調整により浅い沈線状となる。口縁部内外面ともハケメが丁寧にナデ消されている。特に内面についてはE25のように、沈線状の凹みから2cm幅ほどハケメが丁寧にナデ消されており、A類との差異が指摘できる。

凸帯の成形、整形も概ね丁寧で、弱い凹状の断面台形を呈する。器面へのナデツケも丁寧に接合痕は残さず、口縁部と同様、ハケメ調整との境界付近は丁寧にナデ消されている。

透孔はすべて円形である。E21、22、64のように凸帯下のナデツケ部分を避けて穿孔される個体が多い。なおE26は第3段に透孔は配置されていないと思われる。A類と同様、ヘラ記号は小片も含めて1点も確認されなかった。

外面のハケメ調整については概ねタテ方向である。A類と比較するとE19、E26のように底面付近までハケメ調整が残る個体が多い。

内面の調整もA類とは異なる。上位は丁寧なヨコハケが施されるがE10、13、26のように下半はタテ、ナナメ方向の工具ナデとなる。底部の遺存する個体すべてに製作時に敷いた痕跡とされる棒状の圧痕が認められた。E26は自重によるものか、部分的に内側に折れ曲がっている。

⑤ 朝顔形埴輪B類

円筒部のみ遺存するE23と頸部のみ遺存するE24の2個体が該当する。

E23は焼成が悪いことから他のB類の個体と色調が異なるが、凸帯の形態と内面調整により本類に分類した。第3段まで遺存しており、第3段が緩やかに内傾することから2条凸帯の可能性もあろう。円形透孔は第2段に配置される。推定直径6cmとやや小径である。第1、2凸帯とも凸帯は厚く、凸帯上下のナデツケは丁寧である。外面調整は概ねタテハケだが、第3段に一部ヨコハケが認められる。遺存する範囲内の内面調整は工具ナデであり、ハケメはない。

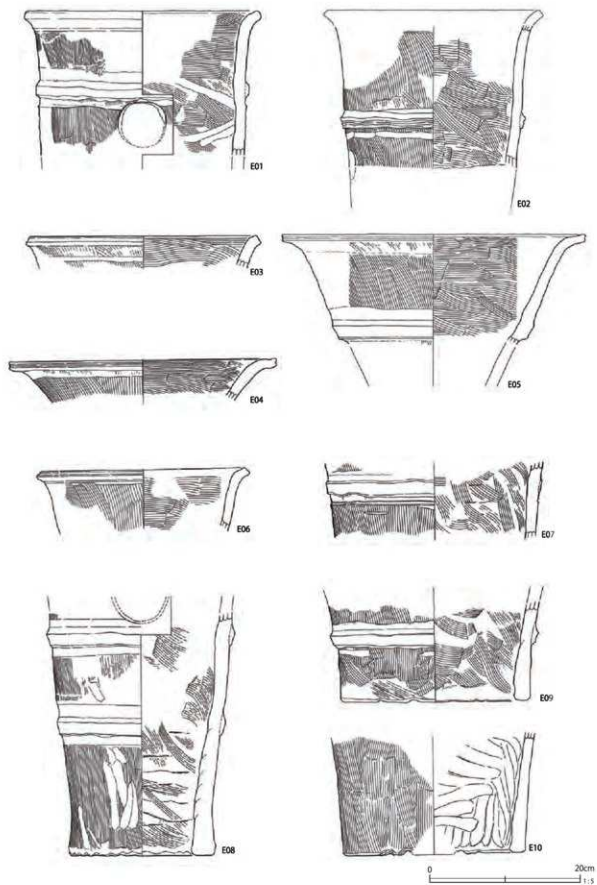
E24は頸部のみ遺存する。頸部凸帯から小さく直立した後に大きく外傾する。頸部、花状部凸帯とも断面は略台形で角をきれいに作出し、丁寧にナデツケされる。外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケである。

⑥ その他

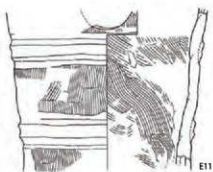
第58図は既報告の円筒埴輪の抜粋である。形象埴輪と合わせてコンテナ3箱を整理したとされるが、その大半は整備工事中の表採資料とされている。既報告資料のA類は「三条凸帯と推定される小型品で、底径は16~17cmのものと20cm強のものがある。口径は34cm前後のものがある。(略) B類は断面形態の整った凸帯をもち、内面のハケ調整の後、ナデを加えており、丁寧に製作である。」と記されている。

A類については口径、底径とも今回出土した資料とほぼ同じ数値を示す。B類については既報告資料の中には、法量を推定できる個体はないが、今回出土した資料と同じ特徴をもつ。

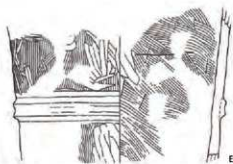
なお、凸帯の数値的分析やA類とB類の製作技法上の差異等の考察は第5章に記した。



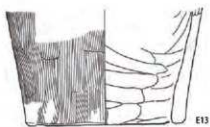
第48図 円筒埴輪(1)



E11



E12



E13



E14



E15



E16



E17



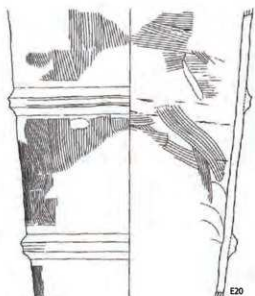
E18



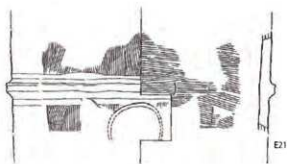
E19



第49図 円筒埴輪(2)



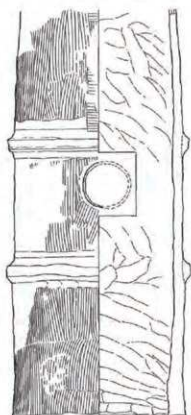
E20



E21



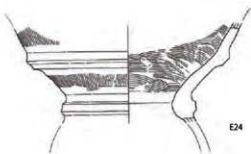
E22



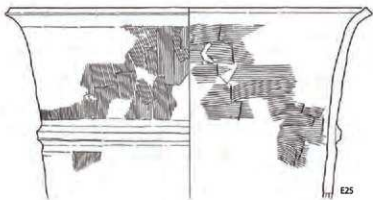
E23



ヨコハタ



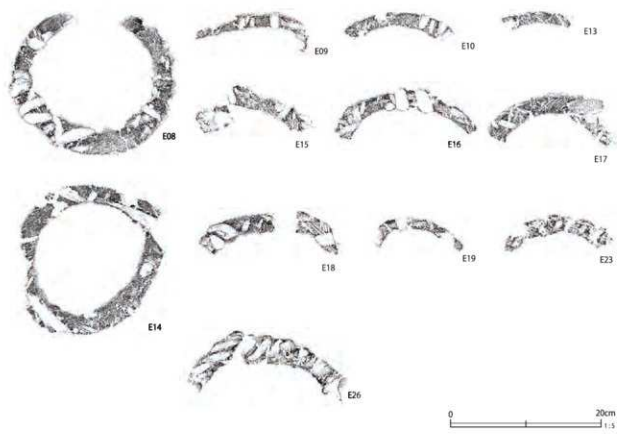
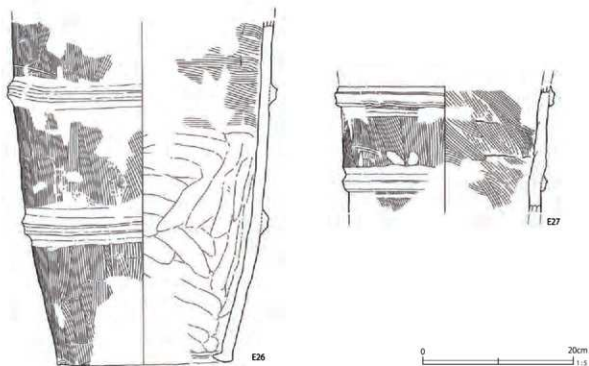
E24



E25

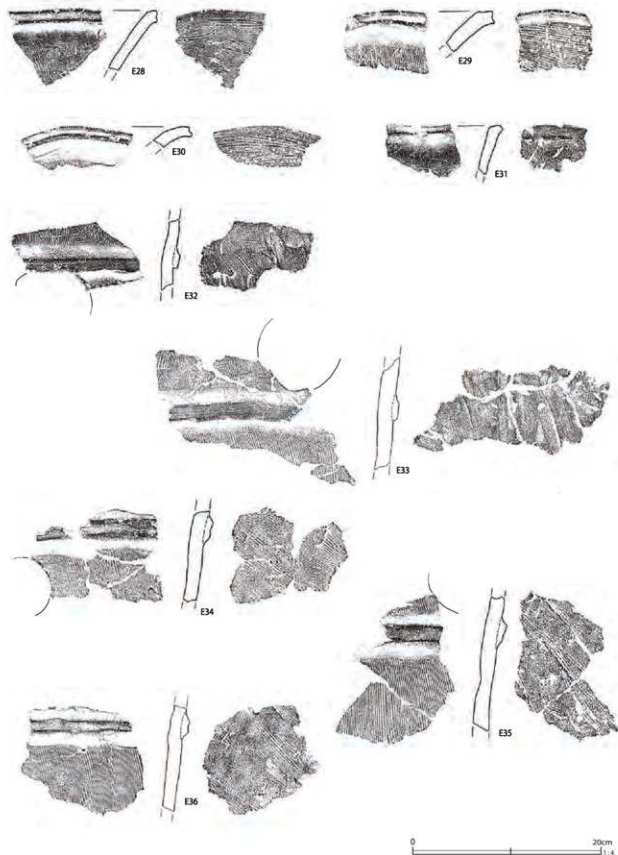


第50図 円筒埴輪(3)



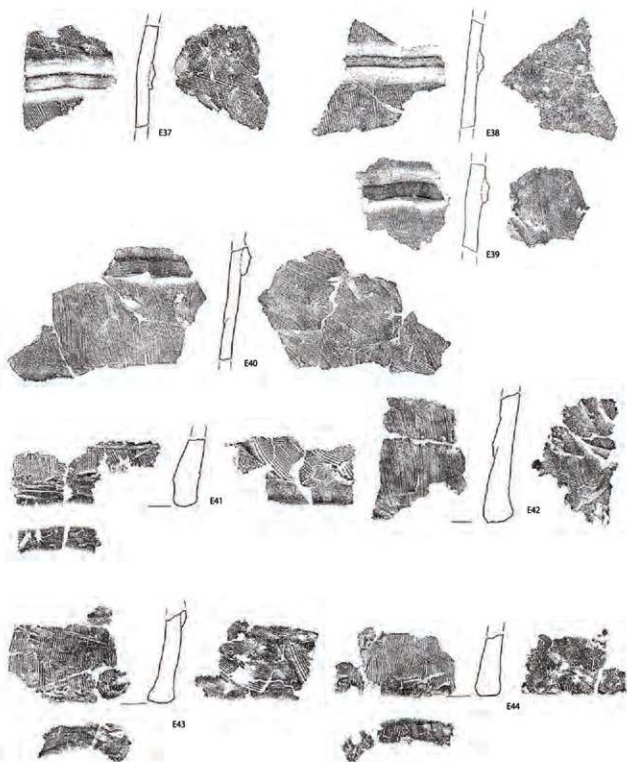
第 51 圖 円筒埴輪 (4)

I区36トレンチ



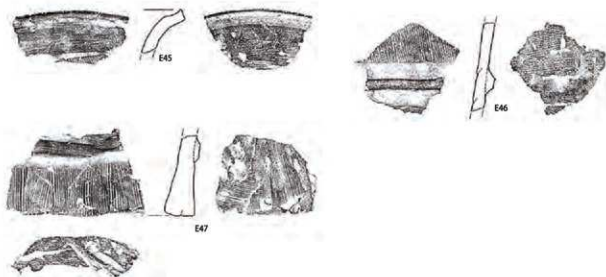
第52図 円筒埴輪 (5)

I区36トレンチ

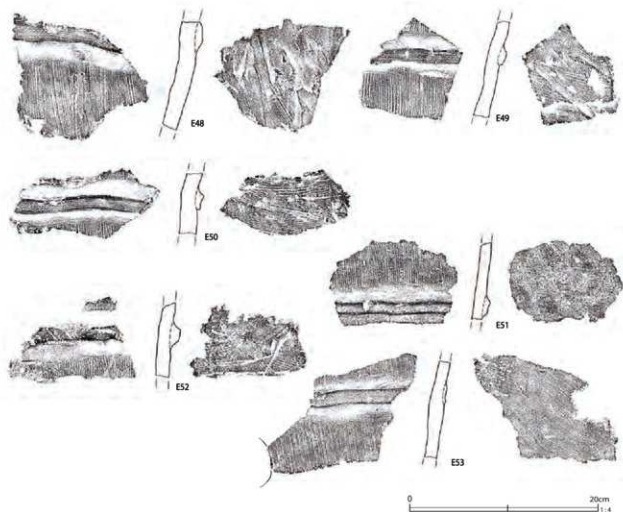


第53図 円筒埴輪(6)

I 区 造出し部

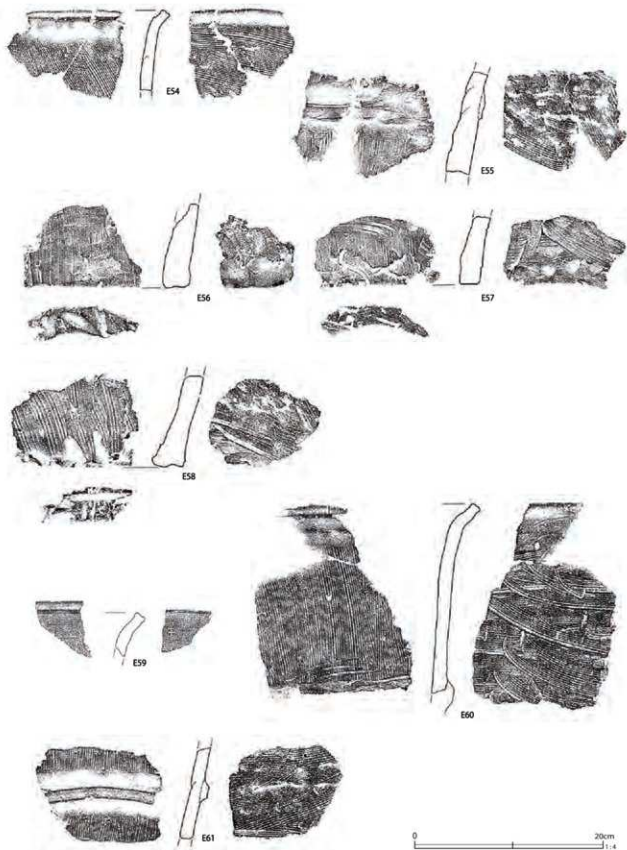


II 区



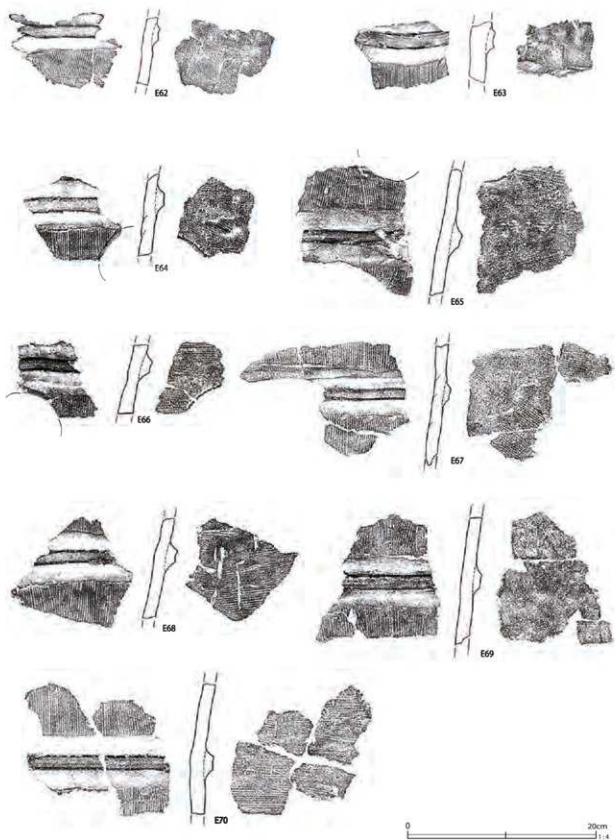
第 54 図 円筒埴輪 (7)

III区 (内堀)



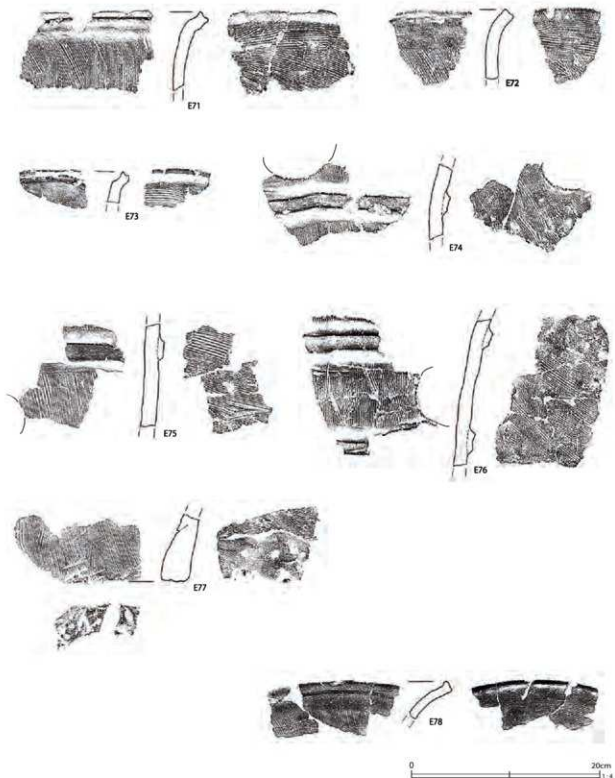
第55图 円筒埴輪 (8)

III区 (外堀)



第56図 円筒埴輪(9)

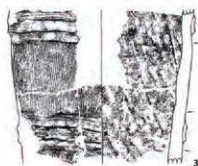
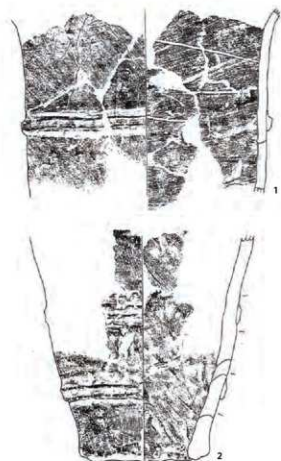
IV区 (外堀)



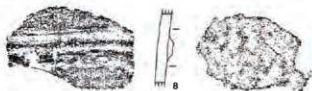
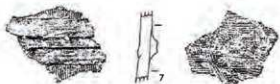
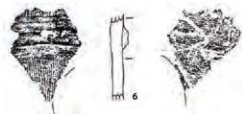
第57图 円筒埴輪 (10)

既報告資料 (抜粋)

A類



B類

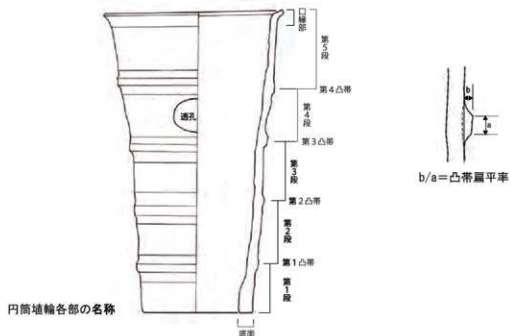


第58図 既報告の円筒埴輪 (抜粋)

円筒埴輪観察表の凡例

- 1 口径等の数値で [] 内は推定値、() 内は遺存値を示す。
- 2 各段の高さは、本文中に記したとおり、便宜的にすべて4条5段構成と仮定して数値を記した。
- 3 凸帯の厚さについては、同じ凸帯でもばらつきがあるが、実測図掲載箇所の計測数値を記した。
- 4 色調2は『新版標準土色帖』による。
- 5 含有物については肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。記号は下記のとおり。

A 石英・B 白色粒子・C 白色針状物質・D 長石・E 角閃石・F 赤色粒子・G 黒色粒子・H 雲母・I 片岩・J 砂粒



円筒埴輪各部の名称

第1表 円筒埴輪観察表

No.	分類1	分類2	出土区遺構トレンチ名(グリッド名)	口径器高底径	第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	第4凸帯厚/幅 第3凸帯厚/幅 第2凸帯厚/幅 第1凸帯厚/幅 =扁平率	残存率	備考	成・整形の特徴	色調1 色調2 焼成	含有物・含有物
E01	円筒	A	I区墳丘35T	[31.2] (19.0)	10.3	0.5/1.0=0.50 — — — —	40	円形透孔。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	赤褐 2.5YR4/8 B	少量 ABDF
E02	円筒	A	I区墳丘35T	— (18.5)	— — — — —	0.6/1.4=0.43 — — — —	25	円形透孔。凸帯遣りは縦。	外面タテハケ、 内面ヨコ・ナメハケ	赤褐 2.5YR4/8 A	少量 AEFJ
E03	円筒	A	I区墳丘35T	[30.8] (5.4)	— — — — —	— — — — —	20		外面タテハケ後、 口縁部ヨコナデ、 内面ヨコハケ。	赤褐 2.5YR4/8 B	少量 AEFJ
E04	朝顔	A	I区墳丘35T	[35.0] (5.4)	— — — — —	— — — — —	25		外面タテハケ、 内面ヨコハケ	赤褐 2.5YR4/8 A	少量 ABDF
E05	朝顔	A	I区墳丘35T	[39.8] (14.5)	— — — — —	0.3/1.9=0.16 (花状部凸帯)	20	花状部凸帯は下端部は明瞭だが上端部は緩やか。	外面ナナメハケで口縁部上位はヨコナデ。内面ヨコハケ	赤褐 2.5YR4/8 A	少量 ABDF

E06	円筒	A	I区 墳丘 35T	[28.0] (8.2) —	— — —	— — —	20		外面タテハケ、 内面ヨコハケ	赤褐 2.5YR4/8 B	少量 ABDEFJ
E07	円筒	A	I区 墳丘 36T	— (10.2) —	— — —	— — —	30	凸帯下のヨコナ デ部下端が沈 線状に凹む。	外面タテハケ、 内面はランダム なハケメ	明赤褐 2.5YR5/8 B	中量 AEFJ
E08	円筒	A	I区 墳丘 36T	— (31.8) 19.0	— — 11.6 16.6	— — — —	60	円形透孔。	内面下部に輪 積み痕明瞭に残 る。横外面タテ ハケ、内面ナメ ハケ。	明赤褐 2.5YR5/8 B	少量 ABDEFJ
E09	円筒	A	I区 墳丘 36T	— (13.0) [24.8]	— — —	— — —	25		外面タテハケ、 内面ナメハ ケ。底部に棒 状圧痕2箇所	赤褐 2.5YR4/8 B	少量 ABDF
E10	円筒	B	I区 墳丘 36T	— (15.6) [24.0]	— — —	— — —	25	外面に布目状圧 痕あり。	外面タテハケ、 内面ナデ。底 面に棒状痕跡平 行に2箇所	控 5YR6/8 B	多量 ABCFHJ
E11	円筒	A	I区 墳丘 遺出し	— (21.1) —	— — —	— — —	30	円形透孔。凸 帯遣りは雑。	外面タテハケ、 内面ナメハケ	赤 10YR4/8 A	少量 ABDEFJ
E12	円筒	A	I区 墳丘 遺出し	— (20.4) —	— — —	— — —	25	外面タテハケ 後、不規則に 縦位置のミガキ 様の痕跡あり	外面タテハケ、 内面ナメハケ	赤 2.5YR4/8 A	少量 ABDEFJ
E13	円筒	C	I区 墳丘 遺出し	— (15.0) [21.0]	— — —	— — —	30		外面はタテハ ケ。内面は横 ナデを流す。	控 5YR6/8 B	中量、白色 小粒多 ABCFHJ
E14	円筒	(A)	I区 墳丘 遺出し	— (21.0) 20.0	— — —	— — —	70	器面状態不良 かつ焼成やや 不良	外面タテ・ナ メハケ。底部 周辺のみヨコハ ケ。内面ナメハ ケ	控 5YR6/6 C	少量 ABDF
E15	円筒	A	I区 墳丘 遺出し	— (14.0) [21.4]	— — —	— — —	20		外面タテハケ、 内面ナメハ ケ。	赤褐 2.5YR4/8 A	少量 ABDF
E16	円筒	A	I区 墳丘 遺出し	— (9.7) [18.6]	— — —	— — —	35		外面タテハケ、 内面ヨコハケ。 底部に棒状圧痕 2箇所	赤褐 2.5YR4/8 A	少量 AEFJ
E17	円筒	(A)	Ⅲ区 外堀	— (7.4) [20.0]	— — —	— — —	35	底面に部分的に ハケメ、棒状(直 径9mm)の平行 圧痕	外面タテハケ、 内面ナメハケ	明褐 7.5YR5/8 B	多量 ABDF
E18	円筒	(A)	I区 墳丘 38T	— (11.9) [20.6]	— — —	— — —	20		外面タテハケ、 内面ヨコハケ、 下部ヨコナデ、 底部周辺のみヨ コナデ。底面 に4箇所の棒 状圧痕	控 5YR6/8 B	中量
E19	円筒	(B)	Ⅲ区 内堀 23T	— (9.8) 18.2	— — —	— — —	25		外面タテハケ、 内面ヨコハケ、 下部ヨコナデ。	控 5YR6/6 B	粗砂粒中 BCFHJ
E20	円筒	B	Ⅲ区 外堀 18T	— (37.7) —	— — —	— — —	35	凸帯厚く、明瞭	外面タテハケ、 内面ヨコ・ナ メハケ	控 7.5YR6/8 B	粗砂粒多 BCFHJ

E21	円筒	B	Ⅲ区 外堀 18T	- (13.3)	- - -	0.7/1.0=0.70 - -	25	円形透孔。凸帯厚く、明瞭	外面タテハケ、凸帯周辺は丁寧なヨコナデ。	橙 5YR6/6 B	粗砂粒多 灰色粗砂粒多 ABCFGHJ
E22	円筒	B	Ⅲ区 外堀 18T	- (10.0)	- - -	0.7/1.0=0.70 - -	50	円形透孔。凸帯厚く、明瞭。	外面タテハケ、内面ヨコハケ	橙 5YR6/6 B	粗砂粒多 灰色粗砂粒多 ABCFHJ
E23	朝顔	(B)	Ⅲ区 外堀 19T (E2-56)	- (53.2) 22.8	- 16.7 18.9	- 0.8/1.4=0.57 1.0/0.8=1.25	20	第3段にタテハケ後のヨコハケが部分的に施される。焼成や不良。	外面タテハケ、内面はナメナデでハケメなし	明黄褐 10YR7/6 C	粗砂粒多 灰色粗砂粒多 ABCFHJ
E24	朝顔	B	Ⅳ区 外堀 4T (E-2-42)	- (12.7)	- -	0.7/1.4=0.50 (花状部凸帯) 0.4/1.0=0.40 (頭部凸帯)	40	花状部、頭部凸帯、明瞭。	頭部外面ナメハケ、内面ヨコハケ	橙 5YR6/6 B	粗砂粒多 ABCFHJ
E25	円筒	B	Ⅲ区 外堀 18T (E2-67)	[48.0] 25.0	16.7 -	0.8/1.0=0.80 - -	20	凸帯厚く、明瞭。	外面タテハケ、口縁部上位区ト凸帯周辺は丁寧なヨコナデ、内面ヨコハケ	橙 5YR6/6 A	粗砂粒中 ACFHJ
E26	円筒	B	Ⅳ区 外堀 4T (E-2-42)	- (44.9) 23.2	- 16.9 18.3	- 1.0/1.2=0.83 0.9/1.2=0.75	80	第2段に透孔なし。凸帯厚く、明瞭。底面は内側に折れる。	外面タテハケ、内面上位ヨコハケ、下位ナメナデ	橙 7.5YR6/6 B	粗砂粒多 BCFHJ
E27	円筒	A	Ⅳ区 外堀 4T (E-2-42)	- (16.5)	11.5 (段数不明)	0.8/1.1=0.73	20	凸帯下端はナデつけず。	外面タテハケ、内面ナメハケ	明赤褐 5YR5/8 C	中量 AEFJ B
E28	円筒	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	-	-	口縁端部は凹状、口縁直下からはハケメ。	外面略タテハケ、内面ヨコハケ	赤 10YR4/6 A	少量 AEFJ
E29	朝顔	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	-	-	朝顔形。口縁端部は凹状。	外面タテハケ後ヨコナデ、内面ヨコハケ	赤 10R4/8 B	少量 AEF
E30	朝顔	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	-	-	朝顔形。口縁端部は凹状。	外面タテハケ後ヨコナデ、内面ヨコハケ	赤 10R4/8 A	微量 AFJ
E31	円筒	B	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	-	-	トレンチ上層の寄土中出土。口縁端部は略平坦でやや丸みを帯びる。	外面ナデ、内面不規則なタテハケ	橙 5YR6/6 B	少量 ACFJ
E32	円筒	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	0.5/1.3=0.38	-	円形透孔。凸帯貼り付け後透孔縁部ナデツケ痕残る。	外面タテハケ、内面ヨコ・ナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 ABDF
E33	円筒	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	0.5/1.4=0.36	-	円形透孔。凸帯低く、歪む。	外面タテハケ、内面ナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 ABDF
E34	円筒	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	0.7/1.2=0.58	-	円形透孔。凸帯歪り難く歪む。	外面タテハケ、内面ナメハケ	赤 10R5/8 A	少量 AEFJ
E35	円筒	A	Ⅰ区 墳丘 36T	-	-	0.6/1.5=0.40	-	円形透孔。他の赤褐色群埋輪と比較すると凸帯は高い。	外面タテハケ、内面ナメハケ	赤 10YR4/8 A	少量 ABDEFJ

E36	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	0.5/1.1=0.45	-	凸帯盛り雑で歪む。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8	少量 ABDEFJ
E37	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	0.5/1.4=0.36	-	凸帯低く歪む。	外面略ナナメハケ、 内面ナナメハケ	赤 10R5/8 A	少量 ABDEFJ
E38	円筒	B	I区 墳丘 36T	-	0.5/1.0=0.50	-	トレンチ上層の 客土中出土。 凸帯厚く、明瞭 で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	橙 5YR6/8 B	少量 ABCHIJ
E39	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	0.5/1.5=0.33	-	凸帯盛り雑で歪む。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 AEFJ
E40	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	-	-	凸帯低く歪む。	外面 略タテハケ、 内面ナナメハケ	赤 10R5/8 A	少量 AEFJ
E41	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	-	-	底面に棒状圧痕。	外面タテ・ナナメハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 B	中量 ABDEFJ
E42	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	-	-	輪痕残る。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 ABDF
E43	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	-	-	底面に浅い棒状圧痕。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 5YR5/8 B	中量 ABDEFJ
E44	円筒	A	I区 墳丘 36T	-	-	-	底面に部分的にハケメあり	外面 略タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 B	少量 ADF
E45	円筒	B	I区 墳丘 遺出し	-	-	-	口縁端部は平坦。	外面ナナメハケ後、 口縁部ヨコナデ、 内面ヨコハケ後、 口縁部ヨコナデ	橙 5YR6/6 A	粗砂粒多 ABFHIJ
E46	円筒	B	I区 墳丘 遺出し	-	0.8/1.0=0.80	-	凸帯厚く、明瞭 で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	橙 5YR6/6 A	粗砂粒多 ABCFHIJ
E47	円筒	A	I区 墳丘 遺出し	-	0.6/1.3=0.46	-	第1段約7cmと低い。 凸帯は歪む。 底面に棒状圧痕。	外面タテハケ、 内面ナナメ・ヨコハケ	橙 7.5YR6/6 A	少量 ABCDFHIJ
E48	円筒	A	IV区 外堀 3T (D2-79)	-	0.5/1.5=0.33	-	器形歪み強い。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 B	少量 ABDF
E49	円筒	A	II区 内堀 27T (E3-28)	-	0.6/1.2=0.50	-	凸帯低く、歪む。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 AEFJ
E50	円筒	A	IV区 外堀 4T (E2-61)	-	0.85/1.2=0.71	-	凸帯盛り雑で歪む。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 AEFJ

E51	円筒	B	Ⅱ区 内堀 22T (E3-20)	-	0.5/1.05=0.48	-	内面焼成やや不良。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ後 ナデ	橙 5YR6/8 B	粗砂粒多 ABCFHJ
E52	円筒	B	Ⅳ区 外堀 3T (D3-10)	-	0.95/1.2=0.79	-	胎土に5mmの軟 質岩石(凝灰 岩か)を含む。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	橙 5YR6/8 B	少量 AC
E53	円筒	A (鉄砲 山)	Ⅱ区 外堀 13T (E3-48)	-	0.3/1.4=0.21	-	橙乱中出土。円 形透孔。凸帯非 常に歪み。鉄砲 山古墳に伴うと 推定。ハケメ条 線極細い。	外面タテハケ、 内面ナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 ABDF
E54	円筒	A	Ⅱ区 内堀 23T (E3-9内堀)	-	-	-	口縁端部は凹 状。口縁直下 からはハケメ。	外面 ナメハ ケ後、口縁部 のみ綺麗なヨコ ナデ、内面ヨコ ハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 ABDEFJ
E55	円筒	A	Ⅱ区 内堀 10T (E3-9内堀)	-	0.5/1.7=0.29	-	凸帯薄く、雑な 造り。内面に輪 積痕2段残る。	外面タテハケ、 内面ナメハケ	赤褐 2.5YR4/8 A	中量 AEFJ
E56	円筒	A	Ⅱ区 内堀 10T (E3-9内堀)	-	-	-	基部内面下端に 指頭痕残る。	外面タテハケ 後、部分的に 不規則なヨコハ ケ。	赤褐 2.5YR4/8 A	少量 AEFJ
E57	円筒	A	Ⅱ区 内堀 10T (E3-9内堀)	-	-	-	外面にランダム な工具痕残り雑 な整形。基部 内面下端に指頭 痕残る。	外面タテハケ、 内面ナメハケ	赤 10R4/8 A	赤 AEF
E58	円筒	A	Ⅱ区 内堀 10T (E3-9内堀)	-	-	-	内外面ハケメ太 く浅い。6本/2 cm。	外面タテハケ、 内面ナメハケ だがハケメピツ チが広い。	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 EFJ
E59	円筒	A	Ⅱ区 内堀 23T (E3-9内堀)	-	-	-	口縁端部は略 平坦。	外面タテハケ後 ヨコナデ、内面 ヨコナデ	明赤褐 5YR5/6 A	少量 AEFJ
E60	円筒	B	Ⅱ区 内堀 23T (E3-9内堀)	-	-	-	大型。口縁端 部は平坦。	外面タテハケ 後口縁部ヨコナ デ、内面ヨコハ ケ	橙 5YR6/8 B	中量 ABCFHJ
E61	円筒	B	Ⅱ区 内堀 23T (E3-9内堀)	-	0.6/1.1=0.55	-	凸帯の整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ、 輪積のみ明確。	橙 7.5YR6/8 A	中量 ABCFJ
E62	円筒	A	Ⅱ区 外堀 22T E2-100外 堀)	-	0.4/1.3=0.31	-	凸帯厚いが、 歪む。	外面タテハケ、 内面ナメハケ	赤褐 2.5YR4/8 B	微量 AEFJ
E63	円筒	A	Ⅳ区 外堀 3T (E2-61)	-	0.4/1.6=0.25	-	凸帯厚いが、 歪む。	外面タテハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 AEFJ
E64	円筒	B	Ⅱ区 外堀 10T (E2-99)	-	0.8/1.1=0.73	-	円形透孔。大型。 凸帯厚く、明 瞭で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	橙 7.5YR6/8 A	中量 ABCFLJ
E65	円筒	B	Ⅱ区 外堀 15T (E2-57)	-	1.0/1.2=0.83	-	円形透孔。凸 帯厚く、明瞭で 整形丁寧。	外面タテハケ、 内面上位ナメ ハケ、下位ナ デ	橙 7.5YR6/8 A	多量 ABCFHJ

E66	円筒	B	Ⅲ区 外廻 18T (E2-67・78)	-	0.9/1.1=0.82	-	円形透孔。凸 帯厚く、明瞭で 整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	摺 SYR6/8 A	多量 ABCFHJ
E67	円筒	B	Ⅲ区 外廻 18T	-	0.5/1.1=0.45	-	凸帯厚く、明瞭 で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコ・ナナ メハケ	摺 SYR6/8 A	多量 ABCFHJ
E68	円筒	B	Ⅲ区 外廻 18T	-	1.0/1.1=0.91	-	凸帯厚く、明瞭 で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	摺 SYR6/6 A	少量 ABCFHJ
E69	円筒	B	Ⅲ区 外廻 18T (E2-67)	-	0.7/1.3=0.54	-	凸帯厚く、明瞭 で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ナデ	摺 SYR6/8 A	多量 ABCFHJ
E70	円筒	B	Ⅲ区 外廻 18T (E2-67)	-	0.9/1.2=0.75	-	凸帯厚く、明瞭 で整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	摺 SYR6/8 A	多量 ABFHJ
E71	円筒	A	Ⅳ区 外廻 4T (E2-42)	-	-	-	口縁端部は凹 状。口縁直下 からはハケメ。	外面ナナメ、タ テハケ、内面ヨ コハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	中量 AEFJ
E72	円筒	A	Ⅲ区 外廻 10T (E2-99)	-	-	-	口縁端部は凹 状。	外面ナナメハケ 後、口縁部のみ 雑なヨコナデ、ヨ コハケ雑なヨコナ デ。内面ヨコハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 AEFJ
E73	円筒	A	Ⅳ区 外廻 3T (D2-90)	-	-	-	端面凹状。内 面上位強いヨコ ナデで弱い凹 状。	外面ナナメハケ 後ヨコナデ、内 面ヨコハケ	赤 10R4/8 B	微量 AEFJ
E74	円筒	A	Ⅳ区 外廻 4T (E2-42)	-	0.6/1.4=0.43	-	円形透孔内側に 粘土バリ残る。 凸帯造り雑で歪 む。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 B	少量 ABDEFJ
E75	円筒	A	Ⅳ区 外廻 4T E2-42	-	0.5/1.4=0.36	-	円形透孔。凸 帯の整形丁寧。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 ABDF
E76	円筒	A	Ⅳ区 外廻 4T (E2-42)	-	0.7/1.2=0.58 0.7/1.2=0.58	-	円形透孔。凸 帯造り雑で歪 む。	外面タテハケ、 内面ナナメハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 ABDEFJ
E77	円筒	A	Ⅳ区 外廻 4T (E2-42)	-	-	-	底面幅1.8cmの 棒状圧痕。内 面輪積み痕明 瞭に残る。	外面略タテハ ケ、内面ナナ メハケ	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 ABDF
E78	朝顔	B	Ⅳ区 外廻 4T (E2-42)	-	-	-	朝顔形。口縁 端部は平坦。	外面タテハケ、 内面ヨコハケ	摺 SYR6/6 A	中量 ACFHJ

第7節 形象埴輪

① 概要

形象埴輪のうち、図化可能で掲載したものの出土位置の内訳は、造出し部及び周辺トレンチ(37、39、42、44b トレンチ)で88点、その他墳丘上トレンチから出土したものが9点、内堀出土点数が2点、外堀出土点数が4点、表採2点の計105資料である。今回の調査では内堀は遺存していた僅かな部分の調査であることから、出土傾向の全体像は不明であるが、造出し周辺の出土量が84%と突出している。ただし第1節のとおり、造出し部の大半は昭和43年度の前回整備時に造成されたものと考えられる。細片が広範囲に散在し、遠く離れた破片が接合したことも、後世の改変の結果であると考えられる。

しかし、出土した形象埴輪は多種多様であり、本古墳に樹立された形象埴輪のバリエーションを推定することができる。

前節の円筒埴輪においてはA、B類に分別した。形象埴輪においても、色調、胎土の含有物によって、A類は容易に分別可能である。ただしB類については、含有物の種類、量に大きな差があるため、ここではA類と明瞭に分別できる橙色系をB類として観察表に記載した。

なおA、B類に分類した馬形埴輪の模式図は第4章に掲載した。

② 人物埴輪

K01はⅢ区19トレンチから出土した人物埴輪の顔面である。現存長13.7cm、幅13.8cmであり大形の人物埴輪である。口幅が大きい。鼻稜と左こめかみ部に赤彩が認められる。鼻孔の表現はない。目は左目下端～目尻しか遺存していないが、直線的な垂れ目となる。目と口は鋭利な工具で切り抜いてあるが、いずれも内面に粘土がバリ状に残る。外面は丁寧に指頭ナデされており、頸部の稜線も丁寧に整形されている。胎土に黒色の鉄分を多量に含有する。B類である。なお19トレンチおよび近接するⅢ区のトレンチから出土した形象埴輪は他にK63の馬形埴輪の障泥部破片のみであることから、この人物埴輪が中堤に配列されたものかは不明である。

K02は顔面部分のうち口部左側から頸部のみ遺存する。K01と比較すると、頸の長さが約半分となる。口は工具により切り抜いている。焼成良好なB類である。

K03は女子の島田髻の破片と考えられる。幅11.9cmと大型である。発掘調査で出土したのではなく、東くびれ部で表採したものである。粘土板成形で撥形を呈し、端面はナデにより丁寧に整形されている。内外面ともハケメ調整であるが、内面中央付近は不鮮明である。頭部との明瞭な接合痕はない。K04は人物埴輪に付属する耳飾りであろう。粘土紐を直径4cm程の輪にして本体に貼り付けてある。

K05～K07は男子の下げ美豆良である。粘土塊を棒状に成形したものである。K05は下端面が2方向に擠み出され、一方はL字状に先端が屈曲することから、体部との接合部付近と考えられる。K06は先端を丸く仕上げた美豆良部とそれに二層に貼り付く破片からなる。K07は下端面が略円形となるが、側面に円形に残る剥離痕は体部との接合部と考えられる。

K08～K13は人物埴輪の肩～腕部の破片である。K08は中実成形の肩部であるが、剥離状況を観察すると、太さが2段階となっており、腕の付け根を胸部に接合させるためのホゾ部分と推定され

る。外面調整はハケメではなく、ナデ調整である。K09は外側はナデ調整であるが、内面にはハケメ調整が残る。K10は表面の剥離が著しく、二次被熱を受けた可能性がある。内部には直径1.2cm程度の孔があり、いわゆる木芯中空技法によるものと考えられる。

K11～K13は人物埴輪の腕部である。いずれも中実である。K13の先端部は欠損するものの手部に近い部位である。いずれも造出し部周辺からの出土であり、最低2個体の人物埴輪の存在が推定される。いずれもB類である。

K14、K15は人物埴輪の手指の破片である。K14の甲部分は薄い粘土板で成形されており、指部は一本ずつ成形され、甲部に貼り付けられる。人差し指のみ完存する。胎土に白色針状物質を含有する。それに対し、K15は甲側に沈線を入れて指の表現を作出している。いずれもB類である。

K16は人物埴輪の指および坏である。直径4cmの坏の下半には細い粘土紐によって成形された指が2本認められる。この遺物により女性埴輪の存在が推定される。胎土に白色針状物質を含有するB類である。

K17、18は人物埴輪の足先の可能性がある。いずれも裏面は平坦で、先端から徐々に厚みを増す。いずれもA類である。

K19～33は人物埴輪の装飾等の破片であると考えられる。K19は直径0.5cmの細い円柱に直径1.3cmの粘土粒が貼り付けられる。首飾り等の装身具の可能性がある。

K21は頭椎大刀の柄頭と考えられる。柄頭部は高さ5.5cm、柄部直径3cmである。丸みを帯びた端部は丁寧にナデ整形される。A類である。この遺物により、佩刀した武人埴輪の存在が推定される。

K22は大刀柄頭部と考えられる。長径3cmの楕円形の円柱の末端に幅1cmの粘土紐をぐるりと巻きつけてある。また粘土粒の貼り付けが1箇所ある。A類である。

K23は大刀の鞘部分であろうか。長径4cmの断面隅丸長方形を呈する。裏面に剥離痕跡があり、それに対応するように貼り付け時の押圧痕が表面にある。A類である。

K25は粘土板の側面に直径1cmの鉞表現がある。A類である。K26は前回報告に同一個体の可能性がある資料がある(第66図16)。胃の鍔部分と推定される。幅1cmの粘土帯を貼り付け、その上に丁寧に整形された直径0.7cm程の鉞表現の粘土粒を概ね等間隔に圧着している。粘土帯の縁表現の中にはハケメである。A類である。K27～29は部位は不明であるが、粘土帯上に鉞表現の粘土粒が圧着している。いずれもA類で粘土粒の大きさもほぼ同じであることから、K26と同一個体の可能性がある。

K30は革製品もしくは鍔部分を表現したものと考えられる。縁部は列点を配し、中には矢羽根状に極細の沈線が施される。小片であるが精巧な文様を施している。不鮮明だが赤彩の可能性がある。A類である。

K32は部位不明だが平行する沈線が2条配される。また端部に三角形の突出があるが、詳細は不明である。裏面全体に剥離痕が残る。

K33は部位不明だが、厚さ1cmの長方形の粘土板にハケメ様のごく浅い条線がある。裏面には明瞭な剥離痕はないが焼成が及んでいない範囲があることから、他の部位に貼り付けられていた可能

性が高い。

K34は幅4cmの腰帯から垂下する結び目を表現している。垂下した部分は幅2.5cmの粘土帯上に幅1cmの粘土紐を2本圧着している。K35、36はいずれも直径2～3cmの透孔が配される。部位不明である。

K37～39は人物埴輪の裾部である。K37は裾直下の器台部最上位に円形透孔が配される。K39は推定直径25cmである。いずれもB類である。

③ 馬形埴輪

K40～42はB類の馬鐙である。出土トレンチはそれぞれ異なるが、いずれも造出し部周辺であり、形態、色調、胎土から同一の馬形埴輪に付属するものと考えられる。無文の半截表現であり、下端の貼り付け部と表面に4箇所波状の突出を左右対称に作出する。完存するK40は長さ10cm、幅6.8cmである。器面は全体に丸みを帯びており稜線は作出されていない。いずれにも白色針状物質が認められる。

K43～47は馬鈴である。いずれも中実で鋭利な工具によって、幅狭の開口部が表現されている。K43、44、46、47がA類、K45がB類である。K43は直径約6cmの大型品である。体部には粘土帯の表現が遺存せず、どこに部位に配されたか不明である。体部の湾曲、鈴の下に帯表現が無いことから三鈴杏葉の部位の可能性もある。同じくA類のK44は、直径約4.5cmとK43より一回り小さい。K46、K47は突起付き鈴である。K46の突起は残存1、剥離痕3箇所である。鈴の正面上部に1箇所と開口部に平行して3箇所が配列される。K47は正面上方から本体接合面下方に向かい、斜めに直径0.4cmの孔が穿たれている。製作時の落下防止の串などを差し込んだ孔と考えられる。突起はいずれも欠損し、4箇所の剥離痕のみ残る。K46、47は色調等からも同一の馬形埴輪に付属するものと考えられる。

鈴の中で唯一B類のK45は直径4cmである。A類との形態上の差異としては、本体との接合部付近のくびれが明瞭かつ丁寧に整形されている。白色針状物質を含有する。

K48は粘土粒の鈺表現により飾った楕円形杏葉である。杏葉の横径9cm、縦径7.5cmである。直径約1cmの鈺が10個配される。杏葉を成形方法は胴部に台地を貼り、その台地の縁に幅1cmの粘土紐を楕円形に配するものである。吊り下げ部もこの楕円形の縁取りと一体となって成形されている。B類である。

これに対し、K49はA類の杏葉である。遺存状況が悪く剥離も多い。台地に粘土紐で表現された幅0.4cmの縁金を貼り付け、その上に0.4cm程の粘土粒の鈺が密に配される。吊り下げ部状のブリッジが1箇所残存する。K48と比較すると造りが雑である。

同じくA類のK50も杏葉と思われるが、K49とは成形方法等が明らかに異なる。円弧を描く残存部位には縁金の表現がなく、台地に直接粘土粒を貼り付けている。そのため鈺の側面が台地からはみ出している。

K51はK48と酷似する。同一の馬形埴輪に配されたものであろう。縁金部と鈺2点のみ残る。

K52は綱から垂下する杏葉の表現であろうか。幅3cmの粘土紐から1cmの吊り下げ部を経て推定楕円形の杏葉となる。杏葉部は台地の縁を幅0.7cmの粘土紐で飾るが鈺表現の粘土粒はない。A類

であるが、K49、50とは造りが異なる。

K53はふくらみの頂点に推定直径1.2cmの小孔が穿たれる。雲珠の可能性もあるが、側面の一部がスリット状となることから部位は不明と言わざるを得ない。

K54は鼻先に近い頭部右側面である。素環鏡板付轡の表現が見られる。幅1cmほどの縁金部の大部分は剥離しているが、その痕跡からは直径5cm程度の鏡板と考えられる。また粘土紐貼り付け前に穿たれた小孔が一か所認められる。部位が小さく詳細は不明だが欠損状況からは逆U字形頭部と思われる。A類であり焼成良好である。

K55はB類の頭部右側である。轡の表現は遺存していないが、面繫の類革にボタン状の辻金具が2箇所配される。ほぼフラットな板状の基部であることから側板となろう。上部の類革は幅3cm、下部は幅1.5cmであり断面は台形をなす。先に上部の粘土紐をU字に折り曲げ貼り付けた後に下部の粘土紐が貼り付けてある。その後、直径2cmのフラットな円形の粘土を貼り付けて表現している。整形は丁寧であり、焼成も良好である。

K56はf字形鏡板の先端部分と考えられる。粘土板に縁金を幅0.7cmの粘土紐で表現し、その上に粘土粒による鋸を貼り付ける。A類である。

K57は立髪の子柱状であろうか。上位に向けて径が大きくなり、端部は平坦面を作出している。やや小さいことから人物埴輪の部材の可能性もある。A類である。

K59は立髪である。板状の立髪の前部を結んだ表現の略角状の立髪である。ただし、角柱部は角が丸みを帯び、不鮮明である。角柱部の上端部は直径5cmの円盤状となる。遺存部位の最後部は明瞭な段を有する。B類で、白色針状物質を多く含有する。角柱部は丁寧にナデ整形されるが、それ以外の側面部にはハケメが残る。

K60は立髪の後半部であろう。末端がS字状となる。したがって前輪とは一体化しない形態となると思われる。K59と色調、胎土とも似るが接合しない。両側面はハケメ調整され上部の端面は平坦面が作出される。

K61、62は鞍と考えられるが前後は不明である。K61は覆輪部にあたる端部が肉厚に成形され、緩やかな円弧を描く。両面ともハケメが残るが、上位はナデ消されている。端面は概ね平坦だが僅かに凹状となる。K62はK61と比較すると、やや直線的であるが、上位の両側がより明瞭に肉厚となることから、覆輪を表現していると思われる。両面ともハケメが残る。いずれもB類である。前者は42トレンチ、後者は39トレンチ出土であり、出土位置は約6m離れる。

K63からK70は平坦な粘土板を基本として、一方向、もしくは二方向のみ端面が残る破片である。障泥の可能性が考えられるが、形態の細部、色調にバリエーションが多いことから、他の部位の可能性も高い。

K63はK01の人物埴輪顔部と同じⅢ区19トレンチの外堀から検出された。色調は明るい橙色で、今回図化できた計105点の形象埴輪の中に類似する色調のものはないが、砂礫の含有量からはB類に近い。左右にかけて極わずかに内湾するが上下方向はほぼ平坦である。基部となる粘土板の下端に幅3.5cm、厚さ0.5～1cmの粘土板を圧着させ、縁取りをする。圧着部は前側面は丁寧にナデ消されるが下端部は圧着痕を残す。基部および縁取り部にハケメを残す。

K64は左右方向がほぼ平坦で、右端で内側に直角に折れ曲がる。上部に向かいやや肉厚となる。B類である。

K65も同じく、左端は内側に折れ曲がる。左右方向に向かってやや内湾する。B類である。

K66の内側最上部は馬胴部からの剥離痕と思われる。剥離痕薄片は圧着痕と思われる凹みが複数認められる。外側はほぼ平坦で、左側面と下側面はほぼ直角を呈する。内側の端面近くに粘土の折り返し部が認められる。B類である。

K67は大型の円筒埴輪基部である可能性もあるが、円弧が大きく、かつハケメ調整後に雑にナデ調整されているから形象埴輪に分類した。白色針状物質を多量に含むB類である。

K68の側面は緩やかなS字を描き、下端を尖らせている。ほぼ平坦な粘土板で成形されている。

K69は下側面が平坦で、右側面が丸みを帯びる。A類である。B類のK70は僅かに鈍角を呈する。内面には剥離痕が残る。

K71からK74は幅広の粘土帯が配されるもので、馬形埴輪の革紐表現と思われる。K71は幅3.5cmの幅広の粘土帯から幅2cmの粘土帯が垂下しているものである。K72にも幅3.5cmの粘土帯が認められるが、その下にハケメ調整が露出した円形の剥離痕が認められることから、鏡板等が配された可能性がある。K71とK72は粘土帯の幅や色調等から同一個体の可能性が高い。

A類のK73は実測図向かって上部に幅5cmと幅広の粘土帯を配し、そこから垂下するように両側にやや幅狭の粘土帯を配置させる。あるいは幅狭の粘土は幅広の粘土帯の上に一部載ることから、幅広の粘土帯に取りつく、1対の辻金具の表現の可能性がある。A類である。

B類のK74は横位の粘土帯の直下に透孔が存在する。胸部であろうか。上位の粘土帯はやや丸みを帯びるが、粘土帯となるか円形の貼り付けになるか判然としない。

K75はB類の左側頭部の側板であろう。轡や辻金具の表現は遺存していないが、ほぼフラットな板状を呈する。幅2cmの頬革の表現が2箇所認められるが、両者は近接している。整形は丁寧であり、焼成も良好である。なお右側頭部であるK55とは頬革の表現や色調が微妙に異なり、同一個体かは不明である。

K76はA類の頭部の側板である。幅1.3cmの頬革が2本配置される。頬革は断面凹状を呈する。

K77からK87は馬形埴輪の可能性はあるが、部位が不明なものである。K80は手綱の小片であろうか。鋭利な工具により0.4cm間隔で刻みを施している。K81は幅3cmの粘土帯の上に直径2cmの粘土粒を施している。K84はA類の馬形埴輪の尻尾である。先端部が僅かに屈曲し、上を向く。

K85は丸みを帯びた馬形埴輪の耳であろう。白色針状物質を含有するB類である。

K88は種別が不明の埴輪である。外面はハケメ調整後、底面近くがナデ消される。内面は未調整である。内面の粗雑な仕上がりから土師器ではない。残存率は約20%で全周する形態であれば直径23.6cmとなる。

④ 家形埴輪

K89は人物埴輪の美豆良あるいは後述する家形埴輪の塋木と考えられる。平坦な端面が作出される。直径約3cmのA類である。

K90から92は同一個体の家形埴輪と思われる。3点とも造出し部出土でB類である。いずれにも

厚さ約1.5cmの平坦な粘土板に、厚さ0.4cm、幅3cmほどの横位の薄い凸帯が貼り付けられる。残存部位が少なく断定はできないが、明瞭な縦位の凸帯、すなわち柱の表現が認められない。これはK91と92はいずれも隅部であるにもかかわらず、明瞭な隅柱の表現がないことから首肯されよう。K90の右側は隅部にあたる。断面には剥離痕が残る。また隅部は、縦位の粘土帯により成形あるいは補強されているが、横位の凸帯と比較すると明らかに異なり、不明瞭である。

K91の隅部は緩やかにアールを描く。隅部から5cm内側は全面がスリットとなり、入口部を表現していると思われる。このスリットは凸帯とは直交せず内側に傾くことから、入口は縦長の略台形を呈すると推定される。隅部の整形については壁面のハケメに被さるように薄い粘土帯が貼り付けられていることから、ハケメ調整後に隅部を成形、整形したものと考えられる。内面には直行する壁面部の剥離痕が残る。

K92は左側が側面、右側がスリットとなり、K91と対の配置となる。入口部の表現が1箇所である確証はないが、妻側に入口が設けられていた可能性がある。

K93はⅢ区10トレンチの内堀から検出されたB類の家形埴輪である。上述したK90～93の出土地点から約60mも離れていることから、同一個体の可能性は低だろう。ただし酷似した破片2点が既に報告されている（第67図23、24）。緩い曲面をなしているが粘土板を曲げて成形している。内側に本体部との接合をはかるための粘土が貼り付けられており、周辺は圧着痕が多数残る。外面の裾部はヨコナデ調整され、端部が緩やかに屈曲する。外面上部はタテハケ調整である。寄棟造の屋根の可能性がある。

⑤ 器材埴輪

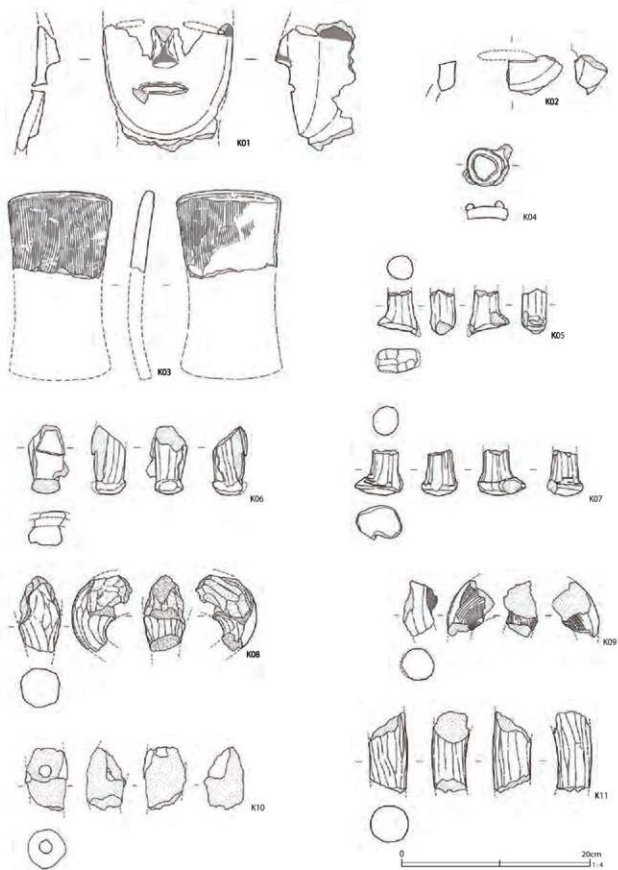
K94から99は同一個体の盾形埴輪の可能性が高い。いずれも造出し部出土である。B類で白色針状物質を多量に含有する。幅0.4cmほどの沈線の文様が描かれる。

最も大きい破片のK94は先に実測図左側に逆「く」の字状に鋸歯文を施した後に右下に同様に鋸歯文を施す。また前者の鋸歯文の先端部近くには別の鋸歯文の先端部が僅かに遺存している。盾形埴輪と断定できない理由として、端部の表裏が突出する点と、器面がやや捻じれている点があげられる。鞍形埴輪の可能性もあろう。

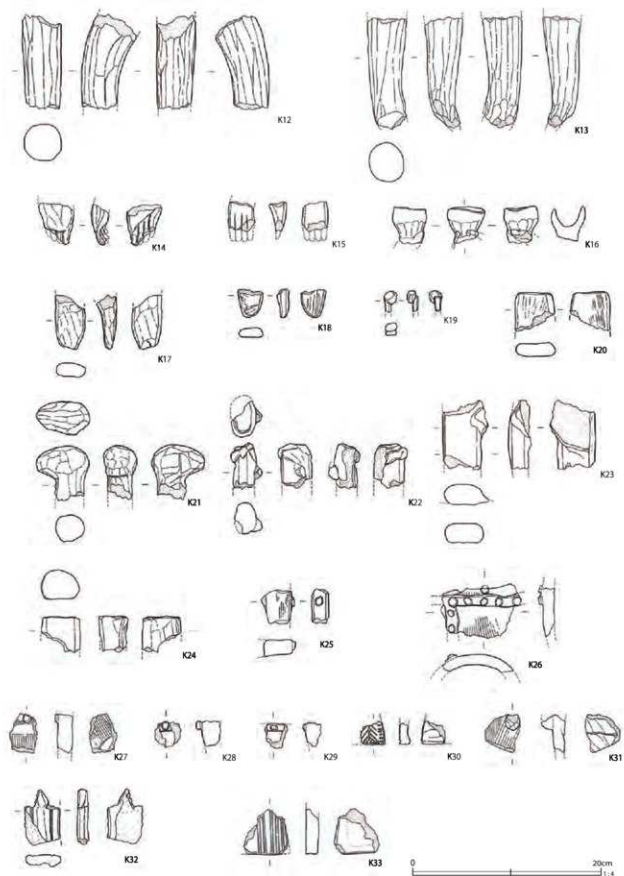
K100はA類の盾形埴輪である。円筒部から突出した鱗状の部位に該当する。表面はハケメ調整後にタテナデ、裏面はハケメ調整である。円筒部との接合面にはハケメが露出している。

K102はⅡ区の外堀付近での表採された躰形埴輪である。B類で白色針状物質を胎土に含有する。遺存する側面は円弧を描く。鋸歯状の沈線が描かれる。施工工具は幅約7mm、3本単位である。裏面に突出した接合痕が残る、円筒部との接合部と思われる。端面はやや雑な整形。外面にタテハケ痕が残る。内面は雑なナデである。K103はⅡ区12トレンチの外堀から検出された。K102と文様施工工具等が酷似しているため、同一個体の可能性が高い。

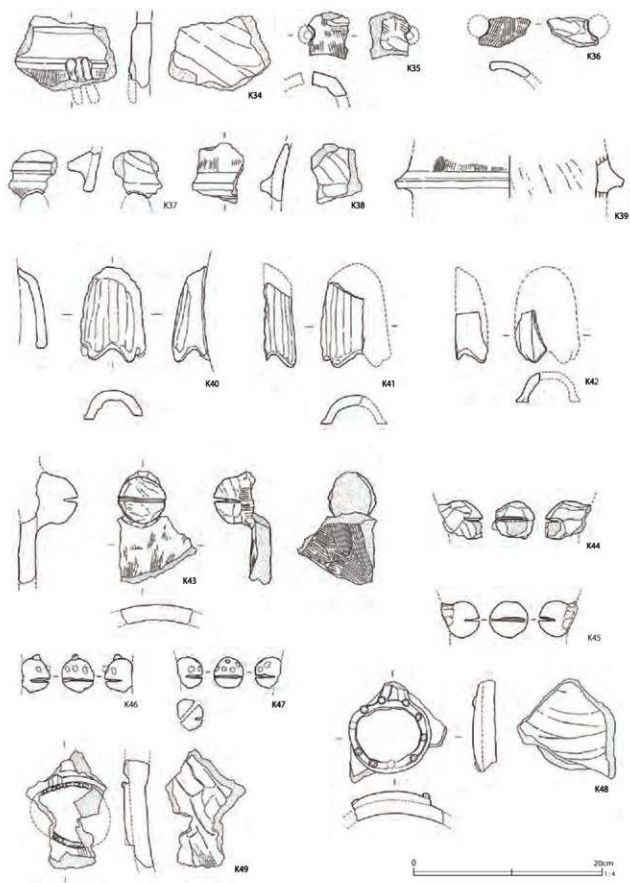
K104、K105は人物埴輪の器台底部である。K104は底径約10cm、K105は底径約14cm。いずれもB類で外面は縦位ハケメ、内面はナメナデである。いずれも底部は二次調整され、平坦面が作出される。



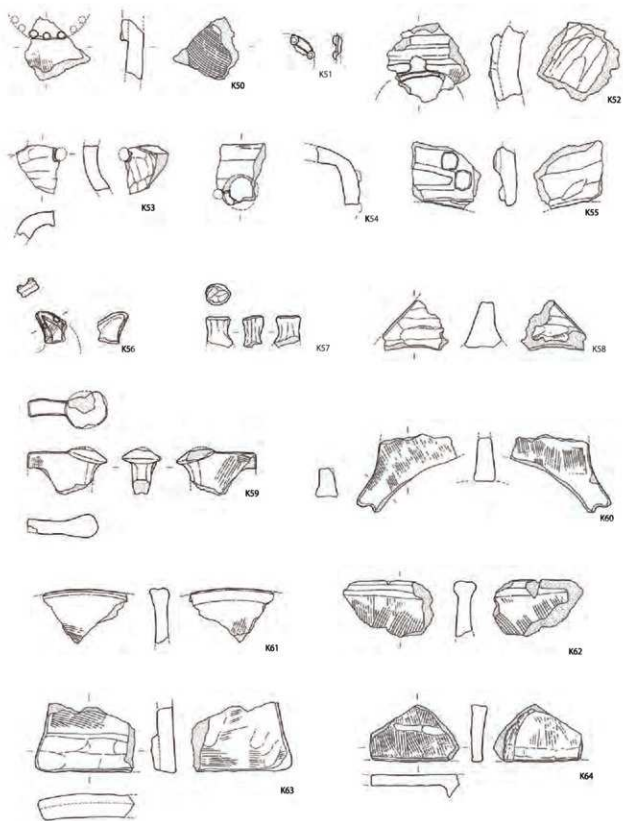
第59图 形象埴輪(1)



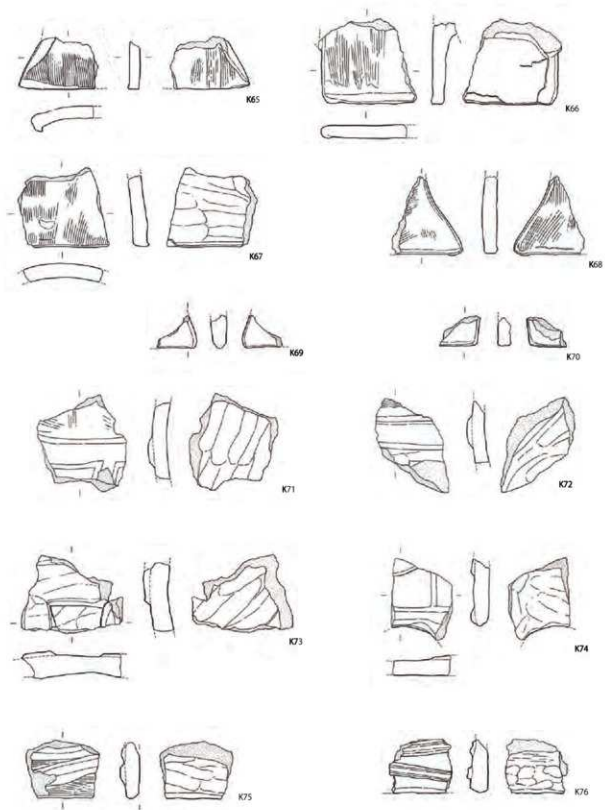
第60图 形象埴輪(2)



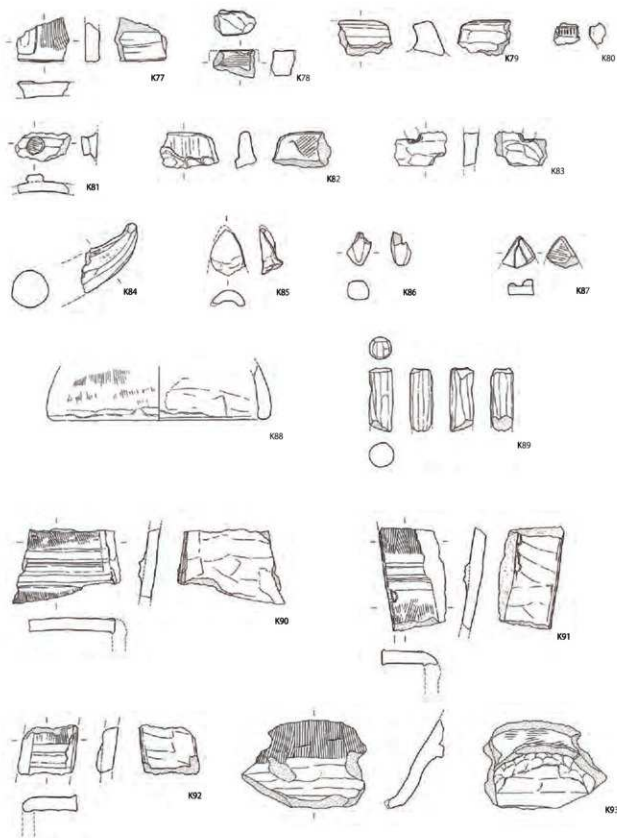
第61图 形象埴輪(3)



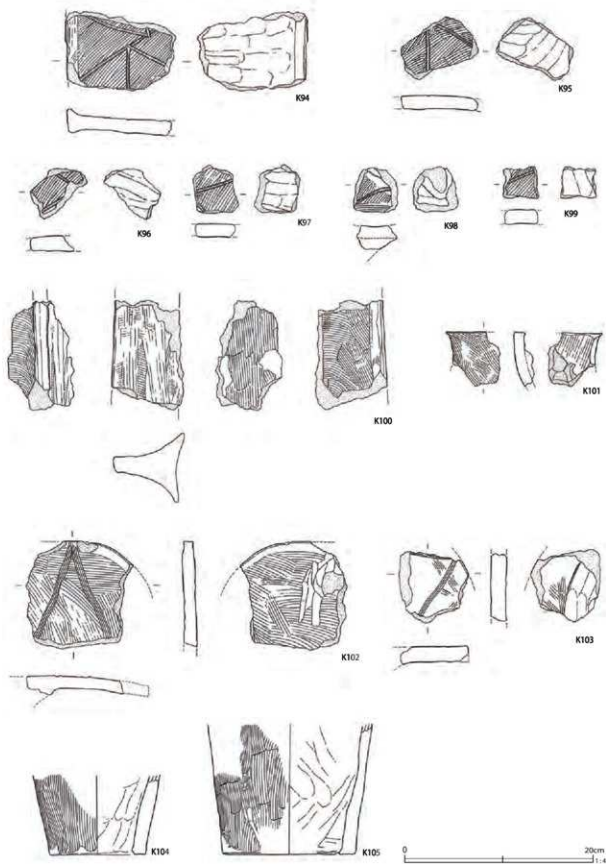
第62图 形象埴輪(4)



第 63 图 形象埴輪 (5)

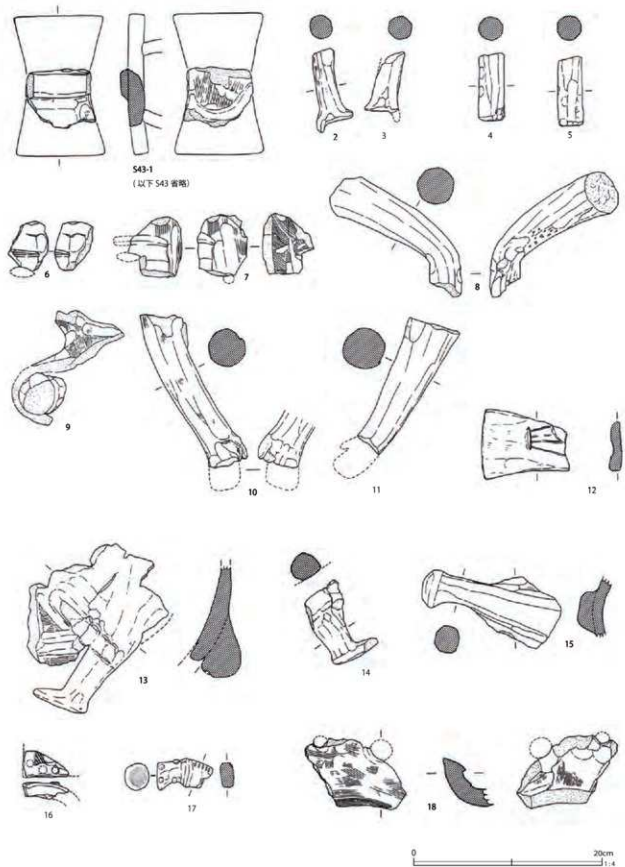


第 64 图 形象埴輪 (6)



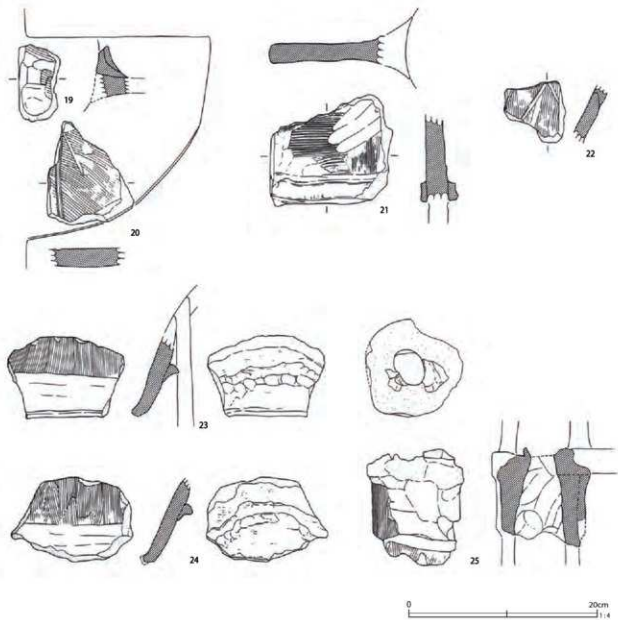
第 65 图 形象埴輪 (7)

既報告資料（抜粋）



第 66 図 既報告の形象埴輪（抜粋 1）

既報告資料（抜粋）



第 67 図 既報告の形象埴輪（抜粋 2）

第2表 形象埴輪観察表（凡例は第1表に準じる）

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 遺構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色調1 色調2 焼成	含有物量 含有物
K01	人物埴輪	顔	B	Ⅲ区 外堀 19T	13.7 13.8	ナデ	部分的に 工具ナデ 残存	部分赤彩。	明赤褐 5YR5/6 A	多量 ～3mmの 鉄分粒子多 ABFHJ
K02	人物埴輪	顔	B	Ⅰ区 遺出し	4.1 5.9	ナデ	ナデ		明赤褐 5YR5/6 A	中量 ABFJ
K03	人物埴輪	女子 髷部	B	Ⅰ区 東くびれ部 表採	9.4 10.9	タテハケ 端部ナデ 消し	タテハケ 端部ナデ 消し	東くびれ部表採	橙 7.5YR6/ B	多量 白色粒子多 ABFHJ
K04	人物埴輪	耳飾り	A	Ⅰ区 遺出し 37T	4.5 5.2	ナデ	未調整		明赤褐 2.5YR5/ A	少量 ABDFG
K05	人物埴輪	美豆良?	B	Ⅰ区 遺出し 37T	4.8 4.1	ナデ	—		明赤褐 5YR5/6 A	少量 ABJ
K06	人物埴輪	美豆良?	B	Ⅰ区 遺出し	7.2 4.3	雑なナデ	—		橙 7.5YR6/ B	中量 BFGJ
K07	人物埴輪	美豆良?	A	Ⅰ区 墳丘 36T	4.8 5.0	ナデ	—		明赤褐 2.5YR5/ A	中量 BFGJ
K08	人物埴輪	肩～上腕部	A	Ⅰ区 遺出し	8.1 6.3	ナデ	—	先端はホソ状	明赤褐 2.5YR5/ B	少量 BF
K09	人物埴輪	肩～上腕部	A	Ⅰ区 遺出し	5.9 5.0	内側ハケ 外側ナデ	—		明赤褐 2.5YR5/ B	微量 BFG
K10	人物埴輪?		B	Ⅰ区 遺出し	6.6 4.5	ナデ	—	被熱により表面の剥離 顕著。中空。	橙 7.5YR6/ C	中量 ABFGJ
K11	人物埴輪	腕	B	Ⅰ区 墳丘 44T	8.5 4.0	ナデ (ナデ前の ハケメ僅 かに残る)	—	中実	橙 7.5YR6/ B	少量 BFJ
K12	人物埴輪	腕	B	Ⅰ区 墳丘 42T	10.0 5.7	ナデ	—	中実	橙 7.5YR6/ A	少量 ABFG
K13	人物埴輪	腕～手	B	Ⅰ区 遺出し	11.6 4.0	ナデ	—	中実	橙 7.5YR6/ A	少量 ABF

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 遺構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色頭1 色頭2 焼成	含有物量 含有物
K14	人物埴輪	右手	B	I区 墳丘 36T	4.4 3.7	ナデ	—	人差し指のみ完存。	明赤褐 5YR5/6 A	少量 BH
K15	人物埴輪	手	A	I区 遺出し	3.2 2.8	ナデ	—	先端部欠損。4本の指 表現	明赤褐 2.5YR5/6 B	少量 BG
K16	人物埴輪	指・爪	B	I区 遺出し	4.0 4.0	指頭ナデ	ナデ	指2本遺存	橙 7.5YR6/6 A	少量 BF
K17	人物埴輪	足	A	I区 墳丘 36T	5.7 3.3	ナデ	—		明赤褐 2.5YR5/6 A	微量 BF
K18	人物埴輪	足	A	I区 墳丘 遺出し	3.0 2.7	上面指頭 ナデ、下 面ハケ残 る	—		明赤褐 2.5YR5/6 A	微量 B
K19	人物埴輪?	不明	不明 (A)	I区 墳丘 遺出し	2.3 1.4	ナデ	—	人物の装身具片か?	明赤褐 2.5YR5/8 B	微量 B
K20	人物埴輪	不明	A	I区 墳丘 39T	4.1 4.2	ハケ後、 雑なナデ	—	部位不明	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BG
K21	人物埴輪	頭椎柄頭?	A	I区 墳丘 遺出し	5.7 5.6	ナデ	—		赤 10R4/6 A	少量 BG
K22	人物埴輪	美豆良? 柄部?	A	I区 墳丘 遺出し	4.9 3.6	ナデ	—	紐状の巻きつけあり	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BFG
K23	人物埴輪	大刀	A	I区 墳丘 35T	7.3 4.9	ナデ	—	表面剥離痕。柄頭に近 い箇所か	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BG
K24	人物埴輪?	大刀?	A	I区 墳丘 39T	3.9 4.2	ナデ	—		明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BJ
K25	人物埴輪?	不明	A	I区 墳丘 39T	3.6 3.7	ナデ	—	部位不明	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BG
K26	人物埴輪?	胃の鏝?	A	I区 墳丘 遺出し	5.7 8.5	本体ハケ	粗いハケ	粘土帯の上に粘土粒を 貼り付ける。粘土帯以 外にも粘土粒あり	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BF

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 遺構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色調1 色調2 焼成	含有物量 含有物
K28	人物埴輪?	不明	A	I区 墳丘 遺出し	2.7 2.8	ナデ	不明	粘土帯上に粘土粒を貼り付ける。	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BF
K29	人物埴輪?	不明	A	I区 墳丘 遺出し	2.7 2.4	ナデ	不明	粘土帯上に粘土粒を貼り付ける。	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 B
K30	人物埴輪?	革製品・鏝	A	I区 墳丘 36T表掘	2.4 2.5	ナデ	未調整	矢羽模状文様を列点で囲む。	明赤褐 2.5YR4/8 A	少量 B
K31	人物埴輪?	不明	A	I区 墳丘 遺出し	4.0 3.8	ハケ	未調整 粘土粒貼 り付け痕	豆粒状の突起	明赤褐 2.5YR5/8 B	少量 BG
K32	人物埴輪?	不明	B	I区 墳丘 遺出し	5.9 3.9	ナデ	—	三角形の突起。2本の 浅い沈線。	橙 7.5YR6/6 B	中量 BFG
K33	人物埴輪?	不明	B	I区 墳丘 遺出し	4.8 4.8	幅広の ハケメ様 の浅い沈 線。	—	6条の沈線 裏面に略長 方形の焼成甘い箇所あり	橙 5YR6/8 B	少量 BJ
K34	人物埴輪	腰帯部	B	I区 墳丘 44T	8.0 10.7	帯以上ナ デ。器台 部タテハ ケ	工具ナメ ナデ	腰帯から垂下する結び 目表現。	橙 7.5YR6/6 A	少量 ABG
K35	人物埴輪?	(人物耳孔?)	A	I区 墳丘 遺出し	5.0 4.5	ハケ、ナ デ	未調整	円形透孔あり	赤 10R4/6 A	少量 BJ
K36	人物埴輪?	不明	B	I区 墳丘 遺出し	3.2 5.4	ハケ	ナデ	円形透孔あり	明赤褐 5YR5/6 A	中量 AB
K37	人物埴輪	裾・器台部	B	I区 墳丘 遺出し	5.1 5.2	器台部タ テハケ、 裾部ナデ	工具ナデ	器台部透孔	橙 7.5YR6/6 B	多量 ABG
K38	人物埴輪	裾部	B	I区 墳丘 39T	6.4 5.4	ハケ後ヨ コナデ	ナデ		明赤褐 5YR5/6 A	少量 AFG
K39	人物埴輪	裾部	B	I区 墳丘 遺出し	3.7 9.1	タテハケ	未調整	推定直径約25cm	明赤褐 5YR5/6 A	中量 ABJ
K40	馬形埴輪	馬鐸	B	I区 墳丘 44T	10.0 6.8	ナデ	鍍金指頭 ナデ成形	裾部は波状。表半分 のみ粘土板にて作り直 接馬体に貼りつける	橙 7.5YR6/6 A	多量 白色針状物 質含有 ABCFG

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 通構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色調1 色調2 焼成	含有物量 含有物
K41	馬形埴輪	馬蹄	B	I区 墳丘 42T	8.8 4.7	ナデ	雑な指頭 ナデ成形	形状、胎土等がK40と 酷似、一対の可能性高い。	橙 7.5YR6/6 A	多量 白色針状物 質含有 ABCFG
K42	馬形埴輪	馬蹄	B	I区 墳丘 遺出し	5.4 3.5	ナデ	雑な指頭 ナデ成形		橙 7.5YR6/6 A	多量 白色針状物 質含有 ABCFG
K43	馬形埴輪	馬具 鈴	A	I区 墳丘 遺出し・ 39T	11.9 8.4	体部ハケ 後ナデ	体部ハケ	大形	赤 10R4/6 A	微量 BJ
K44	馬形埴輪	馬具 鈴	A	I区 墳丘 44T	4.0 4.8	器面摩耗 で不明	—		明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BF
K45	馬形埴輪	馬具 鈴	B	I区 墳丘 42T	3.9 4.0	指頭ナデ	—		橙 7.5YR6/6 A	多量 白色針状物 質含有 ABCFG
K46	馬形埴輪	馬具 突起付き鈴	A	I区 墳丘 遺出し	4.0 3.4	指頭ナデ	—	豆粒状の突起貼り付け 1、剥離痕3箇所あり	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 B
K47	馬形埴輪	馬具 突起付き鈴	A	I区 墳丘 遺出し	3.3 3.1	指頭ナデ	—	貫通する孔あり。4箇所の 突起の剥離痕あり	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 B
K48	馬形埴輪	馬具 胸繫か	B	I区 墳丘 39T	10.7 10.2	ナデ	工具ナデ	粘土粒の顕表現により 飾った楕円形杏葉が垂 下。	橙 7.5YR6/6 B	多量 白色針状物 質含有 ABCFG
K49	馬形埴輪	馬具	A	I区 墳丘 遺出し	12.4 8.4	ナデ(杏 葉下体部 ハケメ残 存)	ハケ	粘土粒の顕表現により 飾った略円形杏葉が垂 下。	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BJ
K50	馬形埴輪	馬具	A	I区 墳丘 39T	6.6 6.9	体部ハケ 後ナデ	ハケ	粘土粒の顕表現により 飾った円形杏葉が垂 下。	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BJ
K51	馬形埴輪?	飾り金具	B	I区 墳丘 44T	2.5 2.6	—	—	粘土粒の顕表現2箇所 遺存。K48と酷似。	橙 5YR6/6 B	少量 B
K52	馬形埴輪	尻繫・杏葉	A	I区 墳丘 42T	8.3 8.7	器面摩耗 で不明	工具ナデ か	綱から垂下する飾り金 具表現。	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BFJ
K53	馬形埴輪	雲珠?	(A)	I区 墳丘 37T	5.2 4.7	ナデ	未調整	中央に直径1cmの透 孔、側面にスリット1箇 所遺存。	橙 5YR6/8 B	微量 BF

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 通構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色頭1 色頭2 焼成	含有物量 含有物
K54	馬形埴輪	頭部・ 素環鏡板付甕	A	I区 墳丘 遺出し	5.6 5.8	ハケ後ナ デ	工具ナデ	鏡板の大半は剥落する。 推定直径約5cm	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 BJ
K55	馬形埴輪	面装	B	I区 墳丘 44T	7.2 7.3	ナデ	ナデ	粘土粒の紙表現2箇所	橙 5YR6/8 B	多量 BFGJ
K56	馬形埴輪	I字形鏡板	A	I区 墳丘 遺出し	3.4 3.3	ナデ	指頭ナデ	粘土粒の紙2箇所遺存。	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 BG
K57	馬形埴輪	立髪柱状部?	A	I区 墳丘 遺出し	3.3 2.8	雑ナデ	—		明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 BG
K58	馬形埴輪	立髪	A	I区 墳丘 39T	5.4 6.8	器面摩耗 で不明(ハ ケ残る)	—		明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BFJ
K59	馬形埴輪	立髪	B	I区 墳丘 遺出し	4.8 8.4	略角部ナ デ、板状 部ハケ	—	板状髪と一体となった 形骸化した略角状髪	橙 5YR6/8 B	多量 白色針状物 質含有 BFGJ
K60	馬形埴輪	立髪後部	B	I区 墳丘 遺出し	8.2 10.5	ハケ	—	末端部はS字状を呈す る。	橙 7.5YR6/6 B	中量 BFG
K61	馬形埴輪	覆輪	B	I区 墳丘 42T	5.7 9.0	外縁部ナ デ、他ハ ケ	—		橙 7.5YR6/6 B	多量 白色針状物 質含有 BCFG
K62	馬形埴輪	覆輪	B	I区 墳丘 39T	6.0 9.4	外縁部ナ デ、他ハ ケ	—		明赤褐 2.5YR5/6 B	少量 ABG
K63	馬形埴輪	障泥?	不明	Ⅲ区 外堀 19T	7.3 10.5	粘土帯部 ナデ、他 ハケ	ハケ後ナ デ	幅広の粘土帯輪郭。	橙 5YR6/8 B	多量 ABF
K64	馬形埴輪	障泥?	B	I区 墳丘 42T	6.0 9.3	ハケ後雑 ナデ	ハケ後雑 ナデ	折り返し部遺存	橙 7.5YR6/6 B	多量 ABF
K65	馬形埴輪	障泥?	B	I区 墳丘 遺出し	5.6 8.3	ハケ後ナ デ	ハケ後ナ デ	小さな折り返しあり。	橙 5YR6/6 A	多量 BDJ
K66	馬形埴輪	障泥	B	I区 墳丘 42T	9.0 10.4	ハケ後ナ デ	不明	側面は折返し状に成 型。胴部との接合部。	橙 5YR6/6 A	中量 BFG

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 遺構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色調1 色調2 焼成	含有物量 含有物
K67	馬形埴輪	障泥?	(B)	I区 墳丘 36T	8.5 9.6	ハケ後 雑ナデ	工具ナデ	やや円みを帯びる。	橙 5YR6/8	中量 白色針状物 質多量 BFG
K68	馬形埴輪	障泥?	B	I区 墳丘 35T	8.4 7.4	ハケ後 雑ナデ	ハケ	側面は緩やかなS字を描く。	明赤褐 5YR5/6 A	多量 砂粒多量 BFJ
K69	馬形埴輪?	障泥?端部	A	I区 墳丘 36T	3.5 4.3	ナデ	ナデ	小破片のため障泥以外の可能性あり。	明赤褐 2.5YR5/8 A	微量 BG
K70	馬形埴輪?	障泥?端部	B	I区 墳丘 造出し	3.3 4.2	ナデ	不明	小破片のため障泥以外の可能性あり。	橙 7.5YR6/6 B	多量 ABGJ
K71	馬形埴輪	胴部(綱部)	B	I区 墳丘 44T	10.1 9.4	ナデ	工具ナデ	横走する幅広の粘土紐から垂下する粘土紐	橙 5YR6/6 A	多量 砂粒多量 BFJ
K72	馬形埴輪	胴部(綱部)	(B)	I区 墳丘 39T	9.9 7.8	胴部ハケ 後ナデが	摩耗により 不明		橙 5YR6/8	多量 砂粒多量 BFGJ
K73	馬形埴輪	胴部	A	III区 外堀 15T	8.3 10.7	ナデ	工具ナデ		明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BG
K74	馬形埴輪?	綱部	B	I区 墳丘 42T	8.5 6.5	ナデ	ナデ		橙 5YR6/6 A	中量 白色針状物 質含有 BCG
K75	馬形埴輪	顔側板	B	I区 墳丘 造出し	6.2 7.6	ハケ後 ナデ	ナデ		橙 5YR6/6 A	中量 白色針状物 質含有 BCFG
K76	馬形埴輪	顔側板	A	I区 墳丘 39T	5.7 6.6	ハケ後 ナデ	工具ナデ		明赤褐 2.5YR/5/8 A	微量 BG
K77	馬形埴輪?	不明(障泥?)	B	I区 墳丘 42T	4.7 5.5	ハケ。端 部ナデ	ナデ		明赤褐 5YR5/6 B	中量 白色針状物 質含有 BCFG
K78	馬形埴輪?	不明(立髪柱状部?)	A	I区 墳丘 造出し	2.9 4.5	ナデ	—		明赤褐 2.5YR/5/8 A	少量 BFG
K79	馬形埴輪?	不明(立髪)	A	II区 内堀 27T	3.8 5.6	雑指頭 ナデ	—		明赤褐 2.5YR/5/8 A	少量 BG

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 選構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色調1 色調2 焼成	含有物量 含有物
K80	馬形埴輪?	手組?	A	I区 墳丘 遺出し	2.4 2.7	ナデ	—	刻みあり	明赤褐 2.5YR/5/8 B	少量 B
K81	馬形埴輪?	不明	B	I区 墳丘 遺出し	3.0 5.8	ナデ	ハケ	直径2cmの飯表現あり。	明赤褐 5YR5/6 B	多量 ABHJ
K82	馬形埴輪?	不明	A	I区 墳丘 36T	3.9 6.2	ナデ	ハケ		明赤褐 2.5YR/5/8 A	少量 BF
K83	馬形埴輪?	不明	A	I区 墳丘 遺出し	3.6 5.6	ナデ	未調整	複数回の刺突痕ある透 孔あり。	明赤褐 2.5YR/5/8 A	少量 BG
K84	馬形埴輪	尾	A	I区 墳丘 44T	7.3 6.0		器面摩耗 不明(ハ ケ後ナデ か)		明赤褐 2.5YR/5/8 B	少量 BG
K85	馬形埴輪	耳	B	I区 墳丘 44T	4.9 3.7	指頭ナデ	指頭ナデ		明赤褐 5YR5/6 B	多量 白色針状物 質含有多量 BJ
K86	不明	不明	A	I区 墳丘 38T	3.4 2.6	指頭ナデ	—		赤 10R4/6 A	少量 BG
K87	不明	不明(先端部)	B	I区 墳丘 遺出し	3.3 3.5	ナデ	ハケ後雑 ナデ	粘土粘貼り付け後、側 面は丁寧な面取り	明赤褐 5YR5/6 B	少量 BFG
K88	不明	不明	B	I区 墳丘 遺出し	5.8 10.0	ハケ後外 縁部ナデ	雑ナデ		橙 7.5YR6/6 B	中量 BFG
K89	家形埴輪?	堅魚木? (人物美豆 良?)	B	I区 墳丘 44T	6.7 2.6	ナデ	—		橙 5YR6/6 B	中量 白色針状物 質含有 BCFHG
K90	家形埴輪	壁面	B	I区 墳丘 遺出し	7.9 11.2	突帯 ナ デ。他は ハケ。	ナデ	～92まで同一個体。	橙 5YR6/6 B	中量 白色針状物 質含有 BCFHG
K91	家形埴輪	壁面(入口部)	B	I区 墳丘 遺出し	10.9 7.0	突帯、隅 部、スリ ット側面ナ デ。他は ハケ。	ナデ	傾く縦スリットあり。	橙 5YR6/6 B	中量 白色針状物 質含有 BCFHG
K92	家形埴輪	壁面(入口部)	B	I区 墳丘 遺出し	5.2 6.3	突帯、隅 部、スリ ット側面ナ デ。他は ハケ。	ナデ	傾く縦スリットあり。	橙 5YR6/6 B	中量 白色針状物 質含有 BCFHG

No.	分類1	分類2	分類3	出土区 選構 トレンチ名	現存 最大高 最大幅	外面調整	内面調整	備考	色調1 色調2 焼成	含有物量 含有物
K93	家形埴輪?	屋根部?	B	Ⅲ区 内堀 10T	9.3 13.0	下 方 ハ ケ。上方 ヨコナデ	ナデ	前回調査で酷似した破 片2点出土。	橙 5YR6/6 B	中量 白色針状物 質含有 BCFHG
K94	盾形埴輪		B	I 区 墳丘 遺出し	8.4 11.5	縁 辺 部 ナ デ。他ハ ケ	雑ナデ	略矢羽根状の沈線。 ～ K99同一個体。	明赤褐 5YR5/6 A	多量 BFGHJ
K95	盾形埴輪		B	I 区 墳丘 遺出し	6.6 8.1	ハケ	雑ナデ	矢羽根状の沈線	明赤褐 5YR5/6 A	多量 BFGHJ
K96	盾形埴輪		B	I 区 墳丘 遺出し	5.4 6.0	ハケ	雑ナデ	矢羽根状の沈線	明赤褐 5YR5/6 A	多量 BFGHJ
K97	盾形埴輪		B	I 区 墳丘 遺出し	5.1 4.8	ハケ	雑ナデ	矢羽根状の沈線	明赤褐 5YR5/6 A	多量 BFGHJ
K98	盾形埴輪		B	I 区 墳丘 遺出し	4.8 4.7	ハケ	雑ナデ	矢羽根状沈線か? 器台 部との接合部	明赤褐 5YR5/6 A	多量 BFGHJ
K99	盾形埴輪		B	I 区 墳丘 遺出し	3.4 3.8	ハケ	雑ナデ	矢羽根状(遺存部にはI 条)の沈線。	明赤褐 5YR5/6 A	多量 BFGHJ
K100	盾形埴輪? (馬立髪?)		A	I 区 墳丘 遺出し	11.7 7.6	右 側 面 ハケ後ナ デ。左ハ ケ。	一	両側面で調整異なる。	明赤褐 2.5YR5/8 A	少量 BFG
K101	不明(盾?)	先端部	A	I 区 墳丘 39T	5.8 5.7	ハケ後ナ デ	ハケ	器台部との接合部	明赤褐 2.5YR5/6 A	微量 B
K102	鬚形埴輪		B	Ⅱ区 整 備 工 事 中表探 (外堀範囲)	11.4 11.3	表面上位 ヨコハケ、 下位ナナ メハケ。	雑ハケ	遺存する側面は円弧を 描く。鬚歯状の沈線。	橙 7.5YR6/8 C	多量 白色針状物 質含有 砂粒多 BGJ
K103	鬚形埴輪		B	Ⅱ区 外堀 12T	7.6 7.4	ハケ	雑ハケ	K102と同一?	橙 7.5YR6/8 C	多量 砂粒多 BGJ
K104	不明	器台部	(B)	I 区 墳丘 39・42・ 44T	8.1 推定底 径10.4	タテハケ	ナデ	底部ミガキ様調整	橙 5YR6/8 A	微量 BJ
K105	不明	器台部	B	I 区 墳丘 遺出し	13.6 推定底 径14	タテハケ	ナデ	底部雑なナデ	明赤褐 5YR5/6 A	中量 白色針状物 質含有 BCFHG

第8節 須恵器・土師器

① 概要

今回の奥の山古墳の調査では、今までの埼玉古墳群の発掘調査の中で最も須恵器の出土量が多かったと言える。ただし第1節で述べたとおり、出土総数の99%以上は、造出し部から細片になって出土したものである。

時間をかけて慎重に接合作業を行ったが、接合率は低かった。また同じ器種での個体識別は困難を極めた。特に今回復元した裝飾付壺については、口縁部の遺存状況から最低3個体が存在したことが判明したが、その内のS16とS17の2個体については、法量、文様、色調等が酷似しており、それぞれに伴うべき子壺の個体識別は、接点がないものについては実質不可能であった。当初は全体復元しない選択肢も検討したが、今後の研究に資することを優先してあえて全体復元を行った。類例のない器形のため、細部の形態については、今後、類例の増加をもって再検討、再復元する必要があることを明記しておく。

また器台の脚部についても同様である。脚裾部の形状、凹線の間隔、波状文の識別、透孔の配置、色調、焼成度合い等で4個体を識別し、さらには脚部の立ち上がり角度や直径についても、各破片で数値を推定し、慎重に復元した。しかし、各破片には接点ほとんどないことから、今後、類例との検討の中で修正が必要である。それ以外の須恵器についても同様で、特に小破片の復元実測についても同様である。

② 坏類

S01は蓋である。残存率60%で口径は15.4cmである。口縁部は開きぎみに下がる。口縁端部は内傾し、ごく緩い沈線状となる。天井部との境の稜の突出は小さく、鈍い。天井部には直径2.5cmのつまみの剥離痕が残る。天井部の回転ヘラ削りの範囲は天井部高の1/2弱の狭い範囲である。胎土には3～5mmの白色礫を多量に含む。

S02も蓋であるが、残存率は10%の小片である。S01と比較すると口縁部の形態と天井部との境の稜の作出方法が異なるため、別個体と判断した。S01の稜は天井部から突出しているのに対し、S02は天井部から稜は突出せず、口縁部との段差により作出している。推定口径は15.6cmである。

S03は坏身である。残存率5%で口径は計測できない。口縁部の立ち上がりは短く内傾する。上位にむけて肉厚となり、端部は丸く仕上げられる。受け部はほぼ水平に伸びる。

③ 高坏

S04は無蓋高坏である。坏部と脚部は接合しないが、色調、胎土とも酷似しており同一個体と判断した。脚部の形態は長脚一段三方透かしである。坏部の残存率は20%、脚部の残存率は40%程度である。推定口径11.2cmの坏部は小さく外反する体部を有し、1条の凸線で口縁部と区画される。凸線は上下2条の凹線により作出している。下の凹線直下には櫛歯状工具により右上がりに跳ね上がる刺突文が施文される。刺突文の直下は急角度で屈曲し、回転ヘラ削り調整が認められる。口縁部中位はやや凹むことにより外反ぎみとなる。端部は薄く、丸くおさまる。推定底径9.6cmで口径よりやや小さい脚部は、端部がわずかに平坦ぎみに仕上げられる。胎土には1mm内の細礫が

認められるが、前述した坏類と比較すると明らかに含有物が少なく、鈍い光沢を有する。

S05は高坏脚部の裾部である。端部は鋭角で立ち上がり、S04とは明らかに異なる。長方形透孔の下方が僅かに残存するが単位は不明である。色調、胎土はS04と似る。

④ 甕もしくは筒形器台

S06は最大径12.4cmの球形胴を呈する。頸部下端が僅かに残存しており、頸部は外傾して開くと思われる。胴部の最大径付近から下方にむかつては僅かに内傾する。胴部上位に3条の凸線を施し、直径1.5cmの透孔が穿たれる。凸線直下には櫛歯刺突文が施される。刺突文は右から左へ向かって施文するが、重なりあっている部分も多く雑な施文である。胎土にはS01と同様に2mm程度の白色礫を多く含有する。

S07は内湾する小破片であるが、側面1箇所にスリットをもつ。また櫛歯刺突文も破片の最上位に僅かに残る。内面成形痕および断面形態から胴部下半の破片と思われる。

S08も内湾する小破片だが2方向にスリットを有する。スリット間は71度の角度であることから5単位と推定される。胎土にS06同様の2mm程度の白色礫を多く含有する。

S06とS07は接点がないが、いずれにも酷似した櫛歯刺突文が施文される。類例がないため復元実測は行わなかったが、仮に同一個体の場合は、写真図版68のようになると考えられる。

S06は胴部と肩の張り方や凸線の位置等から甕と同定するには異形である。また、S07とS08はいずれも小破片であるが、内湾してスリットをもつ。この属性を有する器種としては筒形器台もしくは二十甕が挙げられる。ただし、筒形器台の可能性のある破片は他に出土していない。

⑤ 甕・壺等

S09は甕の口縁部と想定される。推定口径は16.6cmで大きく外反する器形である。口縁端部は内傾し、浅い沈線が巡る。口縁部には櫛描波状文が施される。頸部とは断面三角の薄い2条の凸線で区画される。頸部にも櫛描波状文が施される。

S10は甕の頸部であろうか。頸部下端に僅かに胴部との屈曲部が遺存する。櫛描波状文が全面に施文される。後述するS16、S17の装飾付壺の子壺の破片ともやや近似する。しかし、子壺の櫛描波状文帯は例外なく沈線で区画される。S10は、子壺の波状文帯と比較すると明らかに幅広であり、さらには子壺の頸部最下段は無文帯となる。したがって装飾付壺に伴う子壺ではなく、甕と分類した。

S11は壺の頸部と推定される。胴部との境界部が一部残存しているが、器形は不明である。破片最上位に凹線が認められる。S12は壺の胴部破片である。胴部最大径付近において、2条の浅い凹線の間に幅1.2cmの櫛歯刺突文が施文される。また、下方の凹線直下には櫛描波状文が施文される。なお櫛歯刺突文は、前述したS04、S06、S07と比較すると単位が明確で、丁寧な施文である。

S13と14は接合しないものの、胎土の類似性から、同一個体の提瓶と推定される。推定口径8.6cmで粘土帯によりシャープな段を有する。口縁端部には斜位の平坦面が作出される。緑色の釉に被覆されることから識別困難だが、単位不明の櫛描波状文が施文される。口縁直下の波状文の頂点周辺に工具痕が明瞭に残る。波状の振幅は頸部近くまで到達しているようだが単位不明である。

胎土に白色の細砂粒子を多く含むが、他個体と比較すると礫は含有せず、精練された胎土である。S14は自然釉が部分的に付着する。別個体の須恵器坯類の破片が付着している。外面にはカキ目等の調整痕は認められない。内面には紋り閉塞痕が僅かに残存する。S13、14の胎土はS04の無蓋高杯のそれと酷似することから、東海東部産の可能性がある。

S15の壺は頸部から胴部下半まで残るが、遺存率は20%と低い。頸部から胴部にかけて強く屈曲し、胴部は略球形を呈する。胴部最大径付近に3条の凹線に区画された2帯の文様帯が配置される。上段には櫛歯刺突文が施文される。下段には櫛描波状文が1条認められる。いずれの文様も器面の剥離と軸により不明瞭である。また、場所によっては凹線、櫛描文いずれも施されない場所があり、凹線と波状文が、ほぼ同じ場所で途切れている。なお無文箇所は、斜位のタタキ目が強く残る箇所でもある。胎土の含有物は非常に少なく、他の出土須恵器と比較すると明らかに異なる。

⑥ 裝飾付須恵器

裝飾付須恵器の中で「裝飾付壺」に分類されるものである。さらに細分した場合「子持壺」とも呼称される。記述に際して、便宜的に本体部分を「親壺」、付属する小型の壺を「子壺」とする。

今回出土した裝飾付壺の特徴は、器台状の脚をもたず、自立しない点、親壺と子壺が同じ文様モチーフをもつ点、子壺の底部には孔があり、親壺の内面と一体化している点が挙げられる。

S16については、口縁端部から底部近くまで、かろうじて接点があったことから、全体の器形を復元することができた。また、親壺の胴部から突出する子壺の付け根が接合したことから裝飾付須恵器であることが判明した。

復元に際して検討した点は、子壺の個数である。子壺は均等に配置されると仮定すると、残存する親壺の破片と子壺の大きさから、4単位以上の配置は不可能であることから、3単位以下であることが判明した。各地で出土している類例や、器形のバランス、さらには親壺、子壺の出土量（親壺口縁部の残存率の2.7倍の子壺口縁部が出土）を分析して子壺を3単位として復元した。

S16の親壺は推定器高34cm、口径19.8cmである。残存率は口頸部50%、胴部30%である。口縁部は二重口縁である。口唇部は緩やかな凹状を呈し、外面も鈍い凹状となる。口頸部は細長で緩やかに外反する。3箇所の凹線により文様が4帯に区画される。凹線は原則2条施され、その間が凸線となるが、その間隔は一定ではなかったり、開始点と終点の位置がずれて部分的に3条になったりと、やや雑である。4帯の区画内は、1段から3段目までが櫛描波状文となり、最下段の4段目が無文帯となる。櫛描波状文の原体幅は約2.1cmで櫛本数は16本歯である。1段目は2周施文、2、3段目は3周施文である。

胴部は、子壺の下端付近が最も張り出す算盤玉状を呈し、推定最大径は20cmで口縁径とほぼ同じ数値となる。胴部上位には器形に対して左下がりの平行タタキ目があり、その上に3条のカキ目が認められる。カキ目の幅は約7mmであるが、その隙間にはタタキ目があることから文様効果とも言える。胴部最大径付近のタタキ目は、カキ目によりほぼ消されている。胴部の1/3以下はタタキ目のみとなり、底部周辺はナデとなる。なお、子壺との接合部周辺は指頭ナデによりタタキ目、カキ目とも消されている。底部中央は欠損しているが、緩やかな丸底となり、安定した自立はできない。

親壺の内面調整は、口頸部がヨコナデ、胴部には同心円の当て道具痕が残るが、かなり深い痕跡である。子壺との接合箇所については、孔周辺で折り返された粘土が同心円痕に被さっていることが観察された。

親壺と接合した子壺は、口頸部の残存率50%、胴部の残存率は30%である。推定口径8.6cm、器高約19cmである。親壺からおよそ30度の傾きで取り付けられる。口縁部は二重口縁であり、口唇部には平坦面が作出される。口頸部は細く、ラップ状に緩やかに外反する。

3箇所の凹線により文様が4帯に区画される。凹線は親壺と異なり、原則1条施されるが、開始点と終点がずれ、部分的に2条の箇所もある。親壺と同様に、4帯の区画内は、1段から3段目までが櫛描波状文となり、最下段の4段目が無文帯となる。櫛描波状文の原体幅は約2.1cmで櫛本数は14~16本歯である(上下端が不鮮明)。1周施文が多いが、部分的に2周施文も認められる。偶然の可能性もあるが、原体幅と子壺の文様帯の幅は概ね一致する。口頸部と胴部との境界は僅かに凹線状を呈する。胴部は、親壺と比較すると、肩の位置が高い。タタキ目、カキ目とも認められず、ナデ調整である。内面調整は口頸部、胴部ともナデである。

親壺、子壺とも胎土にはS01、S06と同様に2~10mmの大粒の白色礫を多く含有する。

S17は法量、器形、色調等S16と酷似しているが口頸部の遺存部位から、明らかに別個体である。ただし胴部と子壺の接点はあるものの、口頸部と胴部との接点はない。親壺は推定器高32.8cm、口径21.8cmである。残存率は口頸部40%、胴部25%である。

口頸部は、上位がやや歪むことにより、S16より外反度合いが強くなる。口頸部の文様構成や文様および施文方法はS16に準じる。胴部は、S16と同様、子壺下端付近が最も張り出すが、張り出しが弱く、球形胴を呈する。胴部上位のタタキ目、カキ目の単位は不鮮明である。胴部最大径以下は、4単位のカキ目が認められ、その隙間に左下がりの平行タタキ目が残る。底部付近はタタキ目のみとなり底部はナデとなる。底部中央は欠損しているが、S16と同様、自立しない。

親壺(胴部)と接合した子壺の法量、器形、文様等はS16と同様である。

親壺、子壺とも胎土にはS16と同様、2~10mmの大粒の白色礫を多く含有する。

S18は壺の口頸部であるが、S16、S17と器形、文様構成が一致するため、裝飾付須恵器に分類したものである。前2個体とは色調、焼成具合が全く異なり、容易に分類できる。外面の色調は明るい灰色で、割れ口を観察すると肌色で脆弱な傾向にある。口頸部の残存率は約30%、推定口径は22cmで、下方の直径がやや太い。文様構成、施文方法等は前2個体と同様である。口頸部とは接合しないが、色調等から本個体に属すると推定される胴部破片がいくつか出土しており、それらはいずれも並行タタキ目と幅狭のカキ目である。2~10mmの大粒の白色礫を多く含有することも同じである。色調、焼成具合が近似した子壺の破片は抽出できなかったため、全体復元は行わなかった。

S19は古墳くびれ部東側、すなわち造出し部とは墳丘を越えた反対側で表採された資料である。内面の孔の状況や当て道具痕等から、子持壺の子壺胴部下半と考えられる。色調はS16、17とやや似るが接合しない。墳丘東側からは、他に須恵器の出土はないため、墳丘東側あるいは墳頂部に須恵器の分布域があるかは不明である。

⑦ 高坏形器台

装飾付須恵器と同様、複数個体が出土したが、接合率が低いことから、器形全体の復元は困難であった。したがって坏部と脚部を別個に図化したものが多いが、これが高坏形器台の個体数を示すものではない。坏部、脚部ともそれぞれ4個体ずつの分別が可能であることから、4個体以上の高坏形器台が存在したと言える。

S20は坏部と脚部は接合しないが、色調および脚部側に残る内面と坏部側の内面が酷似していたことから全体復元を行った。復元高は41.6cmである。

坏部は残存率20%で推定口径33.2cmである。緩やかに外傾しながら口縁部でほぼ水平に張り出し、二重口縁を呈する。口唇部は凹線状となる。凹線により3段に区画される。上の2段が櫛描波状文帯となり、3段目が無文帯となる。最上段の波状文は、屈曲箇所には工具が届かず、無文域がある。2段目は原則2周施文である。上下の順に施文される。1回の施文範囲の幅は最大1.4cmで櫛本数は14本歯であるが原体幅は不明である。3段目の無文帯は下方で強く屈曲し、脚部へと続く。その屈曲部より上方はナデ調整であり、下方にはタタキ目がある。坏部内面はヨコナデで、底面には同心円の当て具痕が部分的に残る。

脚部の残存率はおおよそ15%で、推定底径は27.8cmである。全体に緩やかに外傾し、裾部が外反する。裾部の端面は凹状を呈する。5条の凹線により6段に区画される。最上段と最下段が無文帯で、2～4段が櫛描波状文帯となる。最上段の無文帯には円形透孔がある。直径1cmの小さな孔が、やや下方に向かって穿たれている。透孔は2つ遺存していたが、後述するS21の最上段の透孔から、4単位の可能性が高い。2～5段は櫛描波状文の施文後に鋭利な工具により透孔が開けられる。2段目は3周施文、3段目は不明、4段目は不明、5段目は3周施文である。5段目最下端で観察できる櫛描波状文の原体幅は約2.1cmで櫛本数は21本歯である。透孔の数は、第2段において約45度の開きで配置されることから、各段に4単位ずつ配置したと思われる。また、第2段の2単位の透孔のほぼ中間に第1段の円形透孔および第3段の透孔が配置されていることから、透孔は直線的な配列にならず、入れ違いに配置されたと考えられる。透孔の形状は、長方形と三角形が認められるが、第2段で長方形と三角形が並ぶことと、その下の第3段は四角形になることは明らかであるが、それ以上の配列の規則性は判然としにくい。装飾付須恵器と同様に、大粒の白色礫を多く含有する。

S21は脚部最上段の破片である。色調は外面が茶色、内面が灰色である。S27と色調がやや似るが同一個体とする確証に欠ける。1段目と2段目を区画する凹線は、S20と異なり、2条となる。したがって凹線間が凸線状となる。最上段には円形透孔が2単位残存するが、本来は4単位と思われる。透孔は貫通しているものの穿孔時の粘土が内側に貼り付いたままである。僅かに残った2段目には櫛描波状文は認められないが、長方形透孔の上端を観察することができた。

S22は高坏形器台の脚部である。前述したS20とは色調、最下段が幅広である点、他の段は幅狭である点から別個体と認定した。実測図のとおり接点のない破片の推定復元である。推定底径は26.4cmである。現状では凹線で区画された7段が遺存するが、最上段には長方もしくは三角形の透孔の一辺と、波状文が遺存する。2段目から5段目までは櫛描波状文と透孔が配されるが、各段

の幅はS20と比較すると狭い。櫛描波状文は2、3段目が2周施文、3、4段目は3周施文である。観察できる櫛描波状文の一回施文の最大幅は1.7cmで櫛本数は16本である。最も大きい破片は3～5段目まで遺存し、透孔は各段に1箇所認められるが、3段目と5段目は直線的に配置され、4段目はずれることから、S20と同様、交互配列と推定される。透孔の上端が遺存するものは計3箇所あるが、いずれも三角形にはならず、台形状になると考えられる。最上段に櫛描波状文と透孔が遺存することから、8段構成の可能性もある。

S23の坏部は遺存率35%、推定口径32.8cmである。緩やかに外傾しながら口縁部でほぼ水平に小さく張り出し、二重口縁を呈する。S20との相違点として、口縁部外面が凹状になる。口唇部も凹線状となる。凹線により3段に区画されるが、下の凹線は部分的に2条となる部位がある。最上段の波状文は、櫛歯が当たらない部位も多い。原則2周施文であるが、場所によっては3周施文となる。2段目は1周施文である。1回の施文範囲の幅は最大1.8cmで櫛本数は13本歯であるが原体幅は不明である。3段目の無文帯は緩やかに内湾し、脚部との屈曲部が僅かに残る。平行タタキ目はS20よりも上位から認められる。タタキの角度が途中で変わり部分的に格子状となる。坏部内面はヨコナデで、底面近くになると同心円の当て具痕が部分的に残る。白色礫を少量含有する。

S24の坏部は遺存率25%、推定口径33.4cmである。色調はややS20と似るが、口縁端部に凹線が巡ることと、第2段の幅が1.2cm広いことから別個体とした。脚部との関係は不明だが、色調はS22に似る。櫛描波状文は1、2段目とも2周施文である。1回の施文範囲の幅は最大1.8cm、15本歯である。第1段の波状文が凹線を飛び越えて第2段にはみ出している部分もあるが、概ね丁寧な施文である。10mm超のものも含め、白色礫を多量に含有する。

S25は口縁部を欠損するものの、黒色を呈することと、第2段にもタタキ目が残ることから、他とは明らかに分別することができる。第1段の櫛描波状文の施文具によって、器面に一段段差が認められるが、密に施文されている。対して第2段は、ほぼ中央に1周施文が施されるが、その上下は無文域で、平行タタキ目が露出している。第3段は全面タタキ目が認められる。上位は縦位、下位は斜位もしくは横位のタタキ目となる。内面は上位が横ナデ、下位には同心円の当て具痕が残る。最大8mmの白色礫を含有する。

S26の高坏形器台の脚部は、裾部が大きく開くことから、S20、S22と分別した。また焼成がやや甘く、割れ口の色調が肌色を呈している。さらには区画する凹線が浅い傾向にある。このことから同一個体と想定される破片1点を合わせて復原実測した。裾部の残存率は20%で、推定底径は30.8cmである。裾部端面は概ね平坦であるが、内側の工具ナデ調整によりわずかな段差が生じている。下から2段目の櫛描波状文は2周施文であり、1回の最大施文幅は2.0cmで21本歯である。最下位の凹線直上には透孔の一边が遺存するが透孔の形状は不明である。その上の浅い凹線を一部壊すかたちで、透孔の一边が認められ、直線的な配列とならない。下から4、5段目に復元した破片にはごく浅い凹線をもち、2箇所に透孔が認められる。ここでも一段飛ばして直線的になることから、交互配列と考えられる。なお最下段の裾1.5cmの範囲は、ナデ消されているが、微かに平行タタキ目が認められる。他の高坏形器台同様、白色礫を多量に含有する。

⑧ その他の須恵器（拓本掲載資料）

S 27は高坏形器台の口縁部である。口縁部外面に凹線を有すること、櫛描波状文を区画する凹線が非常に浅く、かつ2条存在すること、第1段の波状文の上下の無文部が幅広であることなどから、前述した高坏形器台とは別個体の可能性が高い。胎土には白色礫を多く含む。

S 28は壺の頸部破片である。ごく浅い凹線の下は無文帯、上は櫛描波状文となる。装飾付壺の親壺、子壺と同じ構成となるが、無文帯の幅が両者の中間となる。径は子壺より明らかに大きい。胎土には白色礫を含む。

S 29は前方部の南西側コーナー部から出土した。大形の須恵器の破片である。甕の口頭部の可能性がある。一条の凹線の上下には櫛描波状文が施文される。この波状文は最大幅2.4cm、10本歯であるが、櫛歯間が広く、文様の振幅も大きい。装飾付須恵器や高坏形器台の波状文と比較すると明らかに異質である。胎土には5mm超の白色礫を多量に含有する。

S 30は大形の須恵器破片であるが、器壁は薄い。甕胴部外面に平行タタキ目、内面には同心円の当て具痕が認められる。胎土に白色粒子は認められるが3mm以内である。

S 31は甕の胴部最上位の破片と考えられる。外面には平行タタキ目が認められ、その上にカキ目が部分的に認められる。内面には同心円の当て具痕が認められる。胎土には5mm超の白色礫を多量に含有する。

S 32は甕の胴部破片と考えられる。外面には平行タタキ目が認められる。そのタタキ目の上に直行する幅2mmの浅い条線があるが、カキ目とは違い1歯である。内面には同心円の当て具痕が認められる。胎土に白色粒子は含有するが礫は含まない。

S 33からS 40は甕の胴部破片と考えられる。いずれも外面にタタキ目が認められるが、いずれもタタキ目の凹部分は細くシャープである。内面には同心円の当て具痕が認められる。I区墳丘35トレンチの内堀覆土出土のS 38のみ、外面が格子タタキ状となる。

S 41はⅢ区17トレンチから出土した甕頸部である。外面にはカキ目が認められる。胎土には5mm超の白色礫を含有する。

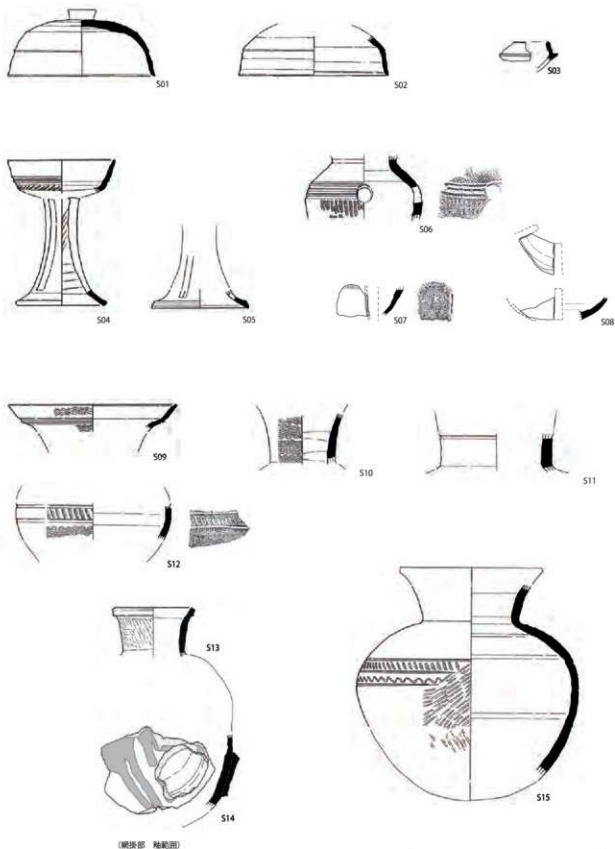
S 42はⅡ区27トレンチの内堀範囲の調査地点で出土したものである。2条の凹線の下方に左下がりの斜凹線が施される。造出し部周辺で検出された須恵器の文様と明らかに異質であることと、平成23年度の鉄砲山古墳の調査（今後報告予定）で近似したものが出土していることから、本資料は鉄砲山古墳に帰属する可能性が高い。

⑨ 土師器

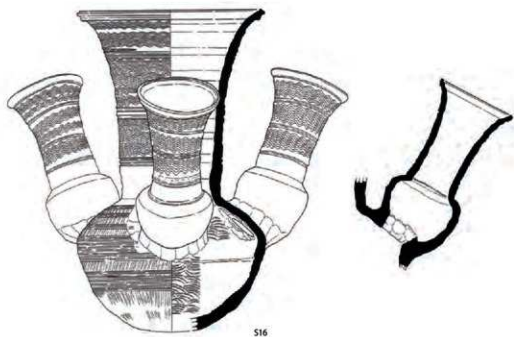
今回の調査で検出された土師器は、ここに掲載した2点のみである。

H01はⅡ区12トレンチの内堀覆土中から検出された須恵器模倣坏である。小片のため口径は不明だが、短い口縁部は外径し、口唇部は丸く、体部との境界にある稜の突出は小さい。色調は明るい橙色を呈する。

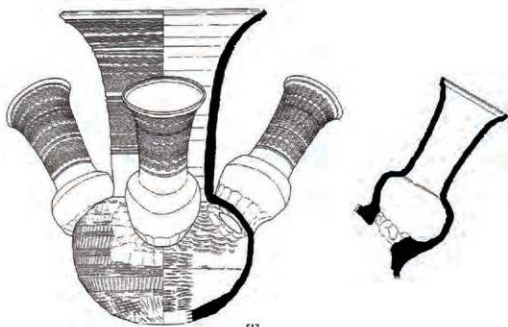
H02はⅣ区3トレンチの外堀覆土から検出されたものである。いわゆる比企型坏である。小片のため口径は不明だが、内外面赤彩される、口唇部には凹線が巡る。



第68圖 須惠器(1)



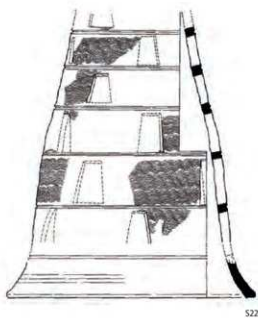
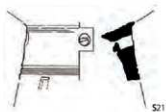
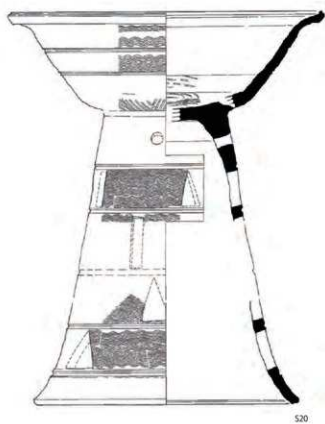
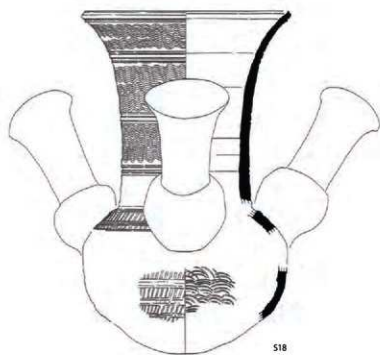
S16



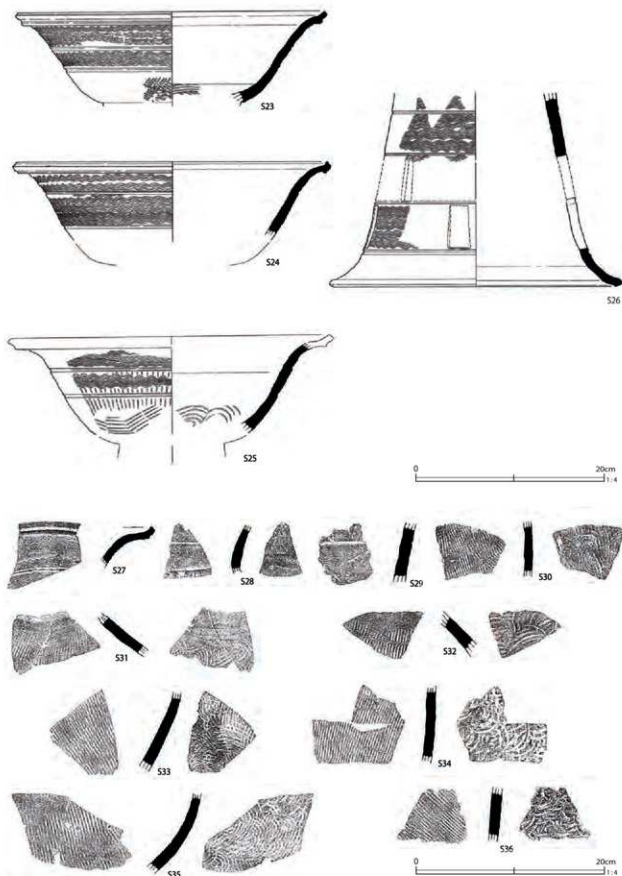
S17



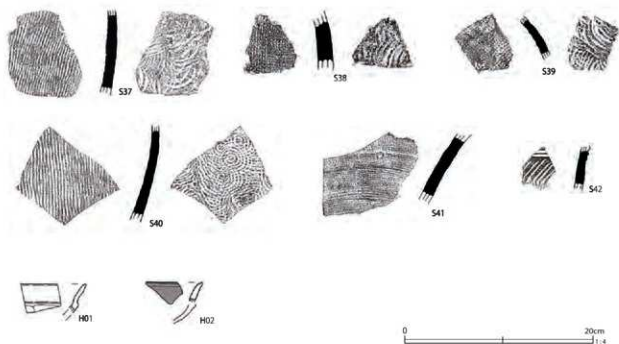
第 69 图 须惠器 (2)



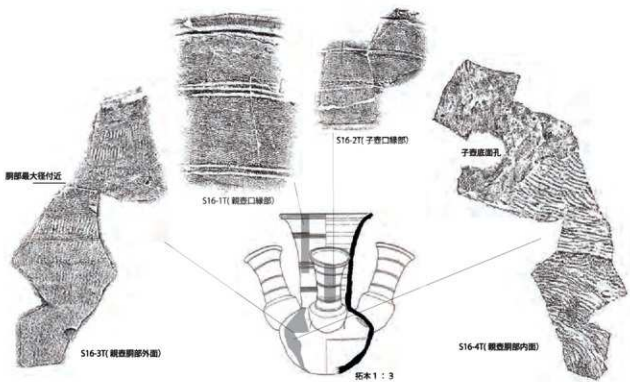
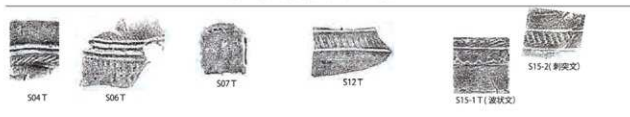
第70図 須惠器(3)



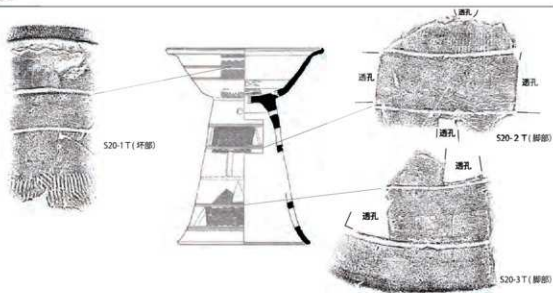
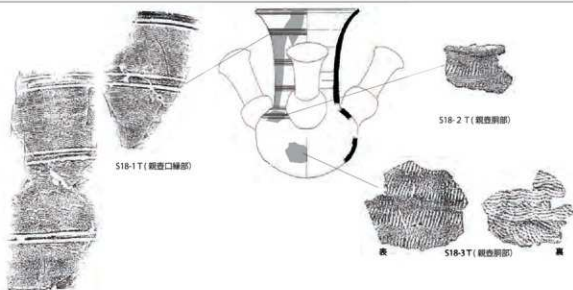
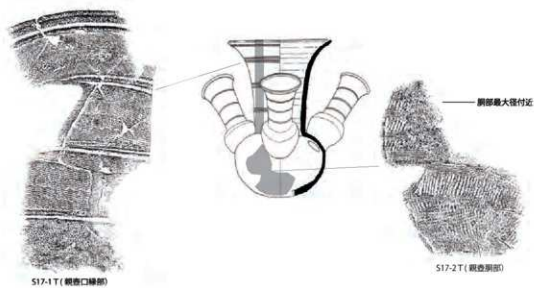
第71圖 須惠器(4)



第 72 图 须惠器 (5) · 土師器

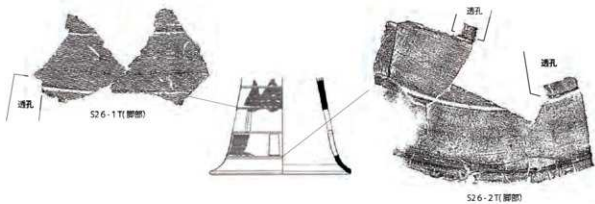
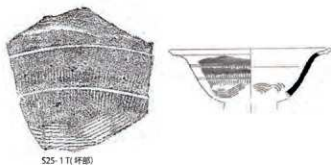
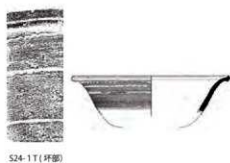
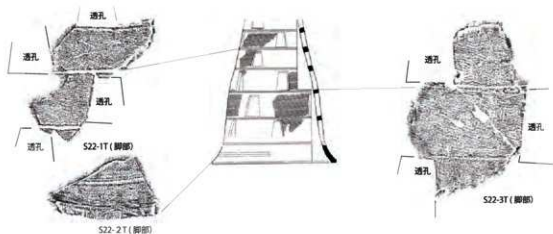


第 73 图 须惠器拓本 (1)



拓本 1 : 3

第 74 图 须惠器拓本 (2)



拓本 1 : 3

第 75 图 须惠器拓本 (3)

No.	分類I	出土区 遺構 トレンチ名 (グリッド名)	口径 器高 底径	残存率	特記事項	色調1 色調2 焼成	特徴的な 含有物
S01	坏(蓋)	I区 遺出し	[15.4] (6.0) —	60	口縁端部は内傾し、浅い沈線状となる。つまみ部欠失するが剥離痕あり。	7.5Y5/1 灰 B	白色礫多量 白色粒子多量
S02	坏(蓋)	I区 遺出し	[15.6] (3.2) —	10	稜は突出せず、口縁部との段差により作出。	5Y5/1 灰 A	白色粒子多量
S03	坏(身)	I区 遺出し	— (2.0) —	5	口縁部立ち上がりは短く内傾する。	5Y4/1 灰 A	白色粒子少量
S04	高坏	I区 遺出し	[11.2] [15.3] [9.6]	30	長脚一段三方透かし。1条の凸線下に2歯のハネアゲ様の刺突文。	5Y5/1 灰 A	白色粒子微量 胎土異なる
S05	高坏	I区 遺出し	— (2.0) [10.2]	30	脚端部はS04と明瞭に異なる。透孔の下方が遺存する。	5Y4/1 灰 A	白色粒子微量
S06	甗? (筒形器台?)	I区 遺出し	— (6.9) —	35	3条凸線直下に櫛歯刺突文を施す。円形透孔あり。	5Y5/1 灰 B	白色礫多量 白色粒子多量
S07	不明 (筒形器台?)	I区 遺出し	— (3.5) —	5	透かしの一边のみ遺存。櫛歯刺突文あり。	5Y5/1 灰 B	白色粒子多量
S08	不明 (筒形器台?)	I区 遺出し	— (2.5) —	20	透かし2単位遺存。透かし間は約71°の開きで5単位の可能性あり。	5Y5/1 灰 B	白色礫少量 白色粒子多量
S09	甗	I区 遺出し	[16.6] [2.9] —	10	口縁部・頸部波状文。断面三角の2条凸線あり。	N4/ 灰 A	白色礫多量 白色粒子多量
S10	壺	I区 遺出し	— (5.0) —	50	全面櫛描波状文。下端に僅かに胴部への屈曲残る。	N3/ 暗灰 A	白色粒子少量
S11	壺	I区 遺出し	— (3.8) —	20	凹線1条遺存。下端に僅かに胴部への屈曲残る。	7.5Y5/1 灰 B	白色大礫少量
S12	壺	I区 遺出し	— (3.9) —	15	凹線間に櫛歯刺突文あり。以下に櫛描波状文。	N5/ 灰 A	灰色礫少量
S13	提瓶	I区 遺出し	(8.6) [5.1] —	40	頸部と胴部の変換は僅かに傾く。自然釉付着。	7.5Y5/2 灰オリーブ B	S04と胎土近似
S14	提瓶	I区 遺出し・39T	— (6.0) [9.0]	25	釉により別個体の須恵器破片が貼りつく。	7.5Y5/1 灰 B	S04と胎土近似
S15	壺	I区 遺出し	— (20.4) —	15	3条凸線により上段に櫛歯刺突文、下段に櫛描波状文が施文される。器面は礫多いが、剥離も多い。	7.5Y4/3 暗オリーブ B	微細な白色粒子の み含有物少ない

No.	分類1	出土区 遺構 トレンチ名 (グリッド名)	口径 器高 底径	残存率	特記事項	色調1 色調2 焼成	特徴的な 含有物
S16	装飾付壺	I区 遺出し	[19.8] [33.8] —	50 30	親壺と3単位の子壺からなる。両者の口頭部は3条の凹線により4段構成となり1～3段目は楕圓波綫文、4段目は無文。	7.5Y5/1 灰 A	白色礫多量 白色粒子多量 黒色粒子微量
S17	装飾付壺	I区 遺出し	[21.8] [32.8] —	40 25	S16と法量、器形とも酷似する。	7.5Y5/1 灰 A	白色礫多量 白色粒子多量 黒色粒子微量
S18	装飾付壺	I区 遺出し	(22.0) —	30	S16、17より焼成がやや不良である。器形やや重み強い。	7.5Y6/1 灰 C	白色礫多量 白色粒子多量 黒色粒子微量
S19	装飾付壺 (子壺)	東側くびれ部 墳丘裾 表探	— (4.8) —	—	遺出し部と墳丘を挟んで反対側から出土。	N5/ 灰 B	白色礫多量 白色粒子多量
S20	高环形器台	I区 遺出し	[33.2] [41.6] [28.0]	20 15	坏部は凹線により3段構成。上2段に楕圓波状文。脚部は6段構成で最下段以外の各段に透孔をもつ。	10Y5/1 灰 A	白色礫多量 白色粒子多量
S21	高环形器台	I区 遺出し	— (6.0) —	25	脚部のみ。凹線により2段残存する。上段は円形透孔。下段は長方形透孔である。	7.5YR5/2 灰褐	白色粒子多量
S22	高环形器台	I区 遺出し・3TT	— (28.2) [26.6]	15	脚部のみ。凹線により7段遺存する。最下段以外の各段に透孔をもつ。	7.5Y5/1 灰 B	白色礫多量 白色粒子多量
S23	高环形器台	I区 遺出し・44T	[32.6] (10.0) —	35	坏部は凹線により3段構成。上2段に楕圓波状文が施される。3段目は平行タタキ目が残る。	7.5YR5/2 灰褐	白色礫多量 白色粒子多量
S24	高环形器台	I区 遺出し	[33.4] (8.4) —	25	坏部は凹線により3段構成。上2段に楕圓波状文が施される。3段目は平行タタキ目が残る。施される。	7.5Y5/1 灰 B	白色礫多量 白色粒子少量
S25	高环形器台	I区 44T	— (9.0) —	10	坏部は凹線により3段構成。上2段に楕圓波状文が施されるが2段目の文様は幅が狭い。2、3段目に平行タタキ目残る。	7.5Y4/1 灰 A	白色礫多量 白色粒子少量 赤色粒子少量
S26	高环形器台	I区 遺出し	— (20.4) [30.4]	15	凹線で区画された5段が遺存する。最下段を除き透孔が認められる。裾部がやや大きく広がる。	7.5Y5/1 灰 B	白色礫多量 白色粒子少量
S27	高环形器台	I区 遺出し	—	—	凹線が2条1単位となる。	2.5GY5/1 オリープ灰 A	白色礫多量 白色粒子多量
S28	壺	I区 遺出し	—	—	凹線の上位に波状文。胴部への屈曲部僅かに残存	N4/ 灰 B	白色粒子少量
S29	壺か	I区 遺出し	—	—	凹線の下上に振幅の大きい波状文。	N4/ 灰 B	白色礫多量
S30	壺	I区 遺出し	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕	N5/ 灰 B	白色粒子少量

No.	分類I	出土区 遺構 トレンチ名 (グリッド名)	口径 器高 底径	残存率	特記事項	色調1 色調2 焼成	特徴的な 含有物
S31	要	I区 遺出し	—	—	胴部上位破片。平行タタキ目の上に部分的にかき目	N5/ 灰 B	白色粒子少量 白色粒子多量
S32	要	I区 遺出し	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	5PB4/1 暗青灰 A	白色粒子少量
S33	要	I区 44T	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	7.5Y5/1 灰 B	白色粒子少量 胎土S04に近似
S34	要	I区 遺出し	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	2.5Y7/2 灰黄 C	白色粒子少量
S35	要	I区 遺出し	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	N5/ 灰 A	白色粒子少量
S36	要	I区 44T	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	2.5Y7/2 灰黄 C	白色粒子少量
S37	要	I区 39T	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	2.5Y7/2 灰黄 C	白色粒子少量
S38	要	I区 内堀覆土	—	—	外面が格子目状のタタキとなる。内面同心円痕。	7.5Y5/1 灰 B	白色粒子多量 赤色粒子少量
S39	要	Ⅲ区 22T 外堀	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	7.5Y5/1 灰 B	白色粒子少量
S40	要	Ⅱ区 12T 内堀	—	—	外面平行タタキ目、内面同心円痕。	N5/ 灰 A	白色粒子少量
S41	要	Ⅲ区 17T 表土	—	—	外面かき目。	N4/ 灰 A	白色粒子少量
S42	要	Ⅱ区 27T 内堀	—	—	2条凹線の下方に斜位凹線が施される。鉄砲山古墳に伴う可能性が高い。	N5/ 灰 A	白色粒子多量 赤色粒子少量

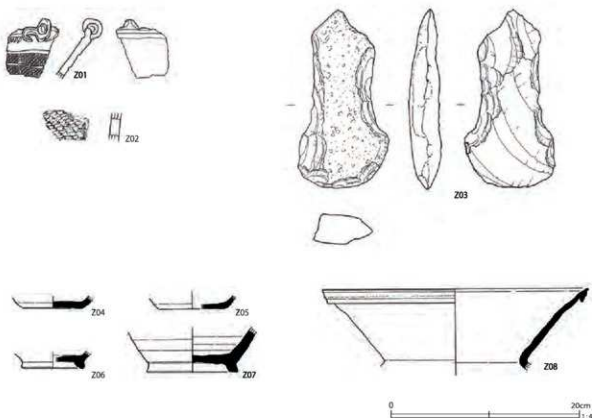
第9節 その他の時代の遺物

① 縄文時代の遺物

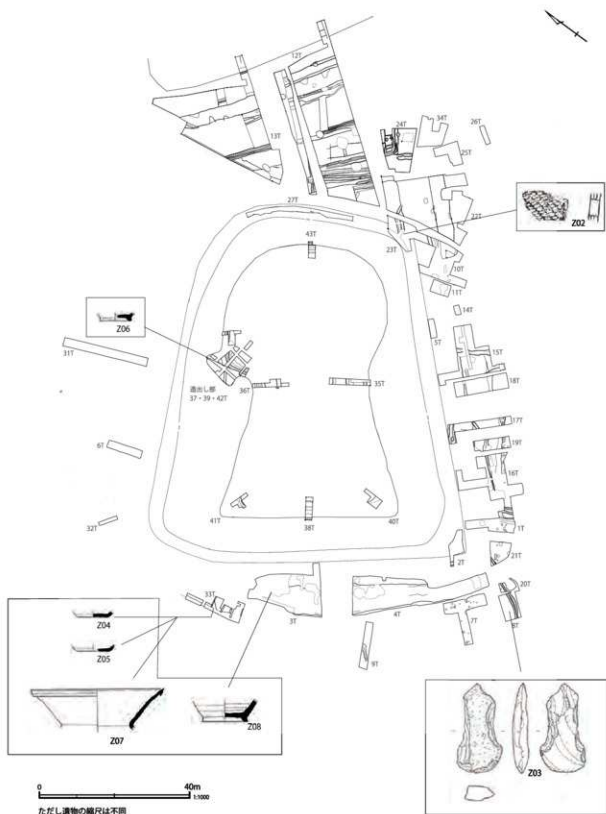
今回の奥の山古墳の調査では、奥の山古墳築造前の遺構は検出されていないが、第76図のとおり、2点の縄文土器と1点の打製石斧が検出されている。Z02はⅢ区23トレンチの内堀範囲内から出土したものである。小片のため、帰属時期は不明だが、単節RLが施文される、遺存する器壁は1.3cmの厚さである。Z01は表採資料である。口縁部の把手部はC字状を呈し、その左下も粘土帯によりC字状文がある。口唇部の1条の沈線直下には左下がりの刺突列が施される。縄文施文後に横位沈線を平行に施す。口縁部内面上位には幅広の沈線が認められる。内面は平滑にヨコミガキが施される。加曾利B1式土器と思われる。Z03は打製石斧である。Ⅳ区8トレンチから単独で出土した。黒色安山岩製で、全長13.9cm、最大幅7.0cmである。正面に自然面が多く残っている。

② 平安時代

今回の奥の山古墳の調査では、古墳外堀と重複関係にある溝跡等から平安時代の遺物が少量出土した。Z04、Z05は坏底部である。Z04はⅣ区33トレンチで検出された第35号溝の覆土中出土である。Z05は7.0cmである。いずれも底部回転糸切後無調整である。Z06は高台付坏で造出し部第1層の表土層から出土した。Z07は高台付椀である。Ⅳ区3トレンチから出土した。Z07の壺口縁部は33トレンチから出土した。これらの須恵器、はいずれも白色針状物質を有することから南比企窯跡群産と推定される。



第76図 その他の時代の遺物



第 77 図 その他の時代の遺物分布

第4章 活用事業

平成19年度から開始した奥の山古墳の発掘調査の成果は、各種の活用事業の中で広く公開するように努めてきた。主な活用事業は第12表に掲載した。

(1) 発掘調査現地説明会

3カ年の発掘調査の期間中、毎年1回実施した。1、2回目は外堀の新発見を中心に説明を行い、3回目は墳丘の調査成果を主に説明した。3回の参加人数は計1594名であった。特に平成21年度は、第3章第1節に記載した、地中レーダー探査実験の結果と合わせて新聞に大きく取り上げられたこともあり、817名の参加者があった。

通常、奥の山古墳は、史跡保護及び管理上の観点から、関係者以外の墳丘の立ち入りを禁じているが、この説明会では、造出し部の調査区や墳丘中段から検出された埴輪等を公開するために、初めて墳丘上へ一般見学者を案内した。墳丘保護と安全管理のため、墳丘に立ち入る人数を絞って見学会を実施したため、長時間の見学会となった。

なお、これ以外にも、例えば平成21年度の遺跡発掘調査報告会当日や、関係機関の視察等の際、希望があれば、極力発掘現場の説明を行った。

第12表 活用事業一覧

No.	事業名称等	備考	実施期間	参加人数
1	発掘調査現地説明会	午前・午後各1回	平成19年12月8日	387人
2	最新出土品展に出品	埴輪展示	平成20年7月19日～9月28日	19682人
3	遺跡発掘調査報告会		平成20年7月27日	135人
4	発掘調査現地説明会	午前・午後各1回	平成20年10月25日	390人
5	最新出土品展に出品	埴輪展示	平成21年7月4日～8月16日	15037人
6	遺跡発掘調査報告会		平成21年7月26日	120人
7	発掘調査現地説明会	午前・午後各1回	平成21年10月12日	817人
8	遺跡発掘調査報告会		平成22年7月25日	109人
9	最新出土品展に出品	埴輪、須恵器展示	平成22年7月17日～8月31日	9577人
10	最新出土品展に出品	装飾須恵器展示	平成23年7月16日～	13124人
11	講座「奥の山古墳調査でわかったこと」	博物館講座	平成24年9月8日	68人

※No.2、5、9、10は会期中の埼玉県立さきたま史跡の博物館の入館者数である。

※No.3、6、8は10遺跡ほどの最新の発掘調査成果を公表するもの。

最新出土品展、遺跡発掘調査報告会とも埼玉考古学会、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団と共催

(2) 遺跡発掘調査報告会

埼玉県内の最新の発掘調査成果を報告する事業であり、例年7月後半に埼玉考古学会、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団とさきたま史跡の博物館の共催で開催されている。

埼玉県を代表する古墳群でもあり、常に調査成果は注目されていることから、奥の山古墳については調査年度の翌年度に連続3回報告する機会に恵まれた。調査年度ごとの調査目的、成果を写真とレジュメを用いて発表した。

(3) 展示

発掘調査機関が博物館であるメリットを生かし、出土遺物の主だったものは、毎年夏季に開催される最新出土品展「地中からのメッセージ」（主催・埼玉県立さきたま史跡の博物館・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉考古学会）に展示した。平成20～22年度には形象埴輪、円筒埴輪を展示した。平成23年度には裝飾付須恵器と高坏形器台の復元作業が完了したため、これらを展示した。

(4) その他

最新の発掘調査の成果を公表するため、博物館主催の講座を実施した。第91回は奥の山古墳の発掘調査の成果を簡潔にまとめたダイジェスト版であるが、これら資料と発掘現場の写真等を用いて解説を行った。

また、埼玉県の施策である「県政出前講座」に史跡埼玉古墳群関係の講座がエントリーしている。年間3回程度、公民館等に招かれて、発掘調査成果等の講演を行った。

平成19年度からは、埼玉県内自治体の文化財担当者を対象に、史跡整備にかかる課題や技術の共有化を図るため、さきたま史跡の博物館主催で、「埼玉県史跡整備研修会」を開催している。この中で、奥の山古墳の発掘調査、整備工事について、発表を行い、現地視察を行った。



第90図 活用事業参考資料

地中レーダー探査

古墳内部を科学的に解明するため、東北大学と共同で実施した。その結果、長さ約2m、幅50cm、高さ50cmの箱状の物体の反応が2カ所で発見された。その形状とサイズから、いずれも箱式石棺である可能性が高い。



鉄砲山との関係

二つの古墳の外堀は、極めて接近している。出土遺物からは奥の山が先に造られたと想定されるが、奥の山の堀は鉄砲山にぶつからないように狭く、また、鉄砲山の堀・中堀は幅を狭くし、同じくぶつからないようにしている。



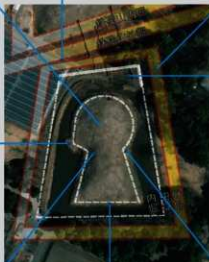
外堀の新発見

埼玉古墳群の大きな特徴は、前方後円墳の堀が二重であることだが、奥の山だけは扇形の一重の堀であると考えられていた。しかし調査の結果、他の古墳と同様、外堀が巡る方形の二重堀であることが判明した。この発見により、堀まで含めた墓域の総面積は2倍の約1万㎡となった。



造出し部の調査

調査の結果、後世の改変を受けており、遺存部分の形態は現状と異なることが判明。なお、江戸時代以降の遺物とともに多量の埴輪、須恵器が出土しており、造出し部があった可能性は高いが、本来の形態を示す証拠は発見できなかった。



内堀コーナー発見

外堀の発見とともに、埋没した状況の内堀コーナー部が検出された。部分的に堀底を確認したところ、古墳時代の地面から約1.3m掘ってあることが判明した。墳丘の土量と堀の土量の関係を厳密に計算する上で、欠かせないデータが得られた。



墳丘のテラス検出

墳丘中段でゆるやかなテラスが検出され、多量の埴輪とともに2点の円筒埴輪がならんで発見された。また、内堀と墳丘盛土の間に幅70cm程度の古墳時代の地面を利用したテラスが検出された。



墳丘の大きさ

墳丘の長さでは約70mと考えられてきたが、調査の結果、約66mであることが判明した。また墳丘くびれ部の幅は約7m狭いことが判明し、ずんぐりした形態の墳丘ではなく、他の古墳と同様シャープなくびれを有することがわかった。



古墳時代の火山灰

墳丘の調査では、古墳を造る段階の地面が検出されているが、現在の地表よりも約70cm高いことが判明した。また墳丘直下の土壌を分析した結果、6世紀初頭に群馬県の榛名山が噴出した際に降下した火山灰が検出された。



第5章 発掘調査のまとめ

第1節 前回調査・整備の問題点

(1) 昭和42年度の調査成果と問題点

「さきたま風土記の丘整備事業」に伴う発掘調査は、第1章第4節のとおり、非常に短期の調査日程であった。現在の整備に伴う発掘調査の方法・日程とは比較できないほどの強行軍であったことは明らかである。また、同時期に調査された二子山古墳のトレンチ数と比較しても明らかに少なく、その結果、外堀は検出されなかった。

この問題の根本的な原因については、整備事業の工程や予算の問題等が推察されるが、それらをここで論じる準備はない。本節では、今回の調査で判明したことを踏まえ、昭和42年度調査の成果と問題点について、まとめてみたい。

第6図のとおり、今回の調査成果と昭和42年度のトレンチ位置を確認したところ、第1、3トレンチの設定場所は、奥の山古墳の外堀の遺存状況は極めて悪いことが判明し、前回調査で検出できなかった理由が明確となった。また、第2トレンチは外堀範囲まで到達していない。仮に第2トレンチを西へ10m延伸させていれば外堀が検出された可能性がある。ただし、第1、3トレンチの調査成果により外堀はないと判断した可能性がある。

奥の山古墳の内堀の底面レベルについては、前回の調査では標高が記されていないため、正確な数値は不明であるが、第5図のとおり、断面図に記載された鉄砲山古墳の内・外堀や奥の山古墳墳裾の根切り溝の位置から、概ね標高17.3m前後で水平な底面が存在していたと予想される。

また、第1章第4節で記載したとおり、当時の平板測量原因の書き込みを精査したところ、後円部側第1トレンチ内における内堀のプランについては、当時の調査担当者は正しく認識していたことが判明した(註1)。調査成果よりも、園路計画が優先された結果と推測される。このことにより、同時期に調査、整備された二子山古墳の円弧を描く内堀コーナー部も同様の経緯の可能性がある。その結果、今回発見された内堀コーナー部が、壊されることなく遺存していたことは不幸中の幸いとしか言いようがない。

(2) 昭和43年度の整備の問題点について

第92図は昭和10年頃から、今回の整備事業完成までの77年間の奥の山古墳の変遷を示すものである。また、写真図版1～5により、前回の整備前後の状況がよくわかる。

45年前の奥の山古墳の整備に関する設計図面や工事中の写真等の資料は残念ながら残っていない。当時、発掘調査は教育局、整備工事は公園担当部局が担っていた(註2)。したがって、発掘調査関係の誌、図面類は、現在も県立さきたま史跡の博物館に保管されているが、公園担当部局が実施した工事記録類は、担当部局の統廃合や年数の経過等で廃棄されたと思われる。経緯に詳しい複数の方に聞き取りを行ったが、内堀の掘削深度等の数値や造出しの形態の根拠については不明であった(註3)。なお、下記で述べる前回整備の掘削深度は、平成20年度に実施した測量(写真図版6参照)によって判明した数値を用いた。

① 内堀の掘削深度

昭和42年度のトレンチ調査により検出された内堀深度は、標高が記載されておらず、当時の地表面から87cmの深度という記述のみである。しかし、前述したとおり、概ね標高17.3mの水平面として把握したと想像される。それに対し、前回の整備工事により、内堀は断面形態を逆カマボコ状に掘削され、最深部の標高は16.3mであった。したがって、本来の堀底を深さ1mも掘り抜いていた。これは、同じく復元された二子山古墳の内堀と同様（註4）、地下水を利用して水堀とするためであったと推察される。

② 内堀の形態

前述したとおり、当時の平板測量図を見ると、調査で確認した内堀プランを無視して「復原」している。あくまで推測だが、第92図2、3のとおり、鉄砲山と奥の山の間にある道路について、園路に転用するためには、本来の内堀プランでは迂回せざるを得ないための方策だった可能性がある。もしくは二子山古墳と同様、前方後円墳の周堀のコーナーの「復原」デザインは、緩やかな円弧を描く方針だったかもしれない。この結果、一重の堀はコーナーの円い盾形に復元された。

③ 「造出し」の造成

第92図の2と3から明らかなように、撥形の大きな「造出し」を造成している。このことについては二子山古墳等の整備とともに整備直後から問題となっていた（註5）。1本のトレンチ調査も行っていないことから、この形態に決定した明確な根拠はないと思われる。以下の【】はあくまで推察である。

【第92図2のとおり、整備前から後円部には小さな三角形の突出が認められた。この周辺の内堀の掘削時に多量の遺物が出土した。このことにより、この周辺の掘削を中止し、三角形の突出を取り囲むように、大形の「造出し」を造成した。当時、埼玉古墳群の中で墳丘造出しの形態が判明していたのは昭和42年度に調査した二子山古墳のくびれ部造出しのみであり（註6）、類例がない。したがって、他県の前方後円墳の造出しの形態等を参考にして、とりあえず大きな造出し形を残して、内堀の掘削工事を継続した。】

今回の調査では「造出し」の全面調査を実施したが、残念ながら本来の形態等については解明することができなかった。「造出し」を取り囲む内堀の堀底が掘り抜かれていたためである。なお、第18、19図のとおり、「造出し」先端部の地山ルーム面は、標高17.3～17.5mである。この数値は内堀の堀底レベルとほぼ同じであることから、前回整備で掘削を免れた内堀底面の可能性もある。

今回の調査当初は、盛土工事により「造出し」を造成した可能性も視野に入れて調査を行ったが、浅間Aの分布や層序の観察から、重機による盛土ではないことが確認された。

今回の調査で判明したことは、本来の造出しの遺存していた形態は、第92図の2のとおり、整備前にも認められた小さな三角形の突出部のみであった。この突出部は根切り溝の区画により形作られたものであり、本来の形態を示すものではないことが判明した。

④ 前方部コーナーの「復原」

第92図2と3からは、前方部コーナーの変化が認められる。前回整備前は円みを帯びていたが、整備後はかなりシャープな形態になっている。また、整備後の等高線を確認すると、両コーナ

一部は標高18.5m前後の緩斜面である。古墳時代旧表土標高18.8mよりも低い位置にある。

このコーナー部について調査した結果、前回の整備の際に盛土が行われたことが判明した。写真図版10、12のとおり、人力ではなく重機による盛土と考えられる。

今回の発掘調査の結果、本来のコーナー部墳丘盛土の遺存範囲は第92図2、すなわち前回整備前の形態と一致した。

⑤高木植栽

写真図版1～4のとおり、昭和42年度までは奥の山古墳周辺は一面の畑地であった。植栽の時期は不明であるが、前回の整備後に奥の山古墳周辺はシラカシ、ソメイヨシノ、マテバシイ等、大規模な植栽が行われた（註7）。その結果、大木となり根が大きく張り出した。今回の調査で発見された外堀に、甚大な影響があることが判明した。

⑥まとめ

以上、前回の調査・整備の問題を個別に挙げたが、それらの原因は、「調査不足」、「公園担当部局との協議不足」、「周堀保存の視点の欠如」の3点に集約されよう。

（註1）下記の前回報告書には、この記載がない。

埼玉県教育委員会1988『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第7集

（註2）今回報告の奥の山古墳整備事業からは、整備工事も教育局直営で実施している。

（註3）聞き取り調査によると、造出し周辺の内堀の掘削工事中、多量の遺物が出土したことを伝聞された方がいた。上記報告書では「（略）平箱三箱ほどの量である。（略）周堀の整備の過程で、墳丘の北側から西側の周堀で採集されたものである。」とあることから、前回報告書に掲載された遺物の大半は造出し周辺から発見されたものと推察される。

（註4）昭和43年度の二子山古墳の内堀の掘削工事の際は、地点によっては本来の堀底を2mも掘り抜いている。また、ほぼ中央を断面V字形に掘削しており、地下水の湧水を狙った深度、掘削方法であると思われる。平成24年度から二子山古墳の整備工事に着手しており、今後、正報告予定である。

（註5）渡辺定幸1978「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐる」『考古学研究』

第25巻第3号

（註6）埼玉古墳群の中で、造出しの位置、形態が最も近似しているのは稲荷山古墳と將軍山古墳である。ただし、昭和43年度の稲荷山古墳の調査では、造出し部もトレンチ調査が実施されたが、形態は把握されていない。前回整備前の奥の山古墳同様、小さな三角形の突出が認識されていたのみであり、全容が判明したのは平成9年度の調査である。將軍山古墳も同様で、判明したのは平成4、5年度の調査である。

（註7）聞き取り調査では、当初は稲荷山古墳が立地する古墳公園北側に大規模な植栽をする計画であったが、古墳の保護、眺望への影響を懸念して、公園担当部局と協議した結果、奥の山、鉄砲山古墳周辺に植栽場所が変更になったと言う。

第2節 墳丘・周堀について

(1) 発掘調査で判明したこと

今回の発掘調査で判明したことをまとめると下記のとおりである。

- 埼玉古墳群の前方後円墳の中で、唯一、一重の堀を有するとされてきたが、二重堀である。
 - 内堀の形態はいわゆる盾形を呈すると考えられてきたが、長方形（台形）である。
 - 内堀の堀底面の標高は概ね17.2～17.4mの範囲で収まる。
 - 隣接する鉄砲山古墳の外堀とは、厳密な重複関係は把握できなかったが、古墳時代の地面の高さを考慮すると、重複していた可能性が極めて高い。
 - 墳丘の調査により、造出しの形態は、前回整備で作出されたことが判明した。
 - 前方部の2つのコーナーも前回整備で作出されたことが判明した。
 - 全長70mと公表されてきたが、遺存する墳丘全長は66.4mである。
 - くびれ部は、現状よりも約7mも幅狭となった。
 - 墳丘には旧表土面からなる、幅80cmほどのテラスが存在する。
 - 墳丘中段のテラスには埴輪列が存在する。
 - テフラ分析により、FA降下後に墳丘が築造されたこと。また内堀の埋没途中で浅間Bが降下したこと。
 - 墳丘盛土直下の旧表土の標高が概ね18.8mである。
 - 地中レーダー探査によって、後円部に箱式石棺の可能性のある物体が、上下に2箇所ある可能性があること。
- 等が挙げられる。

(2) 墳丘形態について

今回の発掘調査においては、関係機関との協議の結果、墳丘調査は最低限に留める方針となった。調査目的は、造出し部の形態と墳丘規模の把握である。したがって、墳丘形態等の詳細を論じるにはデータ不足である。ただし、今後の研究・古墳保存に資することを目的として、推定復元を試みた。

第93図は、調査で得られた情報から作図した墳丘推定復元図である。ただし造出し部については推定する根拠がないため、遺存部のラインである。古墳主軸方位はN-127°-W、主軸長は66.4m、後円部径38.4m、くびれ部幅18.8m、前方部幅43.2mである。くびれ部で前方部と後円部を分割した場合の前方部長さ32.3m、後円部長さ34.1mである。古墳時代旧表土標高18.8mから計測すると、後円部の高さは5.6m、前方部高さは6.0mとなる。平面形態で現況と大きく異なる箇所は、前方部、後円部とも東側が一回り小さくなる点である。その根拠は、35トレンチの調査成果により墳丘（内堀）法尻が約5m内側であることと、現況では後円部東側の裾部が標高18.5m前後の緩やかな緩斜面となっており、古墳時代の旧表土標高より下位に位置すること、さらには推定主軸との相関関係から導き出したものである。この推定が正しければ、はみ出した部分には良好な内堀底面と内堀覆土、さらには流れ込んだ埴輪等の遺物が包含されていることを明記しておく。

後円部には、39、44トレンチ及び造出し部の調査により、三角形に張り出す墳裾ラインが確認された。このプランは後世の根切り溝によって区画されていることから、本来の墳裾ではないとしても、約3m突出すること、須恵器、形象埴輪の出土量から、造出しの遺存部と推定される。

墳裾（内堀）法面と墳丘盛土の間には、古墳時代旧表土が露出した幅約0.8mのテラス（緩斜面）が検出された。35、38トレンチが最も明瞭であった。他のトレンチでも同様に、旧表土露出部の傾斜は弱いことから、墳裾全体に及ぶ可能性が高い。

36トレンチ、35トレンチからは中段テラスが検出され、前者からは円筒埴輪2個体が検出されたことから、埴輪列を有するテラスであることが判明した。古墳主軸からテラスへの距離は、いずれも6.6m程度である。現況観察からは明瞭な中段テラスは認められないことから、現況等高線の標高21m付近に推定テラス面を作図した。第93図の墳頂部の平坦範囲は、現況等高線から推定した。

（3）内堀について

内堀の大半は、前回の整備により消滅したが、今回の調査で、遺存した内堀のデータを得ることができた。東側コーナー部は概ね直角となるが、鉄砲山との間の内堀は、墳丘主軸と約80°の角度をもって交差する。内堀底面の最大深度は、墳裾の35トレンチで標高17.2mであり、それ以外は、概ね標高17.3～17.5mであった。したがって、古墳時代の旧表土上面18.8mから約1.4mの深度を有していたことが判明した。

（4）外堀について

外堀の平面形態については、調査が及ばなかった西側も含め、不明瞭な部分が多い。北東、南東コーナー部、10トレンチと15トレンチの間は、精査に努めたが検出することができなかった。単に深度が浅かったため遺存しなかったのか、途切れるのかは不明と言わざるを得ない。なお、復原整備に際しては、全周する形態を採用した。

南西側の外堀プランは、4トレンチ東端で幅3m、同西端で幅8mと2倍以上の開きがある。また、外堀内側ラインは、墳丘主軸ラインと直行するが、外側ラインは、やや開いている状況である。ただし、Ⅲ区においても最小幅3.6m、最大幅7.2mと開きがあることと、外堀の法面角度は、外側の勾配が緩いことから、確認面標高（遺存状況）に起因したプランの可能性も高い。

鉄砲山古墳の外堀との重複関係については、第2章第2節のとおり、後世に開削された8、9号溝によって不明であったが、古墳時代の旧地表面を想定すると、堀の間に間仕切り状の地山があったとは想定しづらい。第27図のとおり、13トレンチにおける奥の山古墳の外堀はほぼ標高17.5mで平坦である。かたや鉄砲山古墳の外堀は、奥の山側の4m程は標高17.5mの平坦面が続き、そこから二段堀風に標高16.9mの最深部へ落ち込む断面形態である。したがって、重複関係を復原すると、幅14mの一体となった堀底の中に、比高差60cmほどの、もう一段低い堀が巡っていた状況と推定される。奥の山と鉄砲山古墳の間の周堀は、鉄砲山の内、外堀とも墳丘主軸とほぼ直交する。対して奥の山は、両堀とも直交せず、鉄砲山の外堀を避けている角度に配置される。出土遺物からは、奥の山古墳が古いことはほぼ確実である。したがって、奥の山古墳の築造時には鉄砲山古墳の兆域が決まっていた可能性が高い（註1）。

中堤については、現地表が後世の耕作、公園造成等により改変を受けているため、盛土の有無や

埴輪の存在等は不明である。鉄砲山側の12トレンチで外、内堀間が7.4m、22トレンチで8mであることのみが判明した。

(5) 埴丘盛土等の土量計算について

3Dレーザー測量を実施したことにより、10cm刻みでコンタ図を製作した。これにより、正確な横断面図が作成できたことにより、埴丘盛土の土量を試算した(註2)。

計算条件として、第94図のとおり、古墳時代旧表土上面の標高18.7~18.8m以上を埴丘盛土とみなした。計測方法は約5m刻みの横断面図から平均横断面積を計測し、それに距離を乗じた。その結果、埴丘盛土は5946.7m³であった。

内堀の面積は、縮尺200分の1の測量図上で計測した。計測条件として、埴丘側は標高18.7m以下を内堀面積とみなした。外側は今回検出されたコーナー一部を除くと推定ラインである。計測の結果、内堀上端面積は3091.4m²であった。内堀深度を標高17.4mとすると古墳時代表土から1.4mの深度であることから4327.96m³である。次に埴丘側、中堤側の法面部を差し引く。両法面とも勾配を45°と仮定すると、両法面総延長512m×1.4m×1.4m÷2=501.76m³という数値となる。したがって内堀掘削で出た土量は3826.2m³となる。

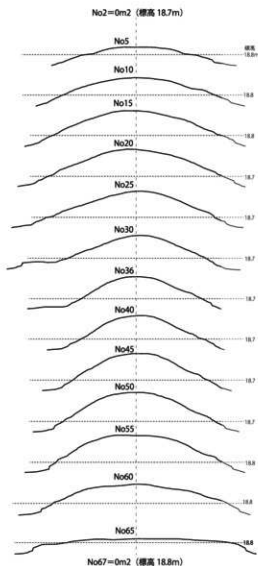
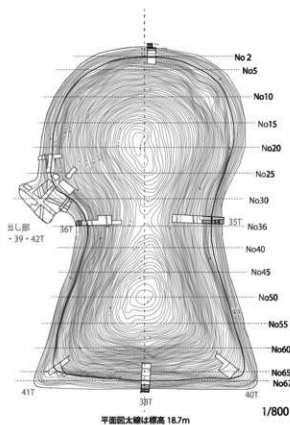
外堀は西側の状況がまったくわからないため、埴丘主軸の東側のみ計測した。幅は、各辺で最も広い地点を延伸させて推定ラインを作成した。計測の結果、外堀上端面積は1219.8m²である。外堀深度を標高17.5mとすると1.3mの掘削深度となり、1585.74m³となる。外堀は法面の勾配が小さい箇所が多いことから35°に設定する。両法面の総延長401m×1.3m×1.9m÷2=495.235m³となる。したがって外堀半分の掘削土量は約1090.5m³、単純に2倍して外堀全体の掘削土量は2181m³となり、内、外堀の総土量は6007.2m³となる。埴丘盛土との差は計算上60.5m³、1%である。締固め盛土と、地山掘削の間の土量変化の関係(掘削土量より盛土量は増える)からは、埴丘盛土が少ないと思われるが、35トレンチの状況からは、内堀内へ崩落した埴丘盛土も相当量あったと推測され、概ね整合すると考えられる。

推測を重ねた試算であるが、奥の山古墳は内堀、外堀の掘削土、計6千m³のみで埴丘盛土を行ったと推測される。外堀の円筒埴輪出土状況からは、中堤、あるいは外堤に埴輪を樹立したことは間違いないが、土量計算の結果、中堤あるいは外堤全体を対象とした、大規模な盛土は行われなかった可能性が高い。

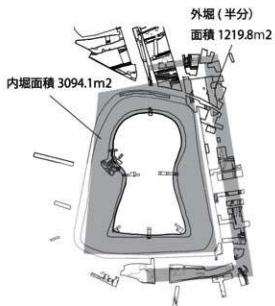
(註1) 鉄砲山古墳の周堀については平成22年度以降、調査を行っており、兆域が判明した際に再検討する必要がある。

(註2) 埼玉古墳群の各古墳の体積計算は、下記の文献が初出である。調査によるデータ蓄積が少ない中での計測であり、今回の試算と大きく異なる数値である。ただし、結論としては、丸墓山古墳と奥の山古墳のみ埴丘盛土よりも周堀容積が圧倒的に少ないことが指摘されている。外堀が認識されていない中、この研究成果は、埼玉古墳群の研究史上、非常に重要と言える。

増田逸郎1991「埼玉政権の法的分析」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団



測点	距離 (m)	面積 (㎡)	平均面積 (㎡)	立積 (㎡)
NO. 2		0		
	3		13.1	39.3
NO. 5	5	26.2	50.3	251.5
NO. 10	5	74.3	96.2	481
NO. 15	5	118.1	126.0	630
NO. 20	5	133.9	126.6	633
NO. 25	5	119.3	101.3	506.5
NO. 30	6	83.2	79.2	475.2
NO. 36	4	75.2	77.3	309.2
NO. 40	5	79.4	91.2	456
NO. 45	5	103.0	113.9	569.5
NO. 50	5	124.7	131.2	656
NO. 55	5	137.6	118.1	590.5
NO. 60	5	98.5	59.5	297.5
NO. 65	5	20.5	10.3	51.5
NO. 67	2	0		0
		0	合計	5946.7



第 94 図 填丘盛土等の土量計算

第3節 出土遺物について

(1) 円筒埴輪

近年の円筒埴輪研究では、城倉正祥氏による生出土塚埴輪窯跡等出土資料のハケメの分析(註1、2)により、新たな研究展開を迎えている。従来の研究手法は、器形の属性による分類、あるいはそれら属性と胎土、色調による産地推定が主であったのに対し、工具の一致、同一工人、窯の新旧関係の特定から、供給先の古墳との関係等、より詳細に分析されている。これらの研究により奥の山古墳の赤褐色系の埴輪は生出土塚産DE6C類型とされ、4条5段構成に同定されている。

また、本報告でB類とした(註3)橙色系の円筒埴輪についても、城倉氏、伝田郁夫氏、江原昌俊氏らによって研究が深化している(註4)。ここでは、ハケメ同定について追証あるいは反証する用意は全くないが、いくつかの属性から、今回出土した円筒埴輪の特徴を抽出したい。

①凸帯の扁平率について(A・B類)

第2章のとおり、凸帯数や器形の全容が判明した資料は皆無なため、抽出できた数少ない属性をもとに検討する。

埼玉古墳群の円筒埴輪は古いほど凸帯が突出し、新しいほど扁平に近づくことは既に指摘されている。奥の山古墳についても、既にデータが公表されているが(註5)、分析に用いた個体数が少ないため、今回の出土遺物を元に第95図を示しておく。前回公表データと比較すると、かなり数値が異なる。凸帯の扁平率のみで新旧判断するものではないが、例えば隣接する鉄砲山古墳出土遺物と比較すると、明らかに異なる。第54図E53は、鉄砲山古墳に帰属するA類資料であるが、凸帯扁平率は0.21であり、奥の山古墳出土のもの半以下の数値となる。なお、A類、B類の凸帯の比較においては、数値以上に、整形方法が異なる。すなわち、凸帯が波打ち、ナデツケが雑で接合痕を明瞭に残すA類に対し、B類は器形に水平かつ、稜をしっかりと作出し、接合痕を全く残さずナデツケを行う。なお、奥の山古墳出土のB類(橙色)円筒埴輪(E26)については、東松山市諏訪山7号例に近似する旨、御教示を頂いた(註6)。

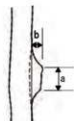
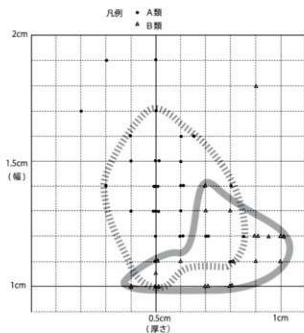
②低位置凸帯(A類)

A類においては、1段目の凸帯が低位置にくるものが主体を占める。最も低い第49図E16が7.1cm、他にも10cm以内のものが多く認められた。ただし中段テラス上の原位置にあった第48図E08は約17cmと高く、傾向を異にする。埼玉古墳群中で、第1段が低い円筒埴輪は、他に天祥寺裏古墳に多く認められる。今後、埼玉古墳群以外で、生出土塚産の低位置凸帯が認められた場合、交差年代上、重要な属性となろう。

③A、B類の出土傾向について

すべての破片を精査し、数値化することはできなかったが、A、B類の出土傾向に触れておきたい。本報告では可能な限り小片でも図化に努めたが、その資料化できた普通円筒埴輪は、墳丘上及び埴塚のI区ではA類27点、B類5点と圧倒的にA類が多い。対して外堀においては、A類12点、B類13点とほぼ同数となる。II、III区の内堀の遺存部においてはA類7点、B類3点であった。

ある程度復元できたB類のE20、26とも、いずれも外堀から検出された。A類と比較すると、明



$b/a = \text{凸帯扁平率}$

A類 (赤褐色)	B類 (橙色)
0.41	0.67

A類 30点のうち、最大・最少等3点を除いた平均値
B類 19点のうち、最大・最少等2点を除いた平均値

第95図 普通円筒埴輪の凸帯扁平率

らかに大型である。全体像は不明と言わざるを得ないが、色調、大きさともに明らかに異なるA、B類を古墳に設置する際には、一定の規範があった可能性も視野に入れておく必要がある。

④編年の位置付け

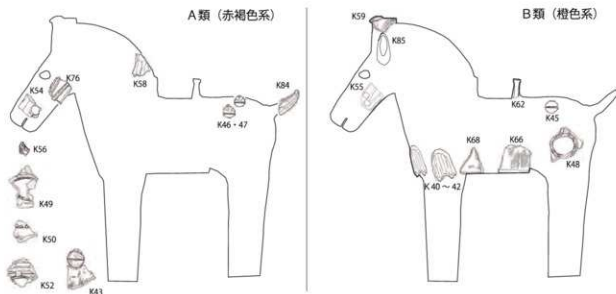
埼玉古墳群の円筒埴輪の編年案はいくつか発表されている。ここでは、岡本氏(註5)と城倉氏(註1、2)の編年案を掲載する。岡本氏は主に凸帯扁平率からI群—稲荷山・二子山・丸墓山・小円墳群、II群—愛宕山・瓦塚・奥の山、III群—鉄砲山・將軍山に分類し、これが年代的差異を示すとする。城倉氏は、埴輪生産の3系統の整理を経て、I～IV期の編年を行っている。その中で奥の山はII期の後半、II期中頃の瓦塚とIII期前半の愛宕山の間に位置づけている。さらには「天祥寺裏A群TS1類・TS2類からのスムーズな変遷が負える資料である。生出塚編年のII期前半、二子山・瓦塚古墳の直後に位置づけられる埴輪群である。」(註1・2)としている。

後述する須志器からも、奥の山古墳の円筒埴輪が瓦塚古墳の直後に位置することに矛盾はない。

(2) 形象埴輪

第2章のとおり、奥の山古墳の発掘調査においては、主に造出し部を中心に多くの形象埴輪が出土した。残念ながらいずれも小片であり、完全に復元できたものはなかった。しかし、複数の人物埴輪、複数の馬形埴輪に加えて、家、盾、騎形埴輪等が出土していることは、奥の山古墳の埴輪祭式の一部を示していると言えよう。

図化成し得た形象埴輪計105点の出土位置の内訳は、I区造出し部周辺が85、その他I区12、内堀2、外堀4、表採2点である。次に円筒埴輪と同様、赤褐色系のA類と橙色系のB類に分類するとA類42点、B類55点(9点は不明)、と概ね拮抗する。種別でみると、人物埴輪、馬形埴輪、盾形埴輪はA、B類ともにあり、家形埴輪、騎形埴輪はB類となる。既報告資料も同様の傾向で、人物埴輪にA、B類が存在するものの、器材埴輪はB類が多い傾向にある。



第96図 馬形埴輪の類型模式図

第96図は、造出し周辺から出土した馬形埴輪の破片をA、Bに分類し、推定される位置に貼り付けたものである。A類では素環鏡板片とf字形鏡板片があるため、2個体以上はあると思われる。また、突起付鈴はすべてA類である。B類については、馬鐙と楕円形杏葉が存在する。また既報告の騎馬像の破片もB類となるため、2個体以上の可能性が高い。

今後、個別の馬装表現について検討を加える必要があるが、ここでは、奥の山古墳の馬形埴輪の編年観について、先行研究を参考にして位置付けたい。A類の馬形埴輪のうち、古い様相を示すものとして、縁金と鈺表現のあるf字形鏡板（K56）が挙げられる。対して、新しい様相を示すものとして突起付鈴（K46・47）が挙げられる。埼玉古墳群内で両者が認められるのは天祥寺裏古墳例がある。f字形鏡板の表現は、他に二子山、瓦塚古墳でも検出されている。

B類について、桜山窯跡出土例（註7）と対比させてみると、素環鏡板、半裁で端部波状となる馬鐙、縁金上に鈺表現を施した楕円形杏葉等、胎土、色調以外にも類似点が多い。

既報告の奥の山古墳出土の馬形埴輪については、井上裕一氏によってIV a期（6世紀Ⅱ四半期前半・MT15型式新相～TK10型式古相）に比定されている（註8）。円筒埴輪編年（註1・2）における瓦塚古墳に後続する位置づけや、今回出土した須恵器の編年観とも矛盾はない。ただし、天祥寺裏古墳との前後関係が今後の課題となる。

（3）須恵器

造出しの調査により多種多様な須恵器が出土した。第2章のとおり、小片となって散在しており、出土状況からは、その配置等について論じることはできない。また、多様な須恵器の器種の中には、器種不明なもの、類例が極めて乏しいものもある。あるいは筆者の誤認もあるかも知れない。ここでは、概要、問題点のまとめに留め、今後、検討を継続していきたい。

①産地について

第96図のとおり、須恵器は胎土・含有物で、大きく3大別される。多数を占めるのは白色礫

(長石か・未分析)を多量に含有する一群である。この一群に施される櫛描波状文は、振幅が小さく、凹線文等により多段化される特徴がある。現状で産地を特定することはできないが、埼玉県を含めた北関東産の可能性が高い。今後の研究の深化と類例増加によって判明させていきたい。また、高坏と埴瓶については、東海東部産、壺が東海西部産と想定される(註9)。

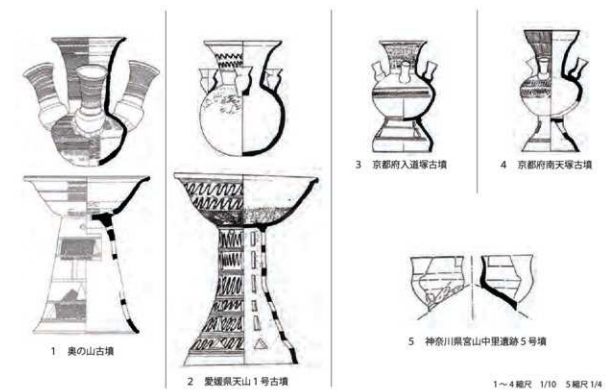
②特殊な須恵器について

奥の山古墳から出土した装飾付須恵器の特徴は、脚が付かない、親壺、子壺とも甕の器形に近い、親壺と子壺の文様は相同である、小壺の底部がない、等があげられる。

脚がない子持壺は極めて僅少で、管見に触れる限り(註10)、98図2等、数例のみしか発見され



第97図 須恵器の推定産地(縮尺不同)



第98図 装飾付須恵器の類例

ていない。また親、子壺とも甕の器形を有する個体は、98図3、4等いくつか類例があるが、その多くはTK209型式段階のものが主体を占める。関東地方出土の子持壺については、管見に触れる限り、神奈川県宮山中里古墳群5号墳（前方後円墳・全長約30m）から出土した子壺の破片1点のみである（註11）。また、S07、08のように小形でスリットが入る破片が存在する。筒形器台の可能性はあるが、筒部の破片がないことから、器種不明と言わざるを得ない。課題として、形態や文様、施文技法から系統を整理し、産地推定あるいは工人の系譜の検討を行う必要がある。

③時期等について

奥の山古墳の出土須恵器については、今回の調査前には、概ねTK10型式とされてきた（註12）。今回出土した遺物については、S04無蓋高坏長脚一段透しの存在から、TK10型式古相として既に公表されている（註13）。埼玉古墳群の中で、MT15～TK10（古）と比定されている瓦塚古墳の直後に位置することから、円筒埴輪編年（註1・2）とも整合する。

④今後の検討課題

出土遺物について簡単にまとめたが、奥の山古墳の出土遺物を通して、従来編年観と同様の結果が得られた。今後の検討課題としては、埼玉古墳群全体を通しての埴輪、須恵器、武器、武具等の供給元の特定、変遷過程の追及が挙げられる。その結果に基づき、比企・大里地方をはじめとする隣接地の古墳、集落等との関係、東日本、西日本の主要古墳群との関係を整理する必要がある。これらの検討により、埼玉古墳群の特殊性あるいは普遍性が、より明確になると考えられる。

（註1）城倉正祥 2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』「2008～2010年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書（課題番号20720217）」

（註2）城倉正祥 2011「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第5号

（註3）前回報告の分類に準拠したため、城倉氏分類のA、B群とは逆である。

（註4）伝田郁夫・江原昌俊・城倉正祥 2011「続 比企の埴輪」『埴輪研究会誌』第15号 埴輪研究会

（註5）岡本健一 1997『将軍山古墳』史跡埼玉古墳群整備事業報告書

（註6）伝田氏、城倉氏より御教示を得た。勘違いがあったら筆者の責任である。

（註7）水村孝行他 1982『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第7号

（註8）井上裕一 1996「武蔵の馬形埴輪」『埴輪研究会誌』第2号 埴輪研究会

（註9）以下の文献では、壺は猿投産と特定している。

藤野一之 2014「猿投産須恵器からみた古墳出土須恵器」『駒澤考古』第38号

（註10）山田邦和 1989「裝飾付須恵器の分類と編年（上）・（下）」古代文化第41巻8・9号 古代学協会

（註11）井沢純他 2004『宮山中里遺跡・宮山台畑遺跡』「かながわ考古学財団報告」170

（註12）塩野博 2004『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』さきたま出版会

（註13）酒井清治 2014「古墳と須恵器」『シンポジウム埼玉古墳群の謎』

さきたま魅力アップ実行委員会